人間の現実的・生物的解析

主要部分

浅川朋彦

目次

- **概要**
- 基礎
- 人間の各機能
- 精神疾患・問題行動
- 社会
- 応用
- 結論

概要

- 人文・社会科学は厳密さにおいて自然科学・医学に劣っている。また自然科学・医学は全体としての整合性を持つが、人文・社会科学にはない。自然科学・医学が一体的な繋がりを持つのに比べて、人文・社会科学の繋がりは不明確である。
- これらを改善するため、人間の包括的・網羅的な理論解析を考案した。徹底した論理性・現実性と情報処理的手法に特徴がある。当解析は非常に難解であり、論理的な難解さと、普通から遠い難解さを兼ね備えている。
- 当解析は人間に関する事象を自然科学・医学の側に寄せて繋げ、人間を「現実化・生物化」するものである。人文・社会科学を含む、人間に関する様々な事象を包括的に解析した。現実と「メタな認識・規則」を使い、具体的な各種の精神疾患や社会構造などを説明できる。人間の現実化・生物化により解析を明確化でき、全体としての整合性を持たせる事ができる。これにより、人間に関する事象を自然科学・医学のように発展させる事が可能になる。
- 人間も一種の情報処理体と言えるので、情報処理の手法を応用して厳密な解析を行った。当解析は人間の情報処理的なリバースエンジニアリングに近い。厳密な演繹的論理構造を積み上げる事で、包括的・網羅的な理論解析を可能とした。

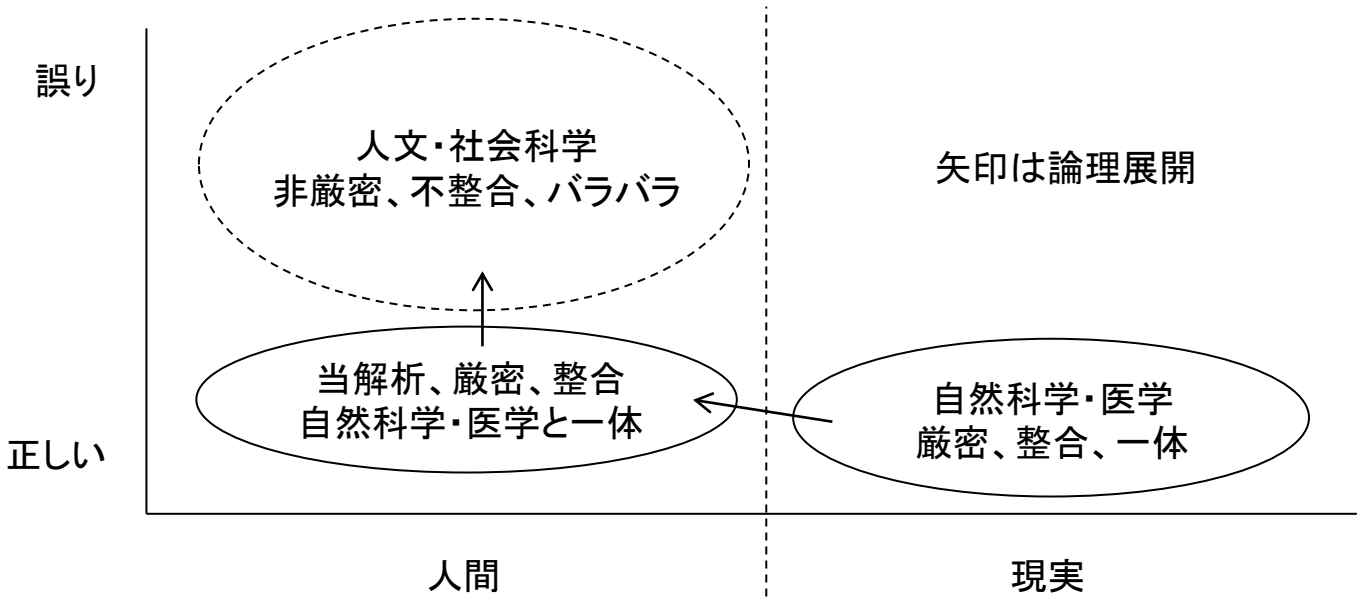
概要

【既存学問への適用】

- 機械学習・強化学習の概念を人間の解析に適用できる（概要～人間の各機能章）
- 精神疾患の多くを構造的に解析でき、薬物療法の意味が分かる（精神疾患・問題行動章）
- 「普通の人間」の正誤を分析できる（精神疾患・問題行動章）
- 生態学を社会科学に適用できる（人間の各機能～社会章）
- 経済・国家・産業の根本的構造が分かる（社会～応用章）
- 中国が自由民主主義なしで先進国に近い発展をした理由が分かる（応用章）
- 巨大都市への人口集約の問題と、その改善策が分かる（応用章）
- 移動・交通に関する都市・農村の構造分析ができる（応用章）
- 犯罪・暴力の問題を個人から社会まで複合的に解析できる（全体）
- 共通論理を持つ様々な定量分析を、個人から社会まで行える（全体）
- 共通論理を持つ様々なシミュレーションを、個人から社会まで作成できる（全体）

概要

【当解析の位置付け】



当解析は厳密・現実的で難解
厳密・現実的でないと当解析で検討不能、言葉の定義などが必要
事象と論理の間を埋める作業が難しい

概要

【当解析の位置付け】

- 自然科学・医学は厳密で整合、全体として一体的
  - 現実が対象で正しい
- 人文・社会科学は非厳密で不整合、全体としてバラバラ
  - 人間が対象で、相対的に誤っている
- 当解析は厳密で整合、自然科学・医学側に対して一体的
  - 論理展開は自然科学・医学を元にして人文・社会科学に向かう
- 当解析は厳密・現実的で難解
  - 厳密・現実的な議論でないと、当解析で検討できない
  - 厳密な言葉の定義や、論理への当てはめなどが必要
  - 事象に対して当解析の論理を当てはめるのが難しい
  - 既存の人文・社会科学の曖昧な議論では、当解析での評価もできない

概要

【論理構造と中核構造】

- 当解析は論理構造が通常と異なり難解
- 根本的に論理構造自体をメタに扱う、多方向の論理や方向転換
- 紛らわしい概念も多く、正しく理解するには論理を追う必要
- 適用部分だけ見ても正確には分からない
- それでも中核構造はある程度単純
- 精神疾患・犯罪・暴力・国家・戦争・貨幣・産業などが中核構造と関連

概要

【解析の意味】

- 理論解析として必要なのは全体としての整合性と具体性
  - これについては十分な検討ができている
- 細部の事象の検討は十分とは言いにくいが、具体的な検証が可能な状態
- 現代でも人間・社会には様々な問題が存在
  - 当解析を元に現実的・具体的分析をすれば、問題を改善できる
  - ただし当解析は難解なので容易でない
- 当解析は現代人にとって厳しい内容
- 当解析は「人間的で素晴らしいもの」でなく、「現実的・論理的で役立つもの」
  - 必要なのは「素晴らしい曖昧な人間」でなく「現実的・明確で整合した真の人間」
- 当解析が示す行先は現実的・生物的で整合した世界、普通から遠い世界
  - 普通から遠いため現実的・論理的に見ないと意味が分からない
  - 当解析は、普通の人間にとって感覚的・感情的に受け入れがたい内容
- 実際には普通レベルから問題の多い現代を、当解析により現実的に改善できる

概要
人間・現実と規則

特に重要なのは「人間・現実と規則」の解析
人間は曖昧で現実は明確、現実の明確さにより自然科学・医学は発展
人間も現実化・生物化すれば明確化・整合し発展できる
人間は知的生物
「現実化・生物化した人間」と現実に合うという制限下で、可能な限り明確な規則を作成

- 「現実化・生物化した人間」は生息状況として見るのが分かりやすい

概要
人間・現実と規則

- 「人間・現実と規則」の解析に基づく「人間に対する考え方の正誤」を以下に示す
- これも難解なので注意が必要

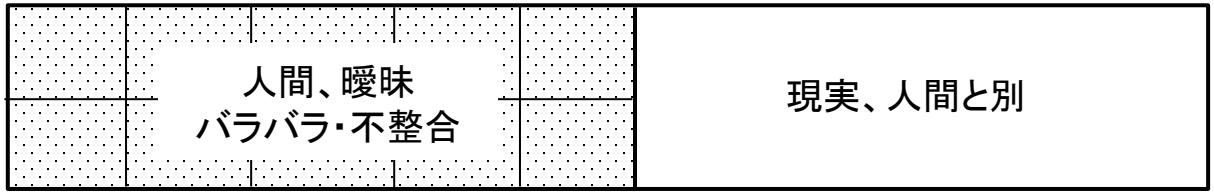
正誤	考え方	詳細
正しい	現実的かつ生物的	明確・整合、生息状況、真の人間・感情 知的生物
条件付	現実的	生物的なら正しい
	論理的、合理的	現実的かつ生物的なら正しい
誤り	人間的、感情的	曖昧・不整合
	機械的	生物的でない
	動物的、野性的、人間以外の生物的	知的でない

- 「人間・現実と規則」の解析については、本章の該当節で記載
  - この論理構造を理解する事が重要、当解析の中核、かつ当解析の方法論を示す
- 「人間・現実と規則」の解析による「人間が曖昧な理由」の簡単な説明
  - 人間の内部を明確に見る事ができないから

概要
認識の修正

認識：モデルの集合体、モデルの対象は認識の外

誤った認識



全体を修正

正しい認識

概要
認識の修正

- 当解析では認識をモデルの集合体とする、モデルの対象は認識の外
- 誤った認識において、人間は曖昧でバラバラ・不整合、現実は「人間と別のもの」と理解
  - この認識全体を修正
  - 人間の認識を「現実的・生物的な真の人間」に修正、人間全体で明確化・整合
  - 現実も人間と整合するように修正
  - これが正しい認識

概要
認識の修正

- 動物と人間の脳の先天的・後天的部分を比較
  - 「現実的・生物的な真の人間」は先天的部分、認識は後天的部分の一部
  - 動物の後天的部分は弱く、先天的部分に追従
  - 人間の脳の後天的部分はとても強い、先天的部分から独立して不整合
  - 後天的部分の根本問題、先天的部分に合わせる必要
  - 現実に対する科学技術は後天的部分の進歩によるもの、人間の生物的進化ではない
  - 後天的部分にはさらなる進歩が必要
- 認識の修正対象として自己の理解が重要だが、真の自己は分かりにくい
  - 自己の生息状況として見るのが分かりやすい
- 正しい認識が不十分なまま現実化すると、うつになる可能性
- 当解析を使えば、「正しい感情」や「誤り方」なども具体的に分析できる

概要
全体像

樹木に似た構造

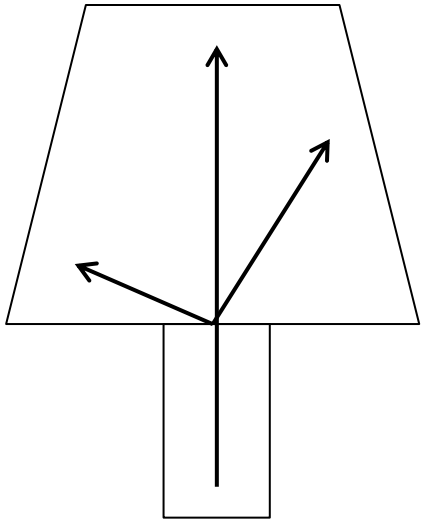
応用

社会

精神疾患・問題行動

人間の各機能

基礎



上側は枝葉、人間に関する事象への当てはめ
外部から見て分かりやすい

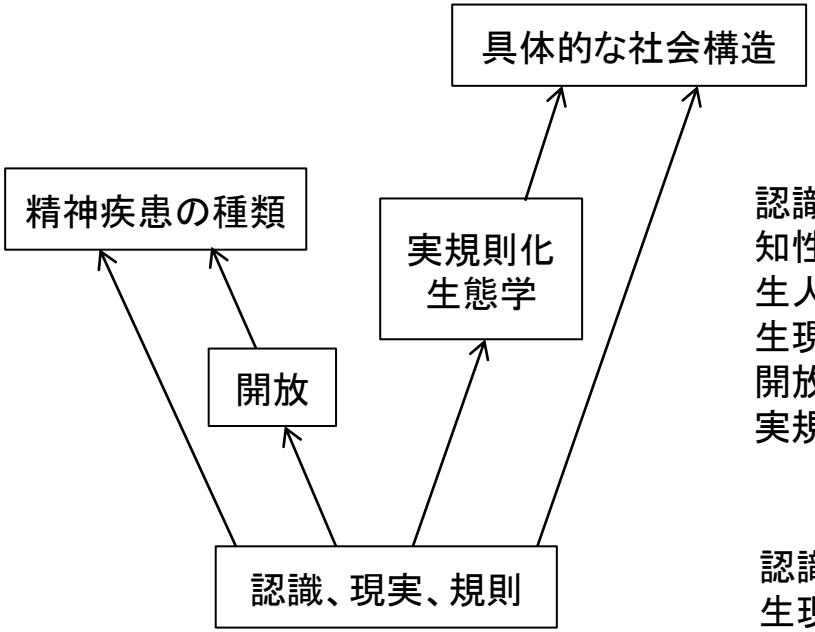
情報処理を応用した厳密な
演繹的論理構造の積み上げ

下側は幹、人間の基本構造
メタモデル検討、シミュレーションやAI的
外部から見て分かりにくい

中核構造は全体を貫通

人文・社会科学を含む、人間の包括的・網羅的な理論解析、情報処理的手法
自然科学・医学に寄せ人間を現実化・生物化・明確化、全体としての整合性
現実と「メタな認識・規則」を使い、具体的な各種の精神疾患や社会構造などを説明
全体は長く難解、上側と中核構造だけで、外部からある程度は理解可能

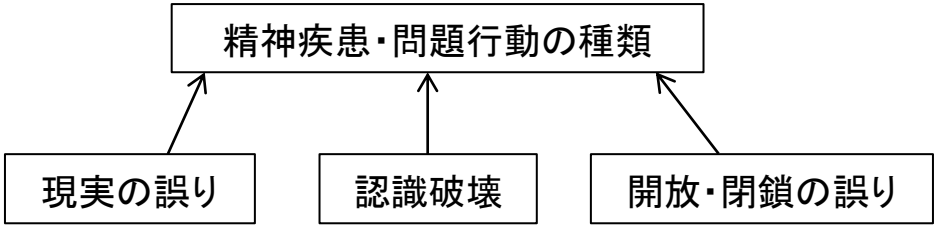
概要
中核構造の概要



認識　　:モデルの集合体、側頭連合野
知性　　:認識を含む脳全体の制御、前頭前野
生人間　　:現実化・生物化した人間、生息状況
生現実　　:生人間と現実
開放　　:生現実における各規則の相互影響
実規則化　:行動による生現実の規則化

認識・規則などをメタに扱う
生現実における明確な規則の発見が重要
生態学を応用して人間に適用

概要
中核構造、精神疾患・問題行動



精神疾患と問題行動をまとめて扱い、演繹的に一般化
精神疾患・問題行動の原因の一部は認識の誤り
うつ症状の原因は認識破壊、正しいと評価した認識がない、認識評価は知性
閉鎖は開放の逆で誤った理解
当解析は精神分析の総合性を代替

精神疾患・問題行動の原因を認識の誤りと見て、その種類を表で区分

種類	現実の誤り	認識破壊	開放・閉鎖の誤り	大区分
統合失調症	大きい		強い閉鎖	大きな認識の誤り
解離症	大きい		強い閉鎖、多閉鎖	
物質中毒	大きい		強い閉鎖	
双極性障害	大きい	あり	強い閉鎖	
従来型うつ		あり	社会への閉鎖*	中程度の閉鎖
新型うつ		あり	自己への閉鎖*	
犯罪、引き籠り、浪費			自己への閉鎖*	

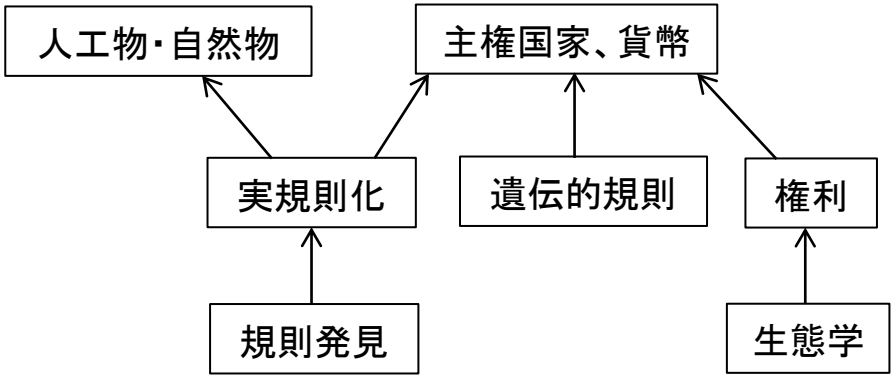
*正しいと評価した方が問題、認識破壊は破壊前、不良・善良も自己・社会への閉鎖の一種

概要
中核構造、精神疾患・問題行動

【利用案】

- 現実と自己の生息状況の理解による認識修正を検証
- 人間・現実までの開放理解による認識修正を検証
- 精神疾患・問題行動における閉鎖枠内外での現実の変形を検証
- うつにおける認識破壊を検証
- 精神疾患・問題行動における自己・社会の閉鎖を検証

概要
中核構造、社会



人工物は内部まで実規則化可能、自然物・人間は外部だけ実規則化可能
人間内部の遺伝的規則は変更できない、外部は変更できる
権利を「行動資源の優先度」と定義、動物の縄張りや順位など
遺伝的権利は暴力が付随、実規則化権利は暴力を止めて破壊抑制
主権国家は実規則化権利を規定、国家間は暴力が残る、戦争
貨幣は権利交換のための実規則化権利、地位のように貨幣にならない権利もある
需要・供給は貨幣以前の行動資源から存在し、生物でも存在
貨幣は人間・現実の中間、現実的権利の方が明確、物・時空間の所有量など
第一・二・三次産業を自然物・人工物・人間で分析

概要
中核構造、社会

【利用案】

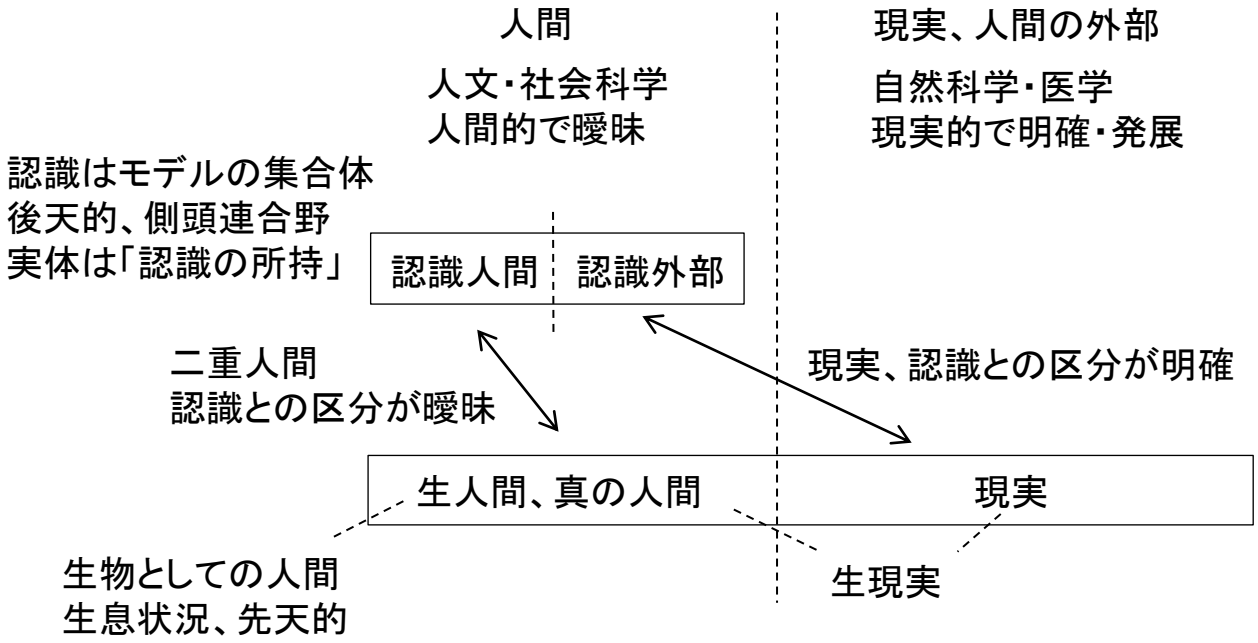
- シミュレーションで実規則化・人工物・自然物を試行し実態と比較
- 貨幣以外の権利における需給を検証
- 生物における需給・権利を検証し人間と比較
- 物・時空間の所有量、生物的権利、養育人数など、様々な現実的権利を分析
- 実規則化・権利・国家などを使った歴史・世界の統一的解釈
- 壊れて困る権利の所有量と暴力抑制の検証
- 第一・二・三次産業における人工物・自然物・人間の多寡・価値を比較
- 人・物・時空間・現実的サービスなどの増減と出入りを分析
- 貨幣的な発展に対して、人口・現実的権利の増加が連動しているかを検証
- 現実的権利の増減に基づく仕事の必要性判別
- 犯罪を暴力・閉鎖・問題行動・権利・国家などで複合的に検証

概要
中核構造の流れ

- 認識と規則を解析、論理構造自体をメタに扱うための準備
- 認識と人間・現実の構造を解析、人間の現実化・生物化が必要
- 無認識感情を解析、無認識感情は認識を止めた感情
- 規則から開放・閉鎖を解析、開放が正しく閉鎖は誤り
- 開放・閉鎖は物理的手法を当解析に応用したモデルの一つ
- 正しい・誤りと評価した認識と、付随する満足・不満を解析
- 認識の正誤から精神疾患・問題行動や薬物療法を解析、現実・開放などを使用
- うつ症状の原因として認識破壊を解析
- 精神疾患・問題行動の具体的な種類と治療方法を解析
- 規則発見から実規則化を解析、実規則化から人工物・自然物・人間を解析
- 人間外部の行動実規則化を解析、遺伝的規則と実規則化を比較
- 生態学を応用して参加・不参加や権利を解析
- 参加・不参加・権利・実規則化を組み合わせ、多くの具体的な社会構造を解析
- 特に権利が重要で、実規則化権利から貨幣・主権国家などを解析
- 規則と生態学の多様性について解析、集約・分散を解析
- 人工物・自然物・人間を元に産業を解析
- 大都市の集約・分散を解析

（今までの説明より少し広く記載）

概要
「人間・現実と規則」の解析、人間・現実



二重人間が人文・社会科学の曖昧さの根本原因
人間に関する事象の生現実化、自然科学・医学と繋げて整合
人間の生現実化による明確化と発展、曖昧な人間的概念は不要
現実を見るだけでは不十分、人間の生現実化が必要
誤った認識を壊すのではなく、正しい認識を作る

概要
「人間・現実と規則」の解析、人間・現実

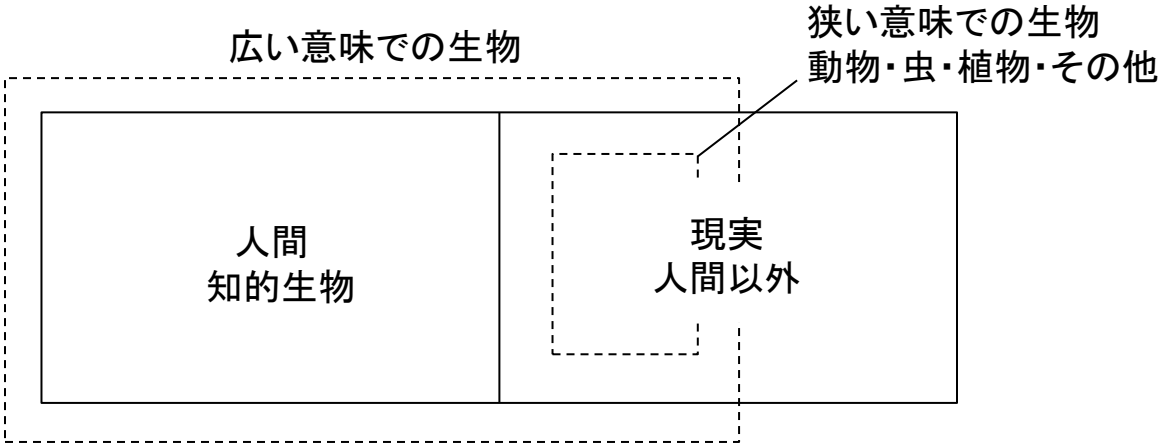
- 当解析で最も重要な概念は、曖昧な二重人間と明確な現実である。これが人間に関する事象の正しい方向性を示すものとなる。
- 人間の外部を「現実」とし、人間と現実の比較を行う。人間は内部に認識を所持しており、認識の上に、人間と外部の現実が再現されている。認識はモデルの集合体であり、後天的である。認識の機能は側頭連合野にある。認識の内容は「認識の外側」を再現しているだけで、実在はしていない。実在しているのは「認識の所持」だけである。
- 認識上の人間でない真の人間を「生人間」と呼び、生人間と現実を合わせて「生現実」と呼ぶ。生人間は先天的な生物としての人間であり、人間を外部から見た生息状況である。現実は人間の外部にあるので、認識との区別が明確である。生人間は認識人間と同様に人間の内部にあるため、認識との区別が曖昧になる。人間の内部で認識人間と生人間が二重化している状態を「二重人間」と呼ぶ。二重人間は人間の本質的問題であり、一部の認識人間だけの問題ではない。

概要
「人間・現実と規則」の解析、人間・現実

- 人文・社会科学は人間を対象としており、そのままでは人間的で曖昧になる。自然科学・医学は現実を対象としており明確である。医学の対象は人間だが、方法論が生物学から来ているために現実的になる。人間の解析も生現実化すれば明確にでき、自然科学・医学と繋げて整合性を得る事ができる。これにより曖昧な人間的概念は不要になる。現実を見るだけでは人間側が修正できず不十分である。人間を生現実化し認識を修正する必要がある。誤った認識を壊すのではなく、正しい認識を作るべきである。

人間は曖昧で現実は明確、現実の明確さにより自然科学・医学は発展
人間的な認識は誤りであり、現実的・生物的な認識が正しい
人間も生現実化すれば明確化・整合、生息状況が改善し発展できる

概要
「人間・現実と規則」の解析、知的生物



人間の生現実化、生物化であり機械化ではない
知性は「認識を含む脳全体」の制御、後天的、前頭前野、AIの教師、自動思考
人間は強い知性のため動物と異なる、動物化でもない
強い知性により高度な認識、暴走により生現実から乖離

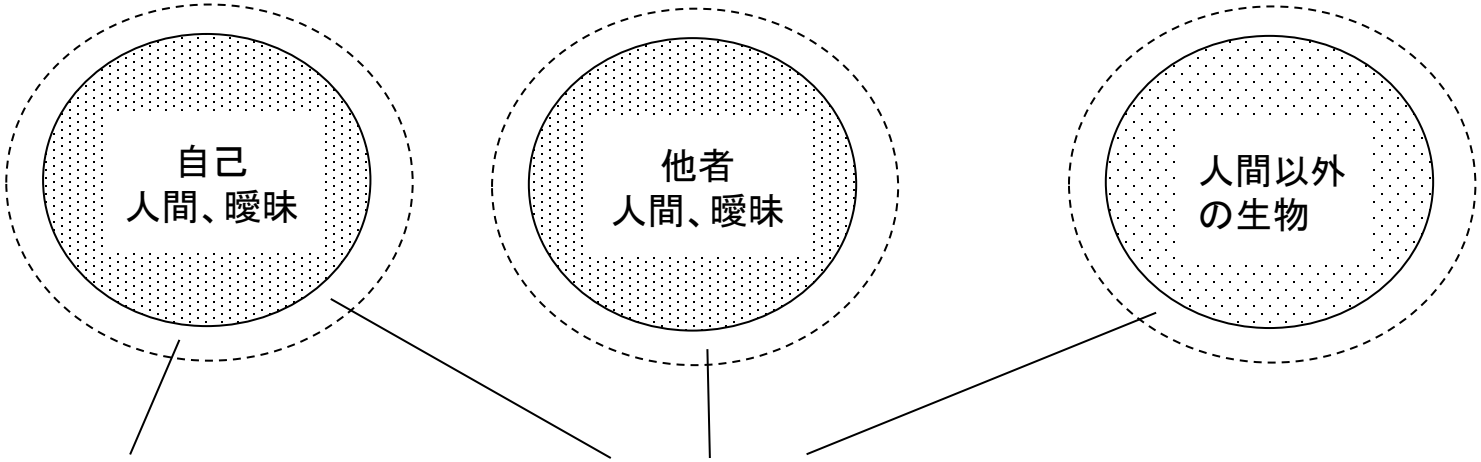
概要
「人間・現実と規則」の解析、知的生物

- 一般に生物と言った場合、人間以外の生物を示す。生物学の研究範囲は基本的に人間以外である。狭い意味での生物は人間以外であり、これは現実の一部である。狭い意味での生物には、動物・虫・植物などがある。広い意味での生物には人間も生物に含まれる。
- 知性を「認識を含む脳全体」の制御とする。認識・知性とも後天的である。知性の機能は前頭前野にある。知性はAIの教師や、認知療法の自動思考に近い。人間は強い知性のため通常の動物と異なり、特殊な知的生物である。動物化でもなく生物化が必要である。強い知性により高度な認識を持つ事ができるが、暴走により認識が生現実から乖離する可能性もある。
- 人間的なこだわりは認識人間における感情の中にあり、これを無くすべきである。認識を止めた感情を理解する必要がある。

人間は知的生物である
人間の生現実化とは、生物化であり機械化ではない
人間的なこだわりを無くす事で現実化・生物化

概要
「人間・現実と規則」の解析、知的生物、生息状況

現実は人間以外

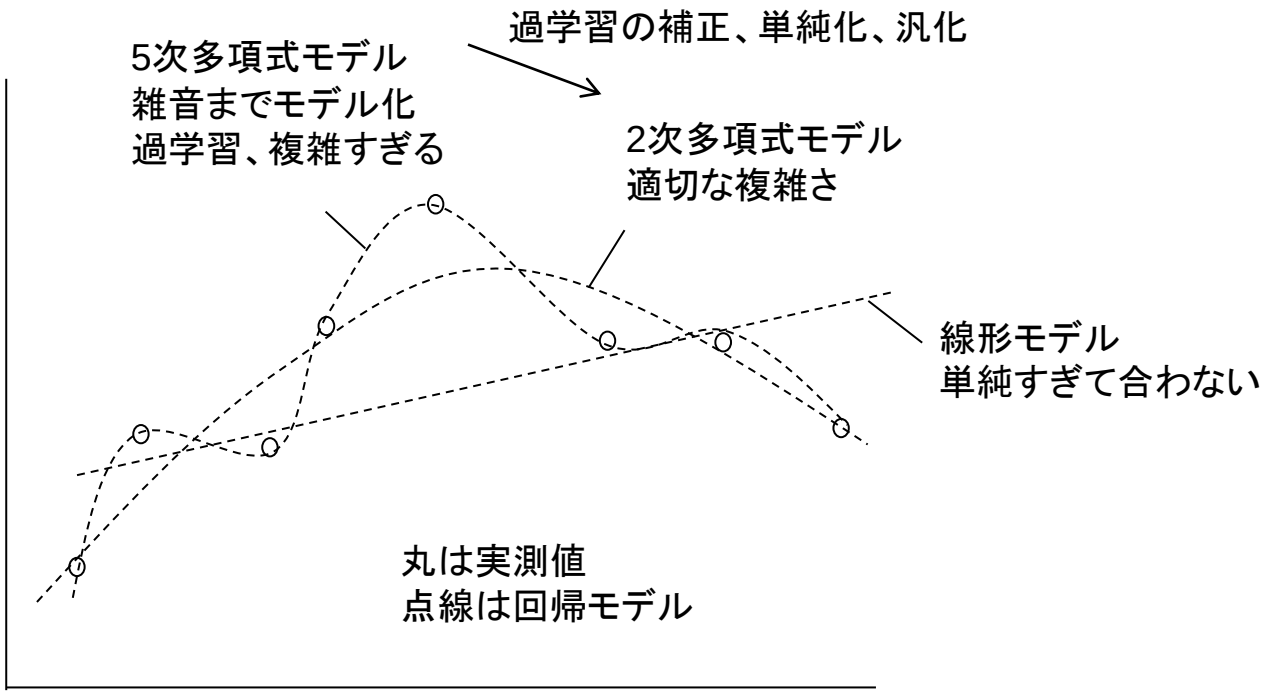


自己の生息状況
最も重要

生息状況
生物を外から見た状況

人間以外の生物も内部は見えにくい、生息状況で判断している
人間も同様にすべき、客観的でなく現実的・生物的、客観は他者を含む

概要
「人間・現実と規則」の解析、規則



情報理論では、情報量・複雑さ・曖昧さが本質的に近い
生現実に合うという制限下で、可能な限り単純・明確な規則を作成

概要
「人間・現実と規則」の解析、規則

- 解析では規則も重要な概念である。これは機械学習の方法論に基づいている。
- 機械学習においては学習パラメータが多すぎて汎化できない状態を過学習と呼び、複雑なモデルを可能な限り単純化する事が求められる。過学習と汎化について、連続変数を予測する回帰モデルで説明する。次図の例では線形モデルは単純すぎる。5次多項式モデルでは雑音までモデル化しており、過学習で複雑すぎる。2次多項式モデルが適切である。
- 情報理論における情報量またはエントロピーは、事象の曖昧さ・混沌さを表す量である。これは複雑さと曖昧さが本質的に近いことを意味する。

生現実に合うという制限下で、可能な限り単純・明確な規則を作成

概要
解析の方法論

【人間・現実と規則】

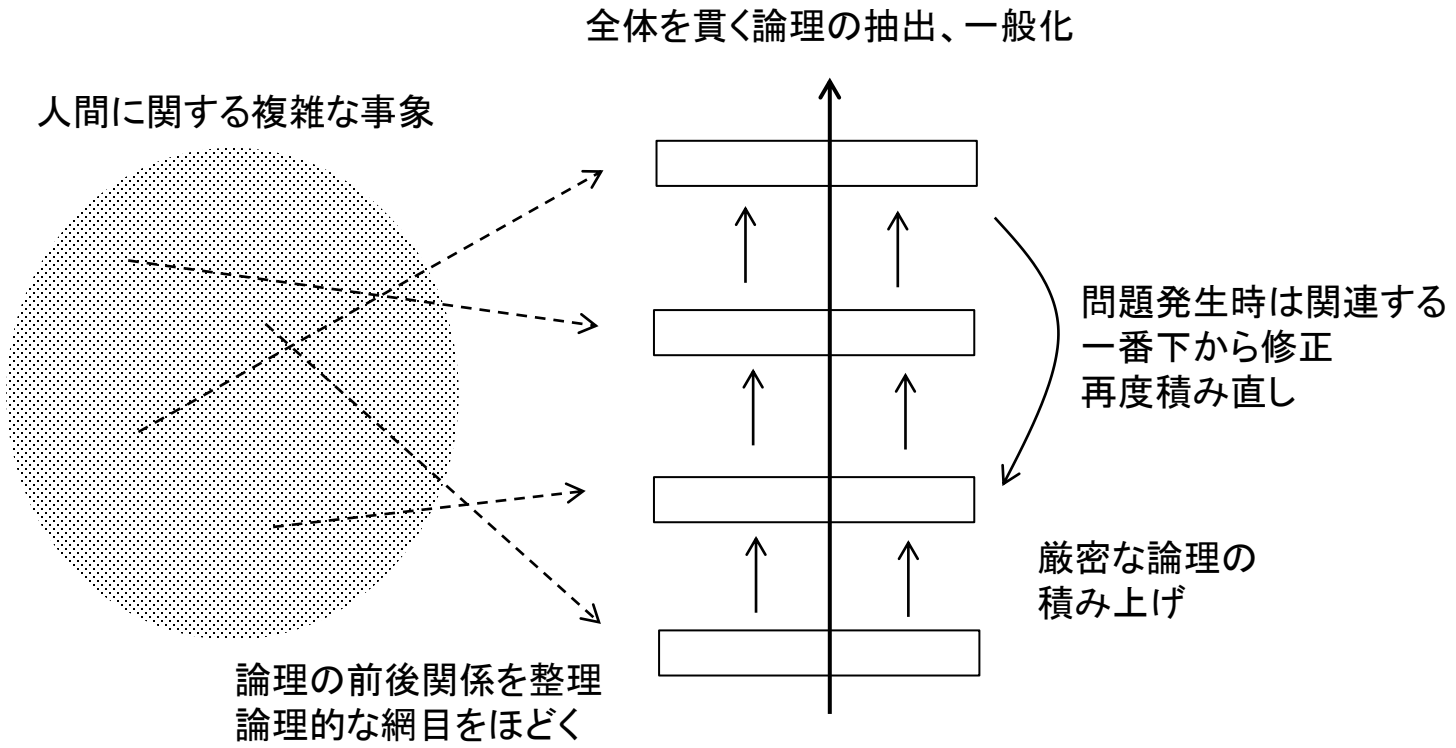
- 方法論として最も重要なのは人間の生現実化、自然科学・医学の手法を人間に応用
  - 神経科学による脳の構造、物理的手法、生態学などを人間に応用
- 人間と現実の構造は、解析自体に置いても重要
  - 人間的事象と現実的事象を区分する事で、これらの正しさの違いを明示
- 規則の方法論も重要であり、当解析の全体像にも詳細にも深く影響
  - 当解析の全体像では、人間の複雑な基本構造に対して、単純な中核構造を導入
  - 当解析の詳細では、中核構造の一部である規則・実規則化の論理構造の元

【情報処理の応用】

- 機械学習の応用については前述の通り
- それ以外に、情報処理の図を応用した構造の明示、ブロック図や模式図など
- 数学と普通の論理の中間的な性格を持つ論理として情報処理
- 情報処理の設計技法を、人間の解析用に修正、ある程度の厳密さ

概要
解析の方法論

【演繹的論理構造】

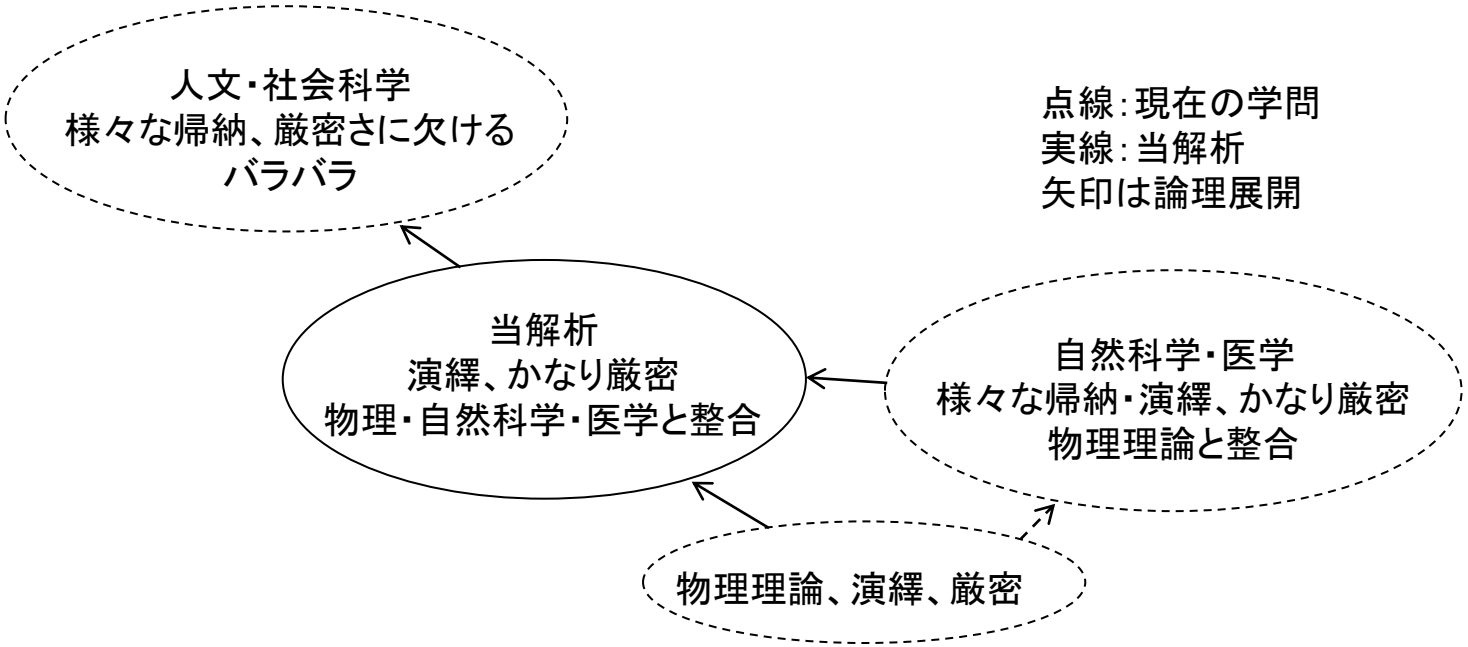


概要
解析の方法論

【演繹的論理構造】

- 帰納より演繹の方が、実体的根拠が多く厳密
- 人文・社会科学は一般的に帰納的、自然科学・医学の根幹は演繹的
- 演繹的論理構造を構築する手順
  - 人間に関する論理の前後関係を整理
  - 並べた事象に対して情報処理的な図と言葉による厳密な論理化
  - 問題発生時は関連する一番下の部分を修正し、演繹的論理構造を積み直し
  - 最後に全体を貫く論理を抽出
- すべての記述において、可能な限り前に出てきた概念だけで説明

概要
利用方法



当解析は学問全体と連携、学際的利用が可能
定性的解析だが厳密で情報処理的、定量的に利用できる
言葉・論理を厳密に理解しないと、定性的にも利用できない
「現実化・生物化した人間」に対して、厳密に解析を当てはめる必要
対象は人間だが、現実的理論・法則と同様の利用方法

概要
利用方法

- 人間に関する学問の根幹に入る事ができる
  - 論理展開は自然科学・医学を元にして人文・社会科学に向かう
  - 学問全体と連携、学際的利用が可能
- 当解析は定性的だが厳密で情報処理的、多数の情報処理的モデルの集合体
  - 定量的に数値比較・統計・データ科学などで利用できる
  - 情報処理的なのでシミュレーションなどによる利用もできる
- 言葉・論理を厳密に理解しないと、定性的にも利用できない
  - 論理構造が重要、表面的に適用部分を理解しても、正確な意味は分からない
  - すべての論理を追うのは困難、部分的な論理を正確に追って利用すべき
  - 中核構造を見れば部分的な論理でも全体の流れが分かる
- 「現実化・生物化した人間」に対して、厳密に当解析を当てはめる必要
  - 対象は人間だが、現実的理論・法則と同様の利用方法
    - 物理学でも厳密に物理的数値を取得し、適切な数式を選ばないと利用できない
  - 人間に関する事象が簡単に分かる訳ではなく、当解析への当てはめ方を検討する必要
- 一例として「人口と大都市数」だけ簡単な定量的解析を行っている
  - 「人口と大都市数」が定量的に扱いやすいため

概要
当解析の研究の経緯

- 非常に難解なので研究を進めるのは大変だった、20年以上の年月
  - 発端は心理学を情報処理により整理
  - 自分の考え方自体が研究の対象、自分の考えに合わせる行為は行っていない
- 幹となる基本構造の研究を試行、心理学に収まらない
  - 演繹的論理構造を積み上げれば対象が膨大でも対応できる
  - 人間に関する事象を包括する理論解析を目指す
- 最終的な内容ができたのは、データ科学や機械学習を理解してから
  - 中核構造の導入や規則・実規則化の解析が可能になった
- 普通・満足の問題の解析は最終盤、自分自身においても納得するのは困難
  - とても苦労しながら解析
- 出発点は心理学であり、普通の人文・社会科学に近い、それほど厳密でない
  - 最終的に、自然科学・医学に近づき、厳密
  - 心理学に収まらず、人間に関する事象を包括する内容、人間全体の整合性
- 研究の前半はモデル検討を中心、人間に関する事象への明確な当てはめは終盤
- 人間の生現実化・包括性・厳密さ・整合性・普通からの遠さは最終的な特徴
  - これらを目指した訳ではない、過去の研究と最終形態は大きく異なり、結論も違う
  - 理論解析を実用に足るレベルにするには、これらの内容に至る必要があった

概要
「基礎」章の要約と利用案

【要約】 （解析全体の要約、当スライドの内容は主に茶色）

- 神経科学による脳の構造を情報処理的に解析する。主要な機能である知性・認識・感情・感覚・行動を解析する。これらの情報処理的な全体像を作る。
- 知性・認識・感情・感覚・行動の構造を解析する。生人間・生現実と二重人間の構造や、無認識感情などを解析する。知性による認識の正しい生現実化について解析する。
- これと並行して、規則について解析する。規則は認識内の推論を正しく行うために重要である。正しさ・生満足・明確・曖昧・単純・複雑などの基本的内容を解析する。
- 規則の延長として、物理的手法を当解析に応用するためのモデルを解析する。これは開放・閉鎖・変数時空・多要素・近辺・遠方・局所・広域などである。開放・閉鎖は重要で、生現実における各規則の相互影響の有無を示す。生現実は常に開放しており、閉鎖した認識は誤りである。開放は精神疾患などの分析で多用される。
- これと並行して、規則化を行うための規則発見と実験選択について解析する。実験選択は遺伝的多様性に相当する生態学的な概念である。
- 多要素を人間に適用した多個人を使用し、社会の基礎的な解析を行う。

概要
「基礎」章の要約と利用案

【利用案】（当スライドでなく解析全体の利用案）

- 開放・閉鎖認識の空間と時間の連動を検証
- シミュレーション・AIで規則発見と実験選択を試行し生物・人間と比較
- 知性により誤解が強化されるかを大人・子供・動物で検証

概要
「人間の各機能」章の要約と利用案

【要約】（解析全体の要約、当スライドの内容は主に茶色）

- 人間の機能のうち、感情・行動・認識・知性について詳細に解析する。感情種類や地味感情を解析する。
- 物理的手法を応用した近辺・遠方・局所・広域と、行動を組み合わせた解析を行う。その中で暴力の問題を解析する。
- 行動の延長として実規則化を解析する。これは行動により生現実の一部を規則化するもので、社会の解析において重要になる。人工物・自然物・人間に対する実規則化の差異を解析する。
- 認識・知性について、認識知性伝達や認識遷移を使って詳細に解析する。認識遷移は情報処理の状態遷移図を認識に応用したもので。認識・知性の解析において多用される。認識遷移と現実・開放の組み合わせが重要である。
- 認識・知性・感情・満足を合わせた正・誤評性を解析する。正・誤評性は認識による満足の増減分であり、精神疾患などの分析で多用される。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。
- 物理的手法を応用した近辺・遠方・局所・広域と、認識遷移を組み合わせた解析を行う。
- 対人関係や多個人における認識・知性のあり方を、認識遷移を中心にして解析する。

概要
「人間の各機能」章の要約と利用案

【利用案】 （当スライドでなく解析全体の利用案）

- 無認識感情と感情種類開放の関係を検証
- 開放・閉鎖認識における感情種類と外部現実の連動を検証
- AIの強化学習で短期・長期生満足や行動最適化を試行し人間と比較
- シミュレーション・AIで短期・長期・下落成果を試行し人間と比較
- シミュレーション・AIで局所・広域での開放・閉鎖と行動最適化を試行し人間と比較
- シミュレーションで実規則化・人工物・自然物を試行し実態と比較
- 質問票による認識遷移図の作成
- シミュレーション・AIで正・誤評性や現実の変形を試行し人間と比較
- 満足側・不満側感情種類と正・誤評性の関係を検証
- 時間開放・閉鎖と移動時間系・固定時間系を検証
- 対人での共有・非共有状態と開放・閉鎖の関係を検証
- 最終状態の分布と多個人多閉鎖を検証

概要
「精神疾患・問題行動」章の要約と利用案

【要約】（解析全体の要約、当スライドの内容は主に茶色）

- 精神分析・心理学・正常・異常と認識の正誤について解析する。精神疾患と問題行動をまとめて扱っている。認識を正しくする事による精神疾患・問題行動の修正について解析する。認識の正誤を判定する手段として現実・開放・閉鎖を使用する。正常・異常・普通について分析し、その手段として正・誤評性などを使用する。恒常性・薬物療法・満足や、原因・症状の治療などを分析する。認識の修正方法の詳細を、認識遷移を使って解析する。
- 認識の誤りと問題の種類について、認識遷移を使って解析する。現実・開放・閉鎖と正・誤評性を使う。大うつは認識が破壊され、正しいと評価した認識がない状況と見なす。感情は人間的で正誤が不明確であるため、認識の誤りでなく問題として捉える。
- ここまでの解析をまとめて、精神疾患・問題行動と療法について解析する。

【利用案】（当スライドでなく解析全体の利用案）

- 現実と「自己の生息状況」の理解による認識修正を検証
- 「曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ」による認識修正を検証
- 「人間的認識による生不満」の理解による認識修正を検証
- 「満足感でなく自己の生息状況」による認識修正を検証

概要
「精神疾患・問題行動」章の要約と利用案

【利用案】（当スライドでなく解析全体の利用案）

- 様々な普通の満足による閉鎖分断・不整合を検証
- 精神疾患・問題行動における満足の問題点を検証
- 人間・現実までの開放理解による認識修正を検証
- 無認識感情による認識修正を検証
- 現実的な部屋の整理・掃除による認識修正を検証
- 植物・動物から生物的な感情に繋げる事による認識修正を検証
- 時空間の近辺・遠方開放による認識修正を検証
- 「自然の中で現実を見てこだわりを無くす事」による認識修正を検証
- 精神疾患・問題行動における閉鎖枠内外での現実の変形を検証
- うつにおける認識破壊を検証
- 精神疾患・問題行動と感情種類開放・閉鎖の関係を検証
- 特定の感情種類への閉鎖に対し、開放による認識修正を検証
- 地味感情まで含めた開放的な感情種類による認識修正を検証
- 「一点で高い満足でなく全体での満足」による認識修正を検証
- 精神疾患・問題行動における局所広域閉鎖を検証

概要
「社会」章の要約と利用案

【要約】（解析全体の要約、当スライドの内容は主に茶色）

- 社会の構造について、行動自体の実規則化である行動実規則化を中心として解析する。人工物の実規則化を含め、実規則化はこの章全体で使用している。行動における遺伝的規則と実規則化の比較が重要である。
- 行動資源・需要・供給・共同行動・参加・不参加について解析する。
- 行動実規則化と人間・現実を合わせて解析し、因習の問題を提示する。
- 多環境適応と多様性について解析する。多環境適応は種の多様性に相当する生態学的な概念である。規則性の低い規則である多様性と、人間が求める規則との関係を分析する。その延長として多個人の集約・分散について解析する。
- 権利・競争・需要・供給について解析する。権利を「行動資源の優先度」と定義する。権利は生態学とも関係する重要な概念である。実規則化権利の構造を共同行動・暴力と組み合わせて解析する。権利と貨幣・価値・現実・自然物・人工物・人工物・多様性などを組み合わせて解析する。
- ここまでの解析を用いて集団・社会を解析する。主権国家・勤務集団・家族・固定集団などについて解析する。集団・社会と人間・現実・開放・閉鎖・認識などを組み合わせて解析する。

概要
「社会」章の要約と利用案

【利用案】 （当スライドでなく解析全体の利用案）

- シミュレーションで行動資源と需要・供給を試行し生物・人間と比較
- シミュレーションで共同行動への参加・不参加と需要・供給を試行し人間と比較
- 貨幣以外の権利における需給を検証
- 生物における需給・競争・権利を検証し人間と比較
- シミュレーションで怠慢を試行し人間と比較
- シミュレーションで多環境適応を試行し人間と比較
- 生物の遺伝的多様性・種の多様性を人間の実験選択・多環境適応と比較
- 生物の制限付き権利を検証し人間と比較
- 物・時空間の所有量、生物的権利、養育人数など、様々な現実的権利を分析
- 対自然物・対人工物・対人間の権利と、人口増加の関係を検証

概要
「社会」章の要約と利用案

【利用案】 （当スライドでなく解析全体の利用案）

- 実験選択・多環境適応における小権利の必要性を検証
- 小権利の離反と国家内暴力を検証
- 勤務集団と家族の途上国・先進国での差を検証
- 様々な固定集団の程度と問題点を検証
- 実規則化・参加・不参加・権利・国家などを使った歴史・世界の統一的解釈
- 壊れて困る権利の所有量と暴力抑制の検証

概要
「応用」章の要約と利用案

【要約】（解析全体の要約、当スライドの内容は主に茶色）

- ここまでの解析を人間に関する事象の様々な分野に応用する。宗教・民族・家族・経済・政治・法・国際などを解析する。人文・社会科学以外の分野にも応用する。自然科学・数学・情報処理・産業・都市・農村などを解析する。最後に総合的な応用として、文化・学問・教育・歴史・未来などを解析する。

【利用案】 （当スライドでなく解析全体の利用案）

- 国家の多数派・少数派と開放・閉鎖を検証
- 様々な家族・準家族による養育の状況を検証
- 女性の社会進出における勤務者1人当たりの養育人数と出生率の変化を検証
- 経営者・従業員の立場を含む企業の様々な権利を検証
- 様々な権利交換・市場における単純化の程度を検証
- 欧米の実規則化階層構造と実験選択・多環境適応の関係を検証
- 先進国から途上国における人間的・現実的な伝達を検証

概要
「応用」章の要約と利用案

【利用案】（当スライドでなく解析全体の利用案）

- 可換・原料・その他自然物と人工物の需給・価値を検証
- AIを知性・認識・開放・認識遷移などで検証し人間と比較
- 農村での人工物・自然物の混在と区分けを検証
- 第一・二・三次産業における人工物・自然物・人間の多寡・価値を比較
- 農村・工場・都市における自然物・人工物・人間の多寡・価値を比較
- 文芸系の様々な閉鎖種類と閉鎖の程度を検証
- 教育の分野ごとの仕事における利用度を検証
- 人・物・時空間・現実的サービスなどの増減と出入りを分析
- 貨幣的な発展に対して、人口・現実的権利の増加が連動しているかを検証
- 現実的権利の増減に基づく仕事の必要性判別
- 出生率と時空間・現実的権利の関係を検証
- 出生率と大都市・実家までの移動時間の関係を検証
- 大都市への移動時間による発展・衰退状況を検証
- 先進国・途上国の行動実規則化と法・因習・宗教・マスメディア・ネットなどとの関係を検証
- 犯罪を下落成果・暴力・閉鎖・問題行動・権利・国家・教育などで複合的に検証

目次

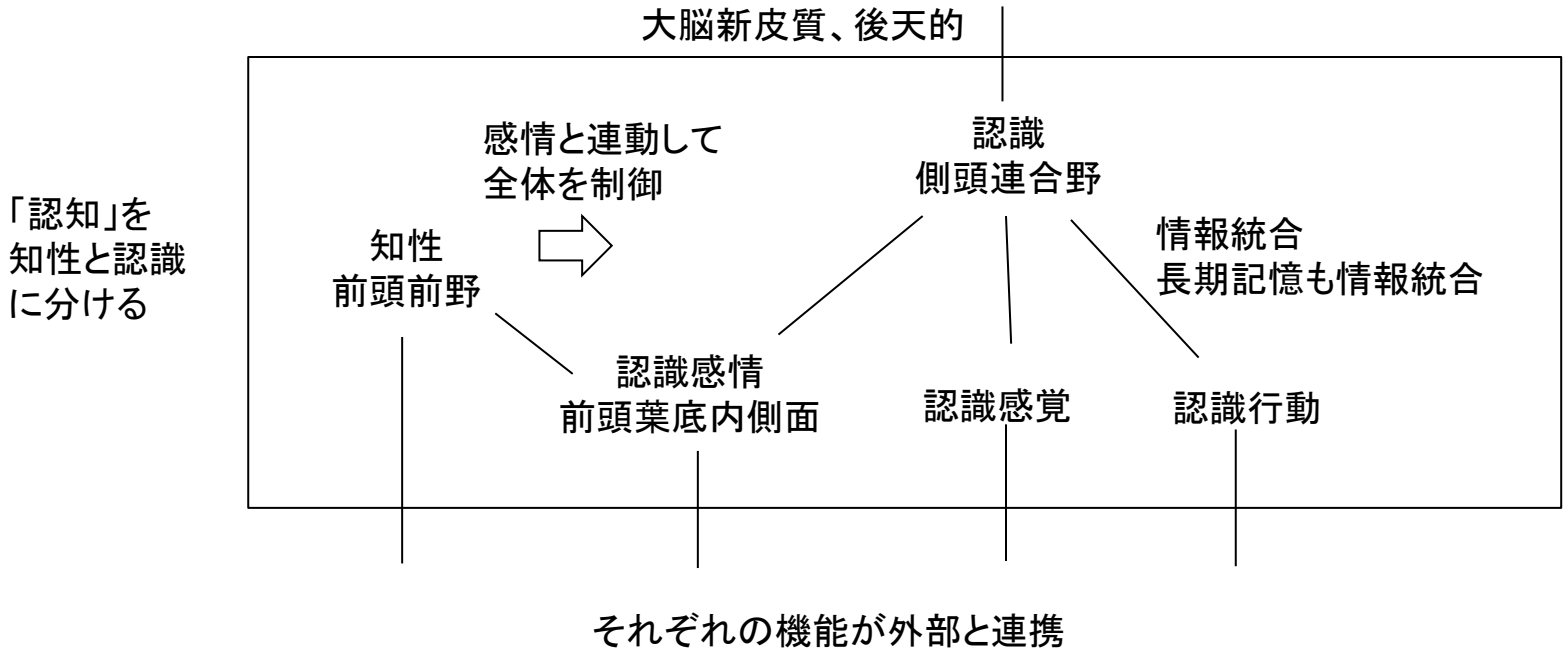
- 概要
- **基礎**
- 人間の各機能
- 精神疾患・問題行動
- 社会
- 応用
- 結論

【各章の要約再掲】

- 神経科学による脳の構造を情報処理的に解析する。主要な機能である知性・認識・感情・感覚・行動を解析する。これらの情報処理的な全体像を作る。
- 知性・認識・感情・感覚・行動の構造を解析する。生人間・生現実と二重人間の構造や、無認識感情などを解析する。知性による認識の正しい生現実化について解析する。
- これと並行して、規則について解析する。規則は認識内の推論を正しく行うために重要である。正しさ・生満足・明確・曖昧・単純・複雑などの基本的内容を解析する。
- 規則の延長として、物理的手法を当解析に応用するためのモデルを解析する。これは開放・閉鎖・変数時空・多要素・近辺・遠方・局所・広域などである。開放・閉鎖は重要で、生現実における各規則の相互影響の有無を示す。生現実は常に開放しており、閉鎖した認識は誤りである。開放は精神疾患などの分析で多用される。
- これと並行して、規則化を行うための規則発見と実験選択について解析する。実験選択は遺伝的多様性に相当する生態学的な概念である。
- 多要素を人間に適用した多個人を使用し、社会の基礎的な解析を行う。

（当スライドの内容は主に茶色）

基礎
脳と認識・知性

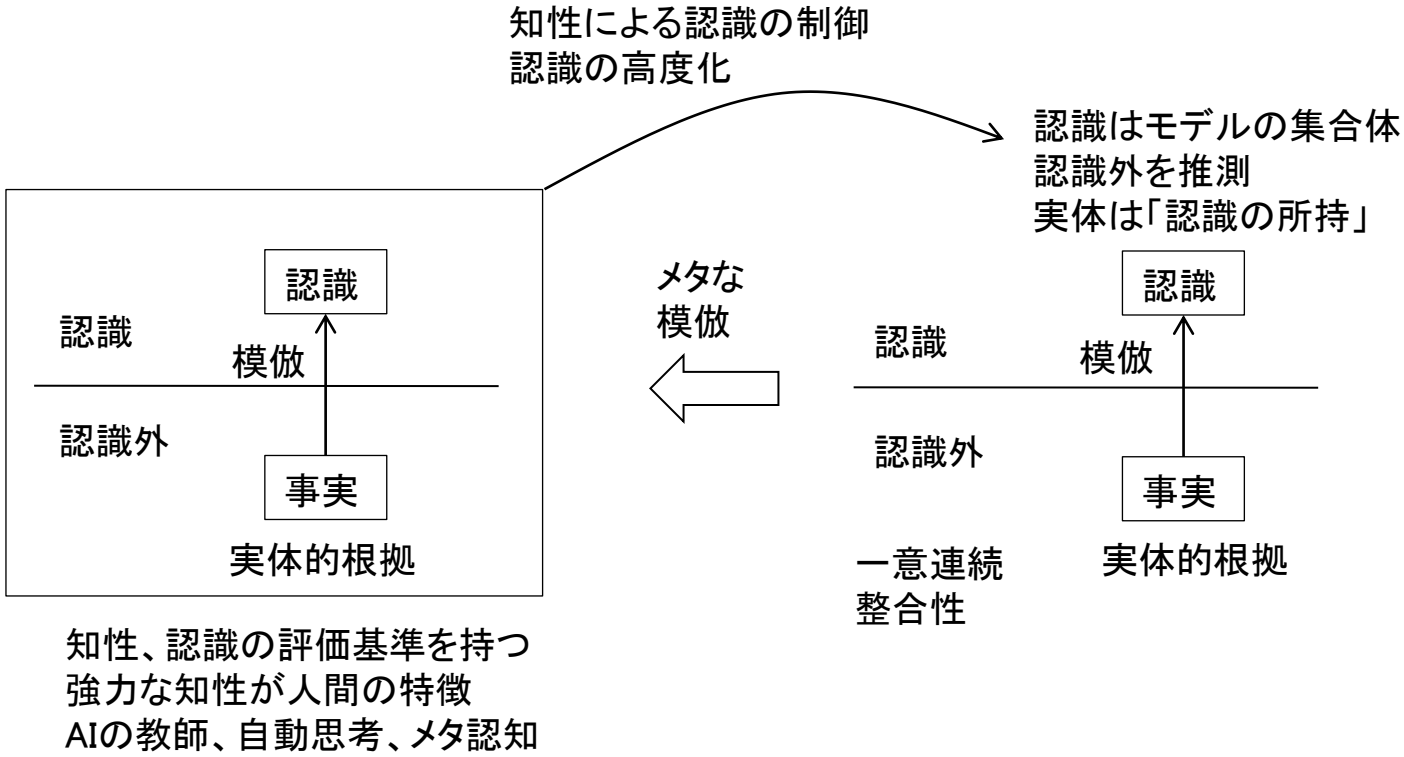


認識感覚：頭頂連合野で情報統合
ウェルニッケ野、一次聴覚野、聴覚連合野、中心後回、後頭葉
認識行動：ブローカ野、運動前野、運動野

基礎
脳と認識・知性

- 大脳新皮質、記憶や高度情報処理、ニューロンなので処理機能も含む、後天的
- 「認知」を知性と認識に分ける
- 知性は前頭前野の全体制御機能、認識は側頭連合野の情報統合機能
- 一般的な言葉を使う、神経心理学の情動・運動を感情・行動と呼ぶ
- 大脳新皮質には感情・感覚・行動に関する情報、これらを統合する事で認識
- 知性は感情と連動して全体を制御
- 感情・感覚・行動は大脳新皮質の外にもある、遺伝的感情など
- 知性は人間の中で最も重要な機能、強力な知性が人間の特徴

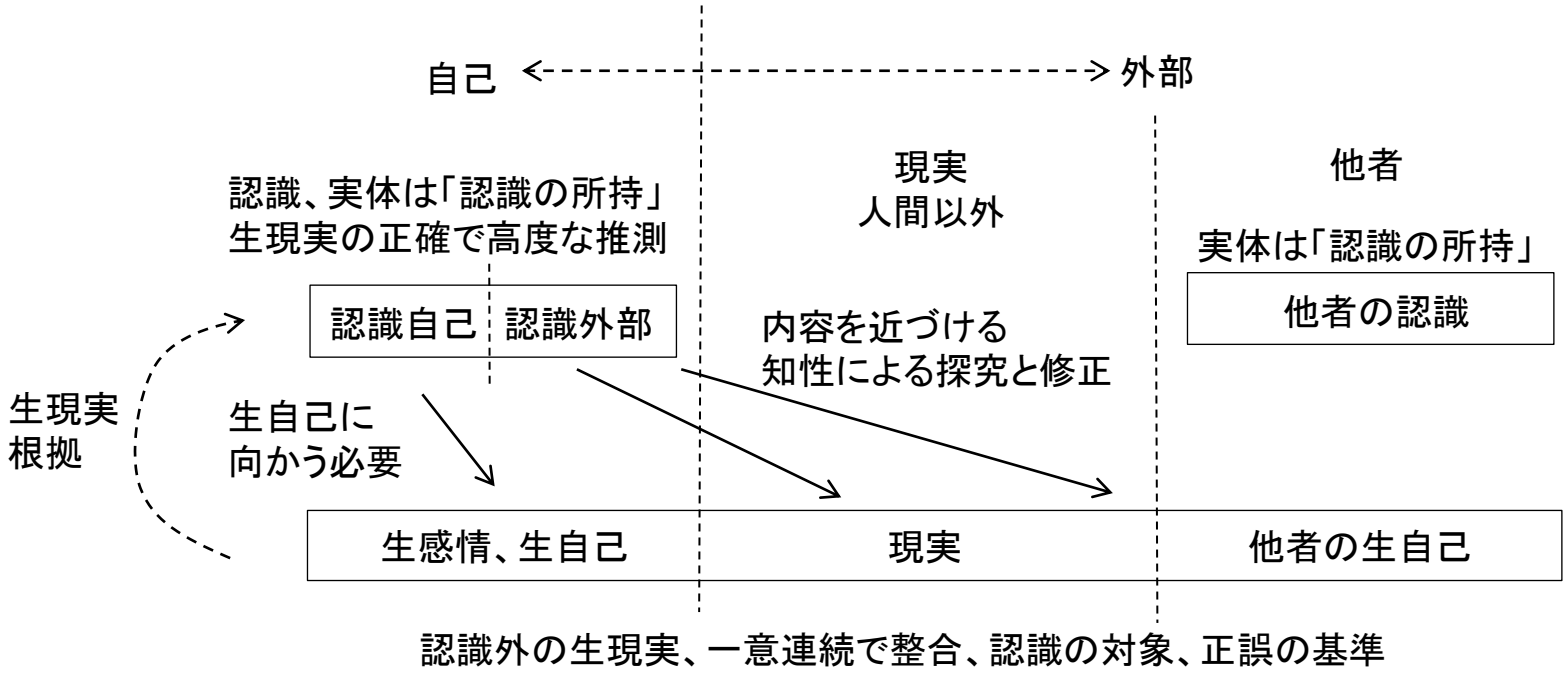
基礎
認識・知性と認識外



知性、認識の評価基準を持つ
強力な知性が人間の特徴
AIの教師、自動思考、メタ認知

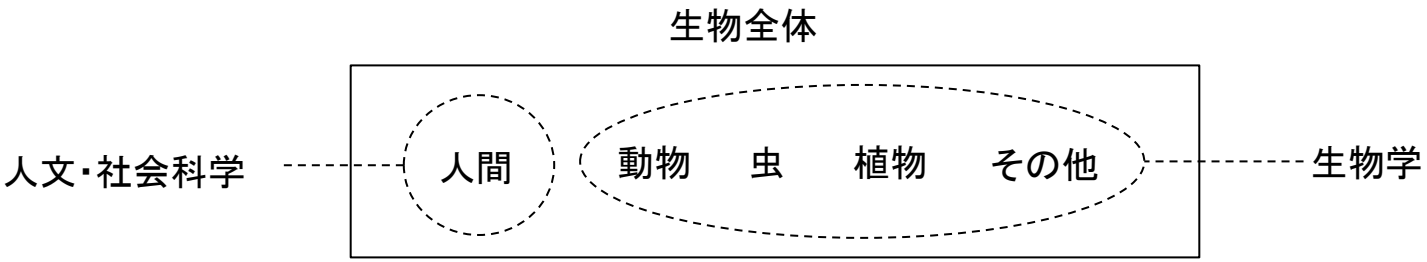
模倣はシミュレーションや機械学習的モデル
強力な知性は人間の長所だが、常に正しく働くようにはできていない
科学技術も後天的に得られたもの、正しい知性が必要

基礎
生感情・生自己・生現実



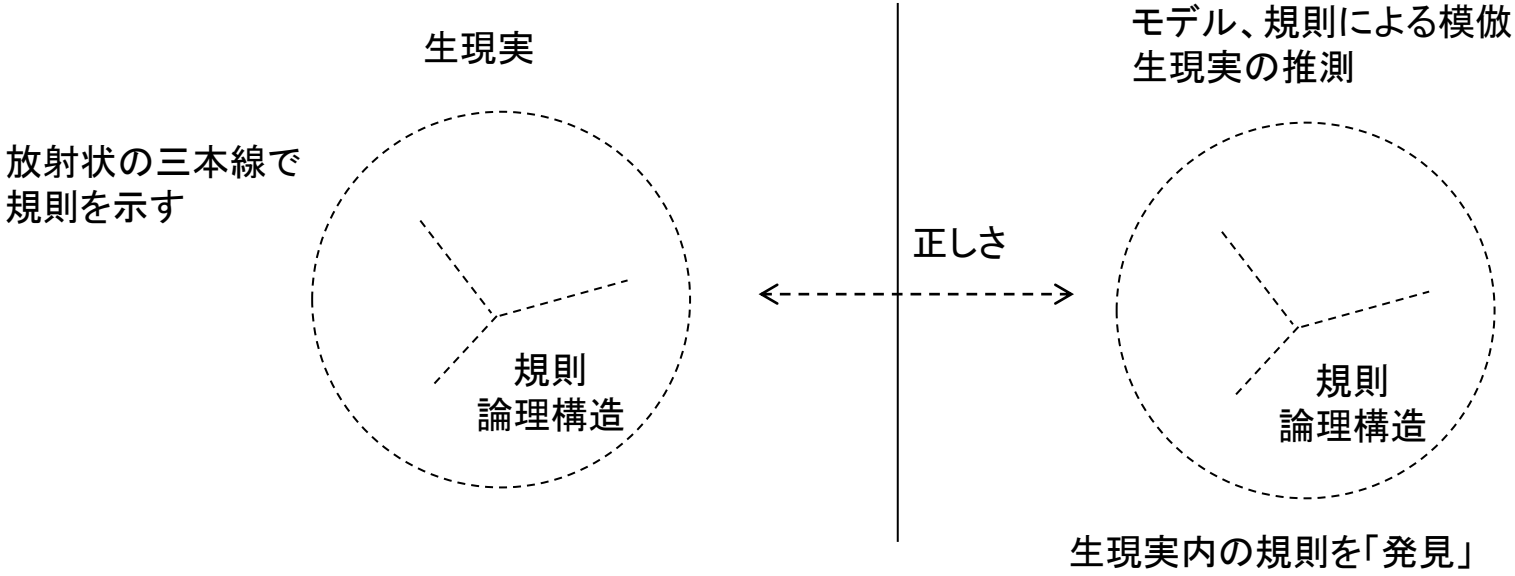
生感情は生物としての感情、他の「生」も同様
自己の生現実化により生自己を理解できる
現実を見るだけでは不十分、人間の生現実化が必要
生息状況から生人間・生感情・生満足を理解、生不満は生息状況の問題
満足感があっても生息状況が悪ければ無意味

基礎
生物全体と人間



人間は強い知性のため通常の動物と異なる、知的生物
人間は知的である点において、人間以外の生物とも異なる
人間は動物とは異なるが生物の一種、生物的理解が必要、生人間

基礎
規則



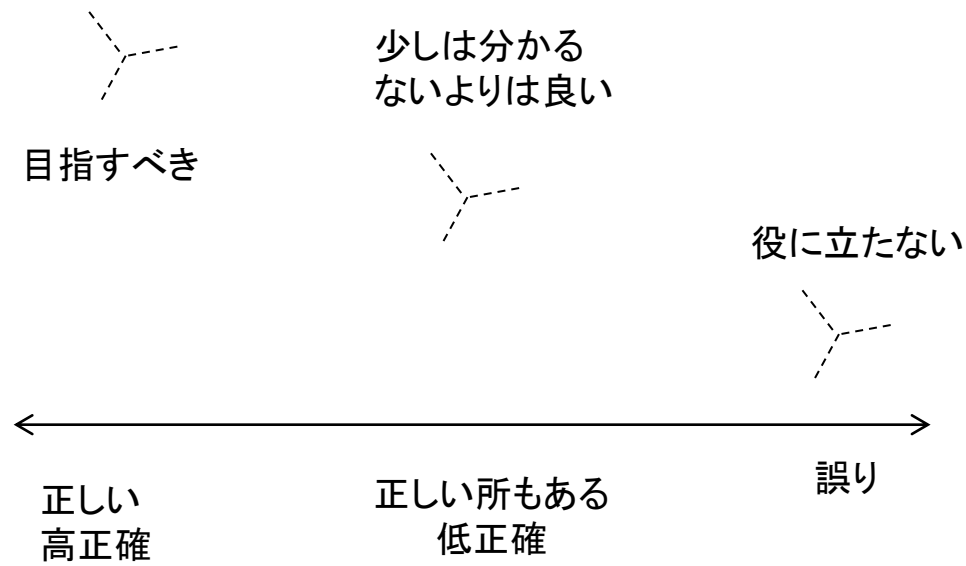
認識の正しさ＝人間の能力に直結
認識の量や推論速度は必ずしも直結しない
認識の生現実への正しさにより生満足を得る

基礎
規則と正しさ

規則なしの認識
推測不能
役に立たない

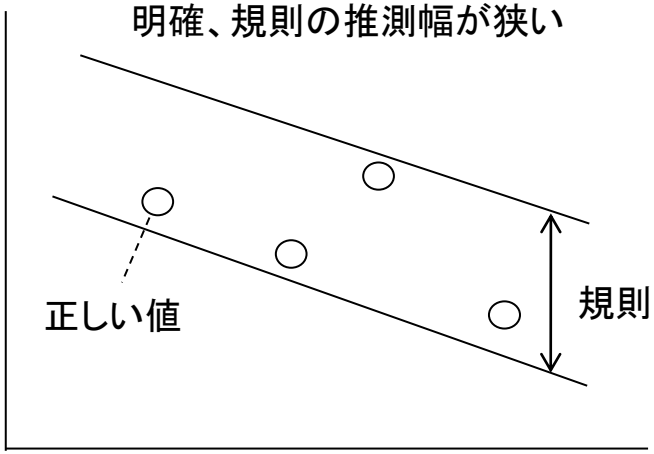
？

規則ありの認識

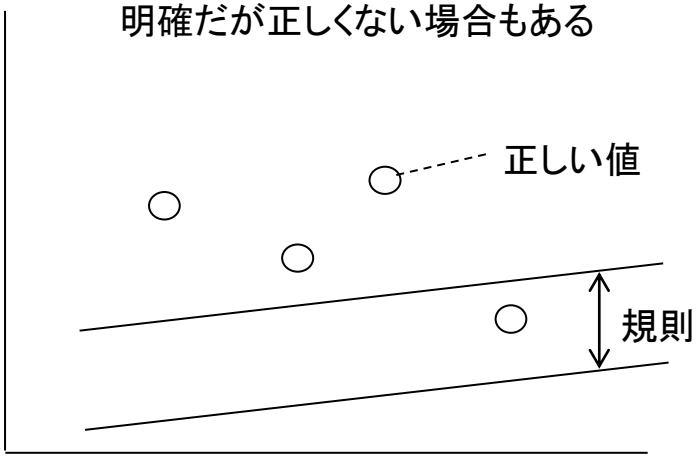


基礎
規則と明確・曖昧

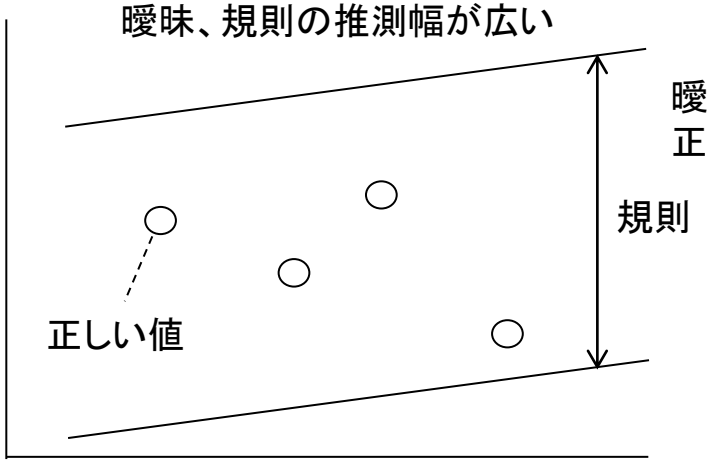
明確、規則の推測幅が狭い



明確だが正しくない場合もある



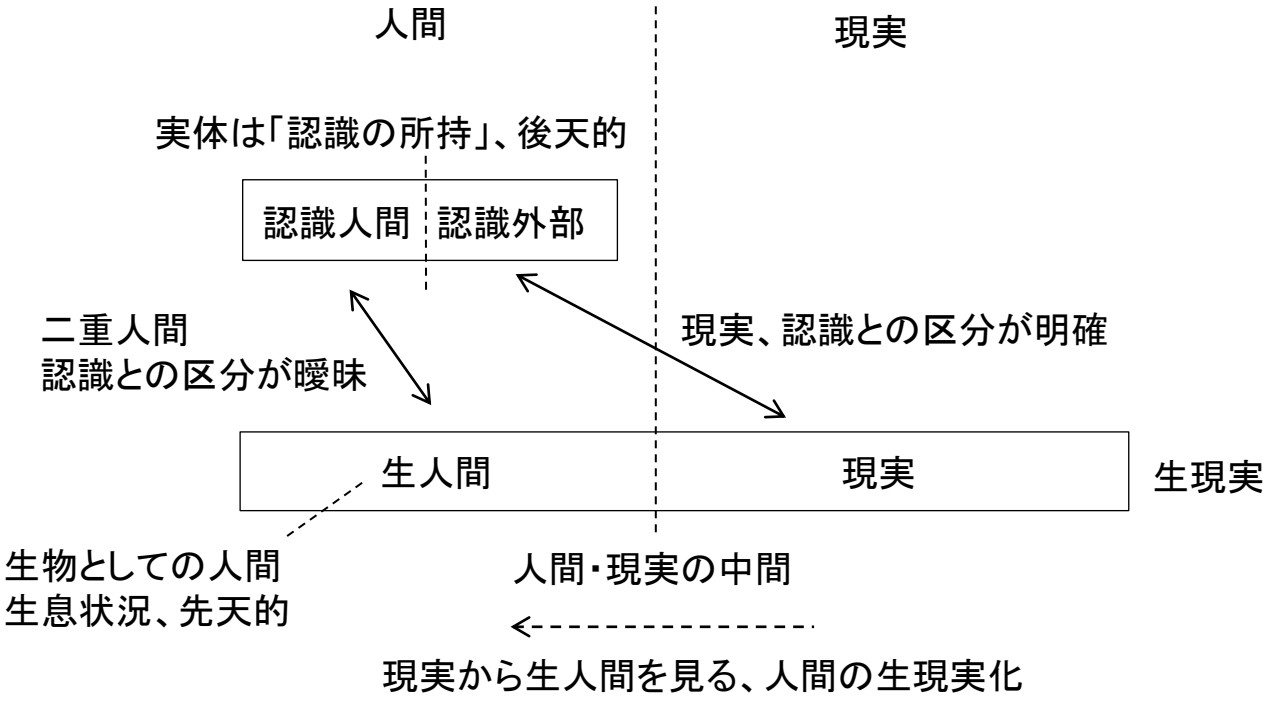
曖昧、規則の推測幅が広い



曖昧の程度が強ければ誤り
正しい部分が少なすぎる

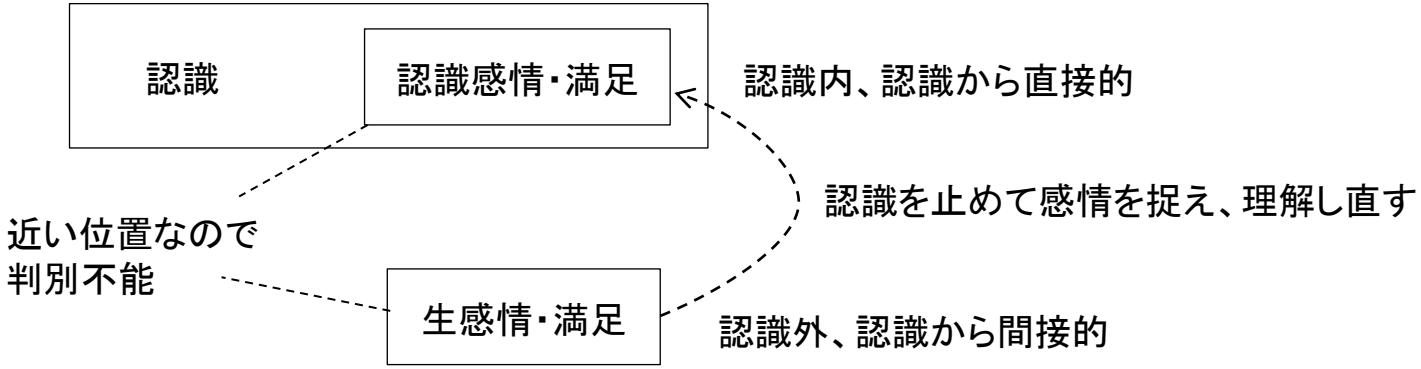
明確・曖昧は、規則の推測幅が狭い・広い
誤差や分散などの一般化
規則の生現実に対する正しさの一部
情報理論、情報量・複雑さ・曖昧さが本質的に近い
機械学習、過学習をを可能な限り単純化・汎化

基礎
現実から生人間



人間・現実の中間を現実的に見る、現実から生人間への過程
感覚・行動と対象の現実、感覚・行動を現実から見る
人間の現実的側面、生物・物理・身体など
人間的で曖昧な感情・満足でなく、現実的・生物的で明確な感情・満足
強い知性による認識修正、高度な認識
知性の暴走による生現実からの乖離、現実的に見る事で暴走を防ぐ

基礎
無認識感情

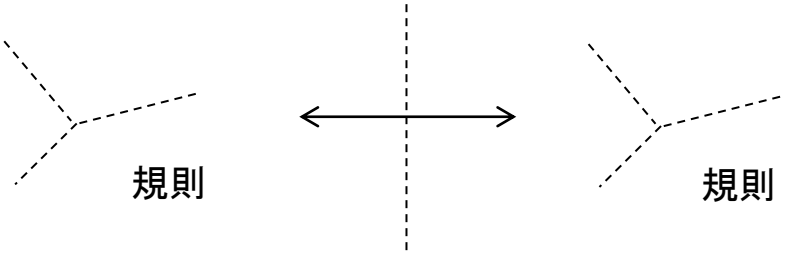


認識を止めれば生感情が見える、無認識感情
認識感情から一歩引いた感情、現実的で明確な感情に繋げる
「囚われない・こだわらない」などが近い、現実的・生物的でこだわらない
無認識感情は人間側から分かるので重要
感情・行動を止める事ではない、宗教のような禁欲主義ではない

基礎
開放・閉鎖

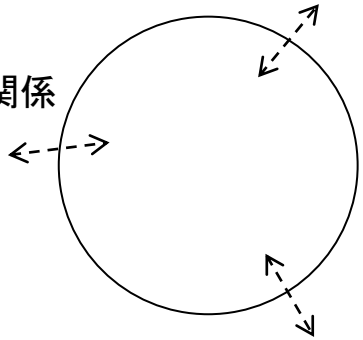
開放・閉鎖は、物理的手法を当解析に応用するためのモデルの一種

生現実は一意連続で整合
一意連続を規則から見ると開放
開放はメタで基礎的な規則
無認識感情、人間的にこだわるから閉鎖
一歩引けば開放



開放：相互影響あり
閉鎖：相互影響なし

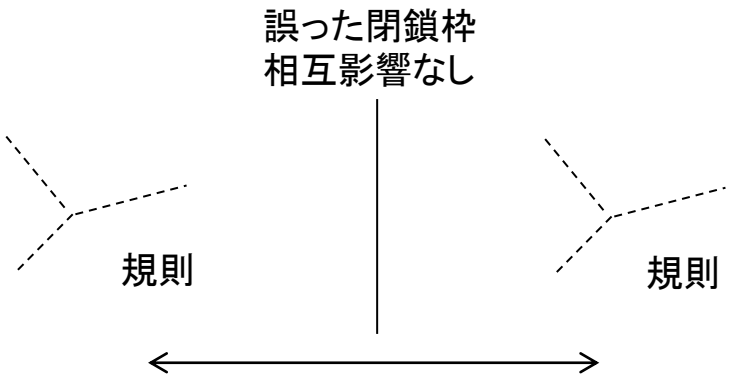
枠内外で少なくとも弱い関係
閉鎖はしていない



開放して見える：正しい認識
閉鎖して見える：誤った認識

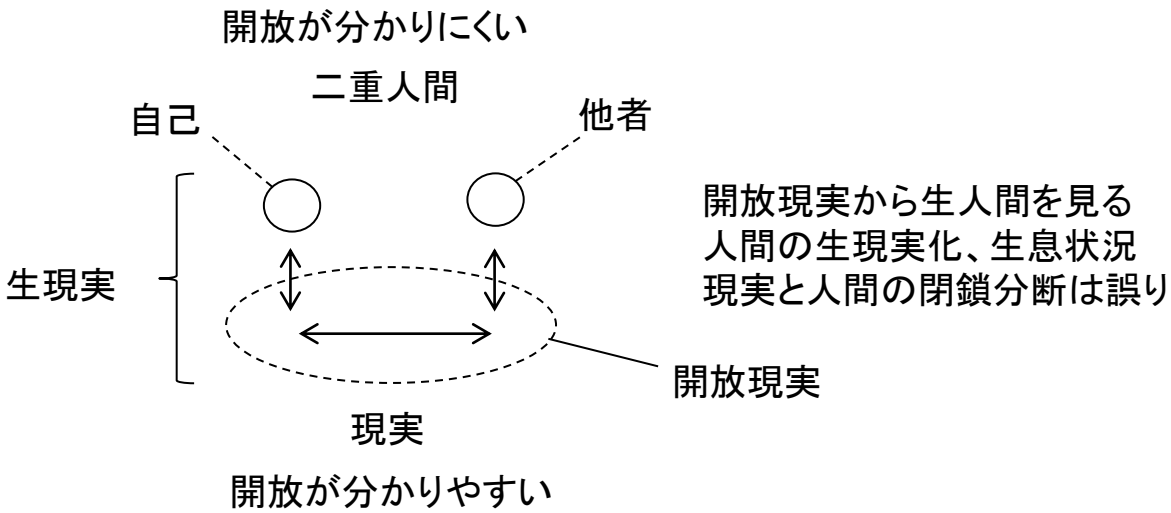
弱い関係を無視して「閉鎖して見える」と言う方が誤り
急にすべてが変わる感覚も閉鎖で誤り、内外が同時に見えるのが正しい

基礎
閉鎖枠と関係距離



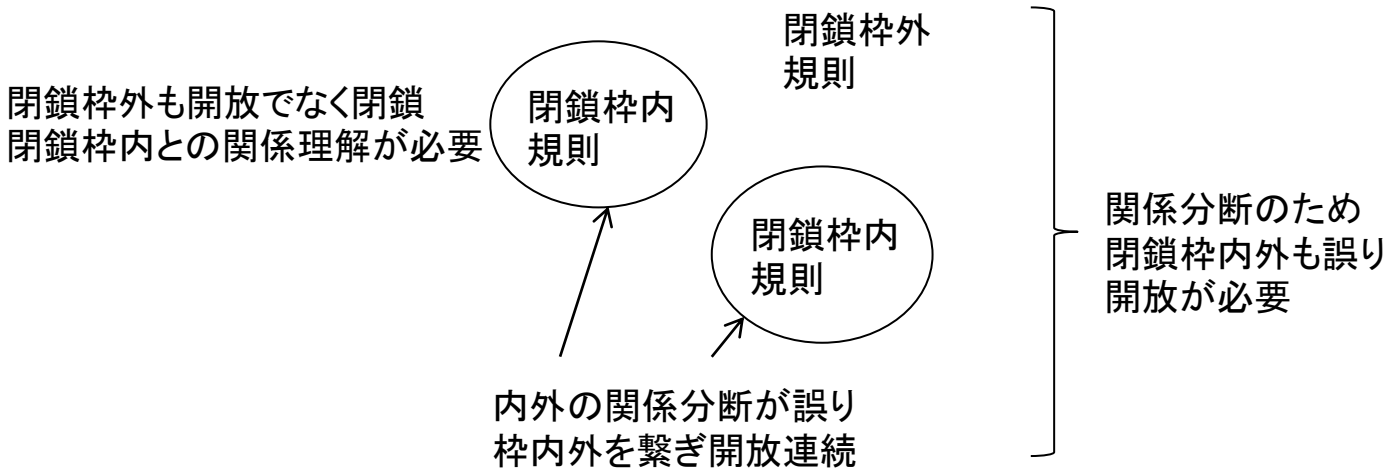
関係距離が遠く見える、正しく開放して見れば近い
閉鎖認識の結果として行動も遠くなる
開放：世界が近い、閉鎖：世界が遠い

基礎
開放現実から生人間



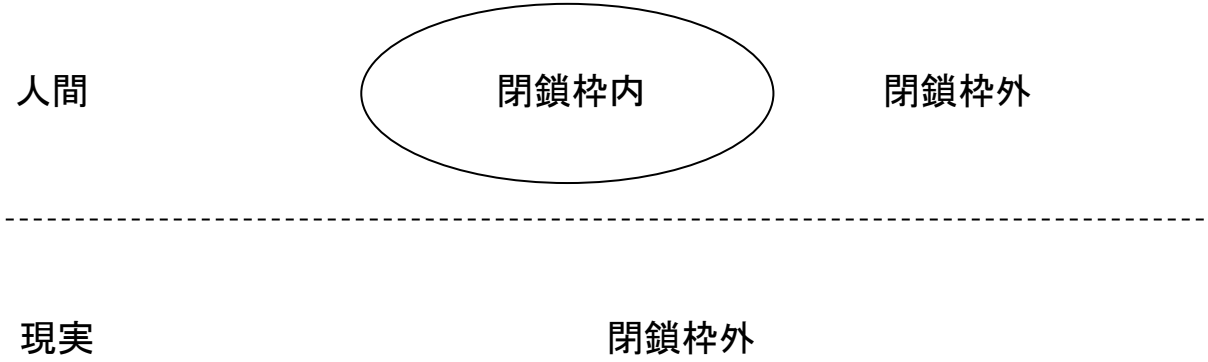
当解析において現実は最も重要、開放も重要
開放現実は両者を合わせたもの
現実を見なければ開放も分からない
開放現実の上に乗った自己・他者を理解

基礎
閉鎖枠と閉鎖枠内外



閉鎖枠内から閉鎖枠外に出ても無意味、状況は大差ない
閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖枠が残っていたら閉鎖のまま
閉鎖枠内外の移動でなく、閉鎖枠を含めた全体を修正

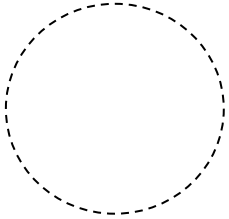
基礎
人間・現実の閉鎖



曖昧な人間で閉鎖すれば、現実も閉鎖、人間・感情と現実が無関係に見える
閉鎖分断のため、「人間・感情なし」や「現実なし」に見える
現実を見るだけでは不十分、人間の生現実化が必要
「冷たい現実」も閉鎖による誤り、現実は生物を含み、温かい部分もある

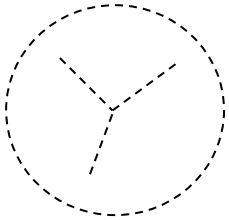
基礎
規則発見と実験選択

生現実の情報
実験や観察で情報収集



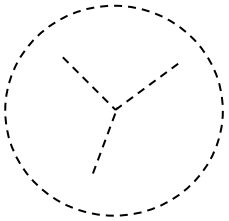
推測

規則発見

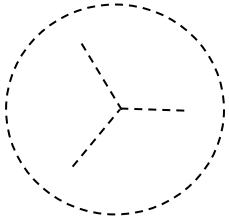


推測による規則発見
効率的、汎用的ではない
推測の元となる規則が必要
できるだけこちらにすべき

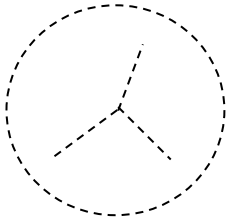
情報収集や推測ができない
複数の規則を当てはめてから実験



正しい
規則発見



誤り

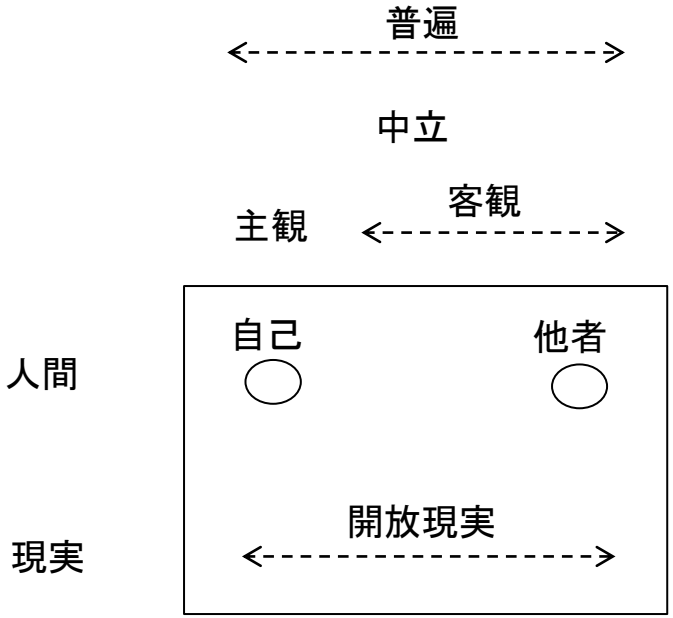


誤り

実験選択による規則発見
非効率的、汎用的、粗い帰納
自然科学、工学、企業など
遺伝実験選択、遺伝的多様性と自然選択

人間は推論困難、ある程度は実験選択をするしかない

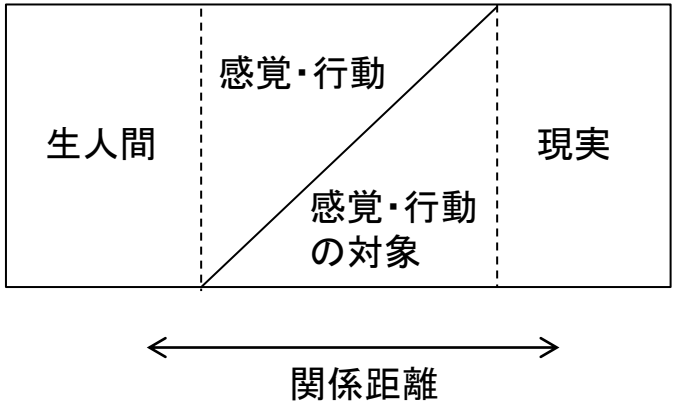
基礎
主観・客観・中立・普遍と人間・現実



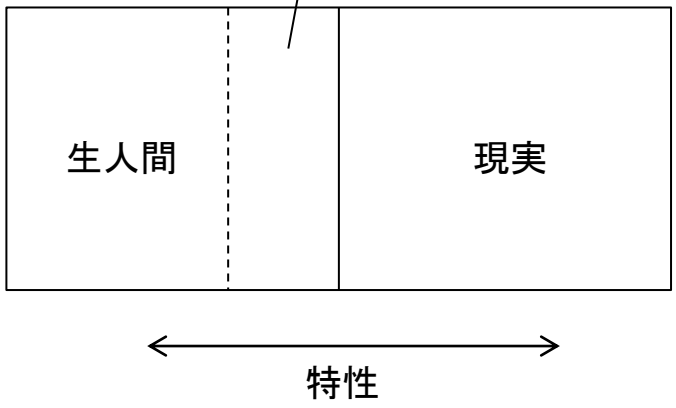
主観・客観・中立・普遍は自己・他者における位置・範囲
これらは人間・現実と次元が違う、人間的なら誤り
主観・客観などが不整合なら閉鎖分断で誤り、開放現実なら整合
「自己の外」は客観、「人間の外」は現実、「人間の外」から見る

基礎
人間・現実の中間と開放

感覚・行動の生現実化は比較的容易
感覚・行動の外にある現実まで理解



人間の現実的側面、生息状況
生物・物理・身体など



開放現実から生人間を見る
人間・現実の中間を生現実化、人間の生現実化
感覚・行動より現実的理解が重要
感覚的でなく、感覚を現実に合わせる

基礎
局所広域閉鎖

本来の広域は局所を含む、局所・広域は重なる

正しい広域 ←→

閉鎖

局所 ←→

広域は遠方の比率が大きい
広域の近辺が抜ける

近辺　　遠方

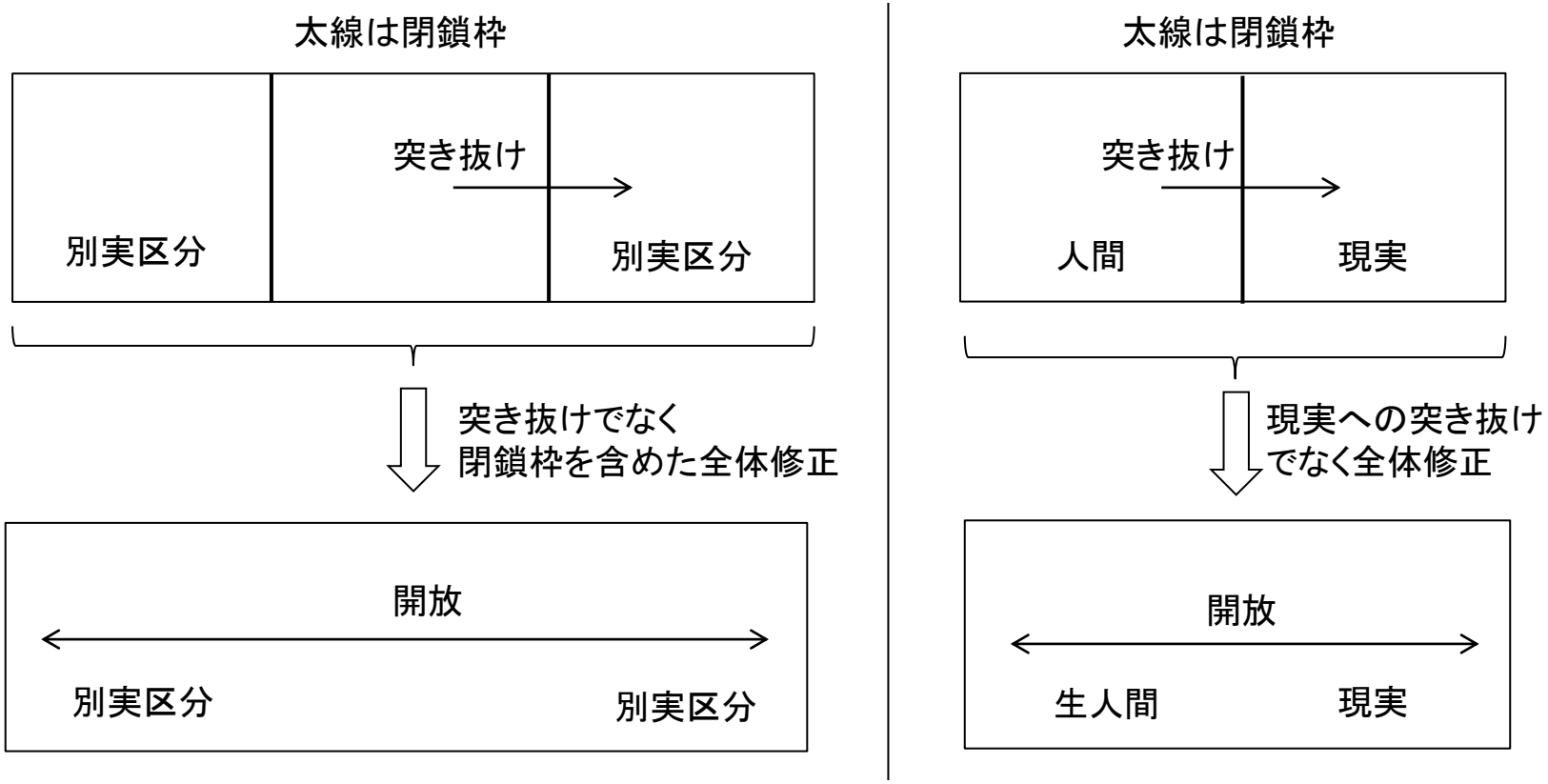
広域が局所の手前で分断
誤って別々に見える

←→ 局所

←→ 誤った広域

局所・広域の誤った閉鎖分断、近辺と遠方が遠くなる
正しい広域を理解、近辺・遠方で開放連続
理解しやすい近辺から遠方を見る、近現実から見る

基礎
実区分と開放・閉鎖



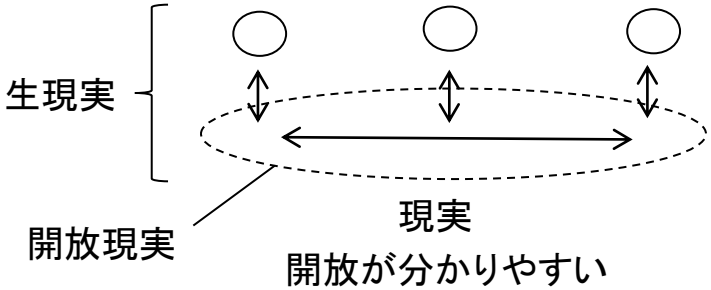
区分の閉鎖枠外に突き抜けても閉鎖のまま、別の閉鎖で出口がない
移動感も突き抜けで誤り、移動でなく全体修正
現実の認識も生人間に合うよう修正
開放現実から生人間・生息状況、全体として開放

基礎
多個人と開放現実

多個人は多数の個人
個人をエージェントとするマルチエージェント

開放が分かりにくい
多個人、二重人間

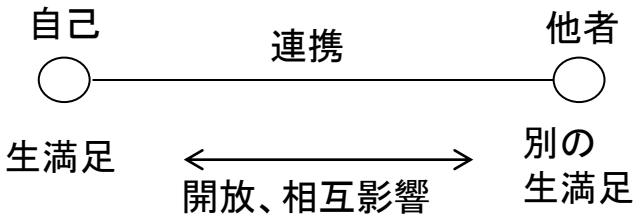
自己より現実の方が理解しやすい
二重人間は人間の内面でも外面でも同じ



開放現実から生人間、多個人の生現実化
人間・現実の中間を生現実化

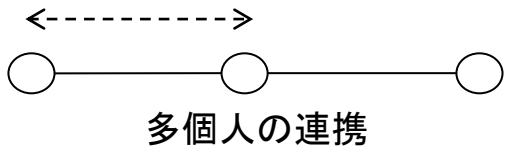
現実と人間の閉鎖分断は誤り、開放現実の上に乗った多個人を理解
無認識感情も重要、一歩引いて対人感情を見れば、仕事も交友も同じ
開放現実から見ないと関係距離も分からない

基礎
連携と相互生満足と信頼



対人関係も生現実化、人間的より生物的・動物的
人間的・感情的な対人で生不満になるのは誤り
連携全体としての評価は、開放した相互生満足
満足感でなく生息状況
win-win、片方の満足だけの閉鎖分断は誤り、孤立や一体化も誤り

個々の生感情による最適な距離
生物ごとの社会性とバランス
開放現実から見て、接近・離反を開放理解しバランス

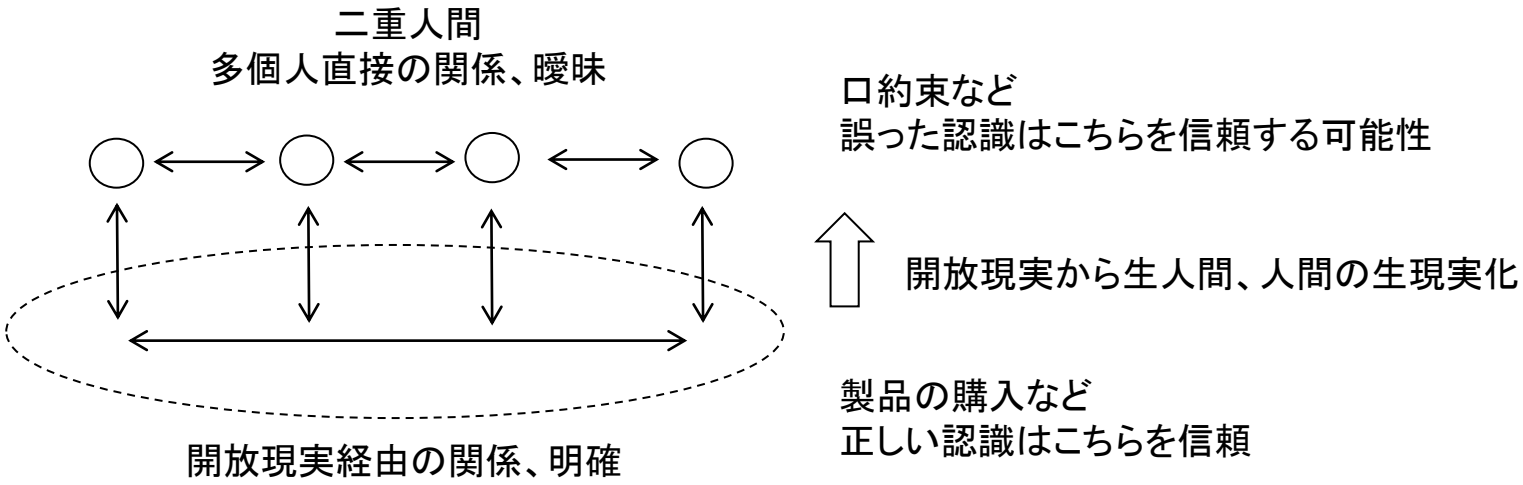


多個人は多数の個人

生満足、信頼、接近 ---->
生不満、不信、離反 <----

認識感情が正しく生感情に近い場合のみ、正しい信頼・不信
認識感情が誤りなら、誤った信頼・不信、真の生満足は得られない
連携のある他者は近辺なので重要、連携なしなら重要でない

基礎
開放現実と信頼



現実的機能・説明が正しく、人間的すごさ・懇願は誤り
人間的な感覚でなく現実に何をするか

目次

- 概要
- 基礎
- **人間の各機能**
- 精神疾患・問題行動
- 社会
- 応用
- 結論

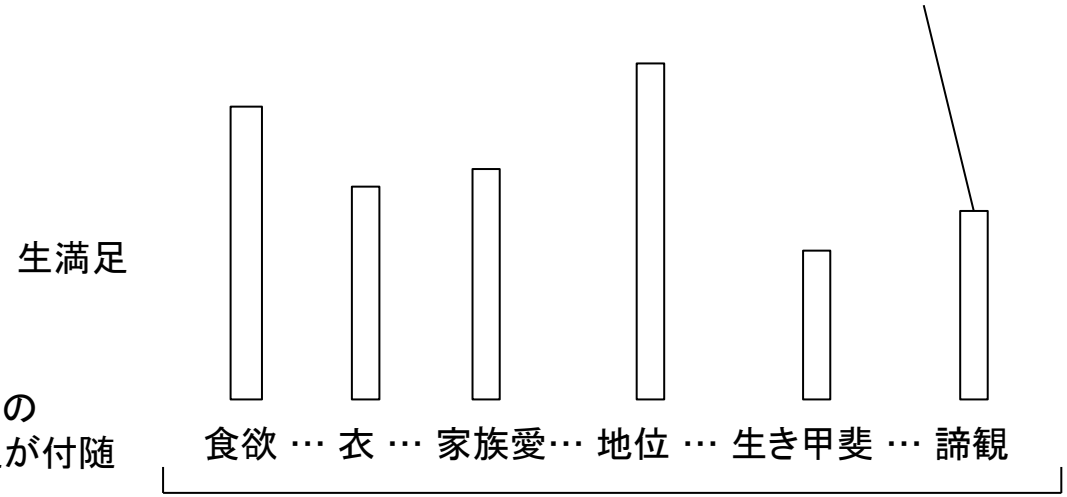
【各章の要約再掲】

- 人間の機能のうち、感情・行動・認識・知性について詳細に解析する。感情種類や地味感情を解析する。
- 物理的手法を応用した近辺・遠方・局所・広域と、行動を組み合わせた解析を行う。その中で暴力の問題を解析する。
- 行動の延長として実規則化を解析する。これは行動により生現実の一部を規則化するもので、社会の解析において重要になる。人工物・自然物・人間に対する実規則化の差異を解析する。
- 認識・知性について、認識知性伝達や認識遷移を使って詳細に解析する。認識遷移は情報処理の状態遷移図を認識に応用したもので。認識・知性の解析において多用される。認識遷移と現実・開放の組み合わせが重要である。
- 認識・知性・感情・満足を合わせた正・誤評性を解析する。正・誤評性は認識による満足の増減分であり、精神疾患などの分析で多用される。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。
- 物理的手法を応用した近辺・遠方・局所・広域と、認識遷移を組み合わせた解析を行う。
- 対人関係や多個人における認識・知性のあり方を、認識遷移を中心にして解析する。

（当スライドの内容は主に茶色）

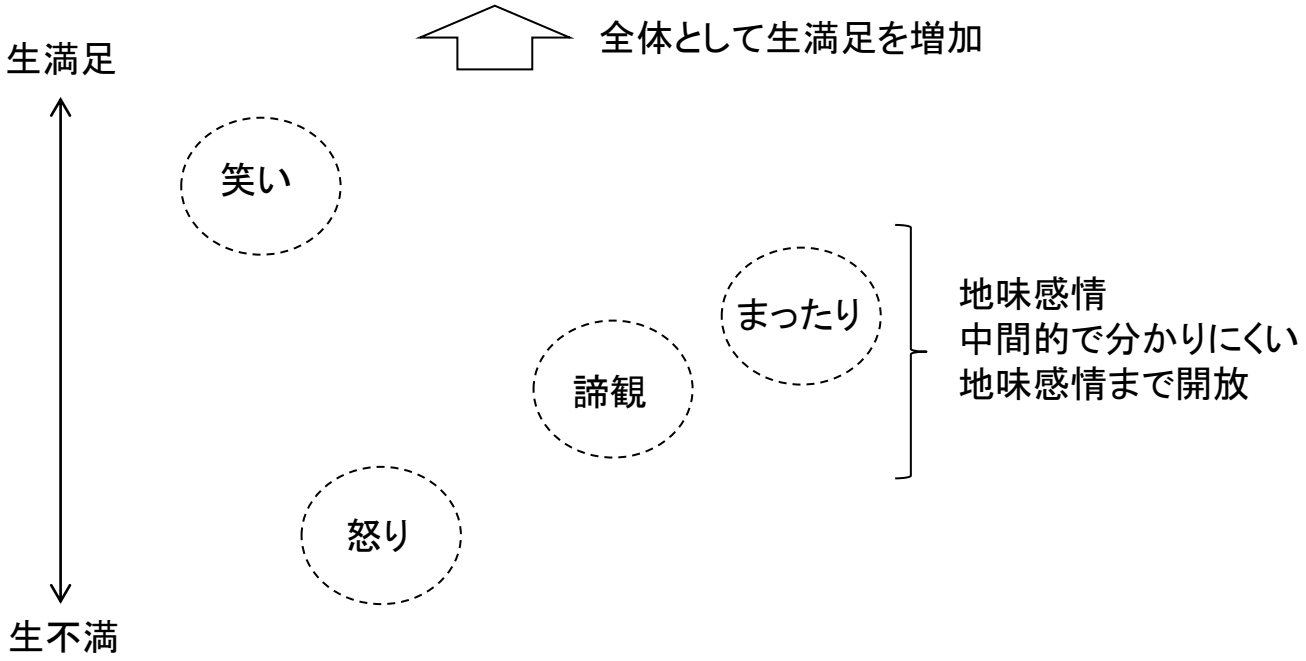
人間の各機能
感情種類と地味感情

地味感情、地味で分かりにくい感情
諦観・まったり・開き直り・皮肉など、地味感情まで見る必要
無認識感情から分かる、諦観は人間より動物の方が明らか



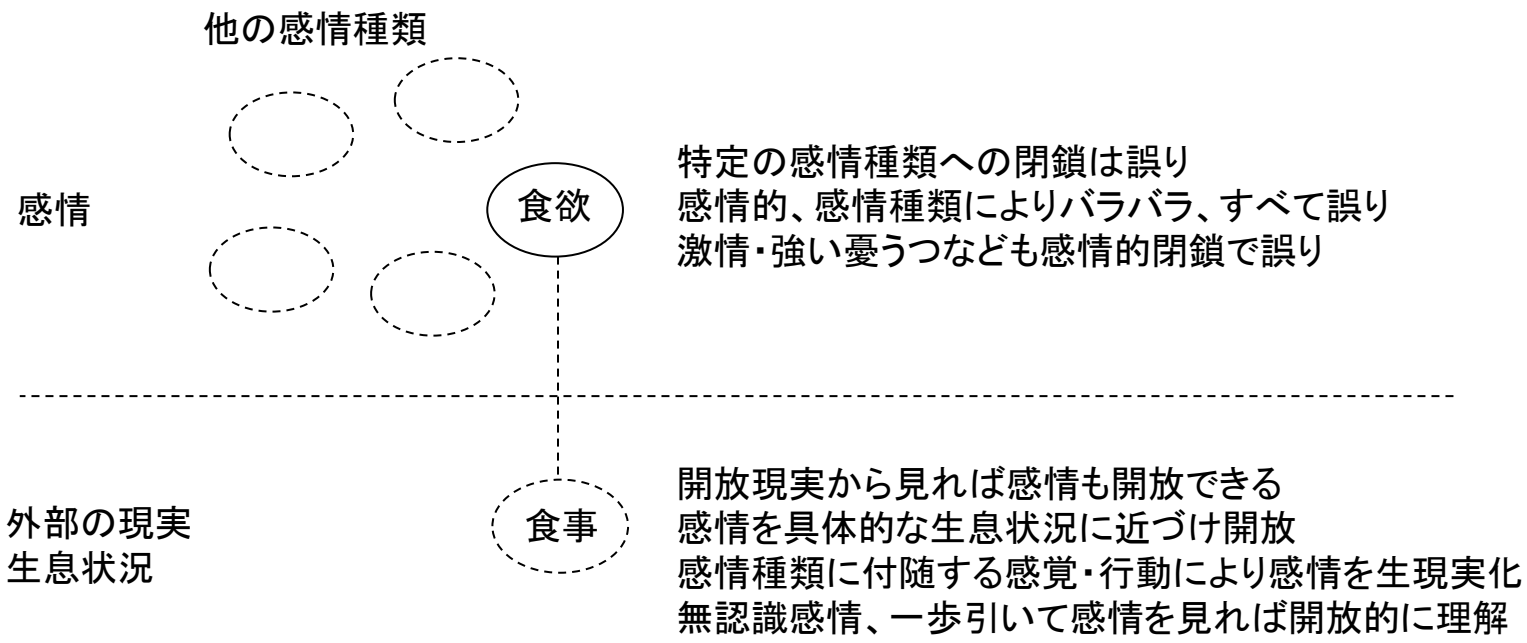
感情種類ごとの生満足でなく、総合的な生満足が必要
感情種類は複雑で曖昧、総和により明確化
すべての感情種類を見る、一つの感情種類に囚われるのは誤り
無認識感情を見て囚われない・こだわらない
まとめて満足増加する別規則が重要、開放現実など

人間の各機能
生満足・生不満に近い感情種類



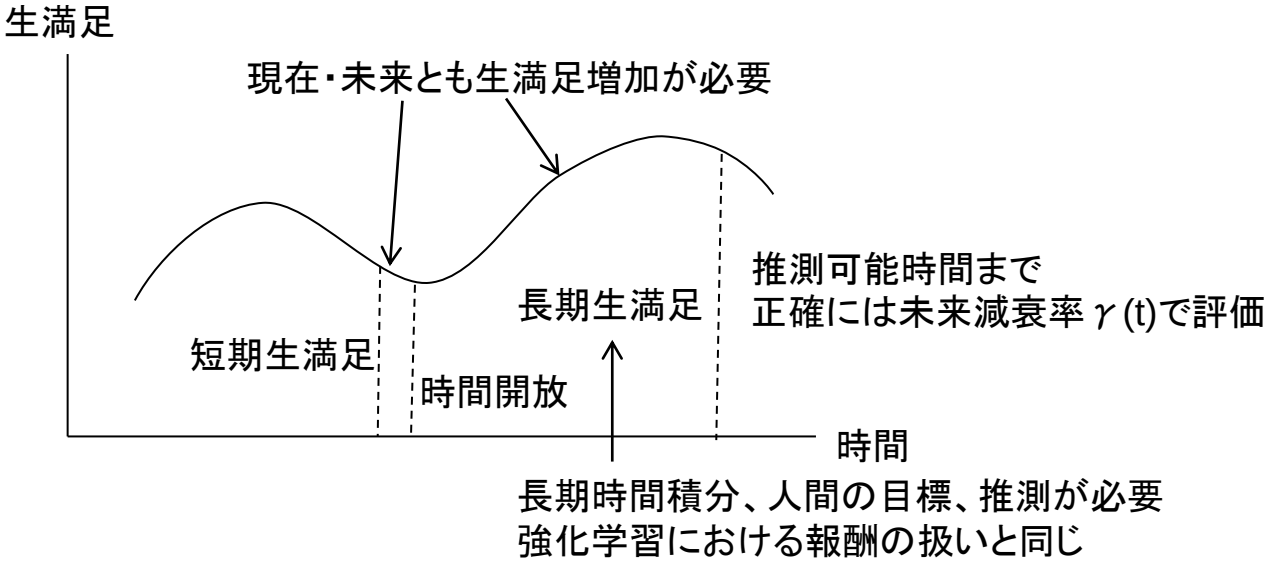
生不満側を無視するのは誤り、実際は相互に関連
感情種類の閉鎖枠を開放、開放現実に繋げる
感情種類は多数、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤り

人間の各機能
感情種類の開放・閉鎖



人間の各機能
短期・長期生満足

身体の内部を含むすべての生命活動を行う時間
感情・感覚、行動、認識、知性など
生命活動としての認識は長期生満足増加が目的



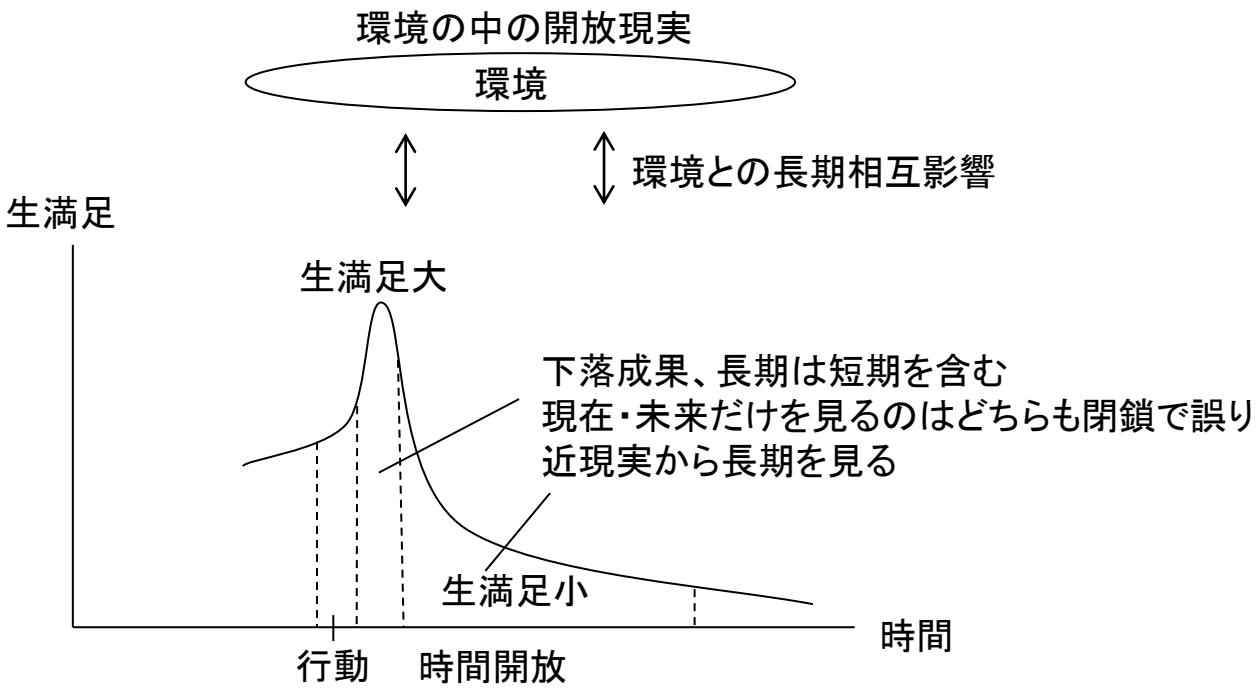
過去より未来が重要
長期は主に未来

局所、短期
近辺 ↔ 遠方
現在 ←→ 未来
広域、長期

広域は局所を含む

人間の各機能
下落成果と暴力

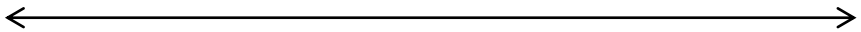
成果は生満足よりも強化学習の報酬により近い



暴力は長期相互影響を破壊、特に問題大

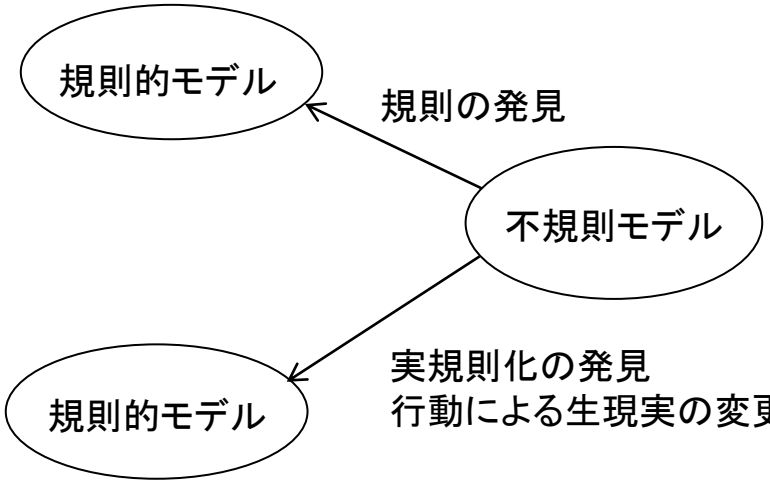
人間の各機能
実規則化

規則的、高正確
推測・行動高性能



不規則、低正確
推測・行動低性能

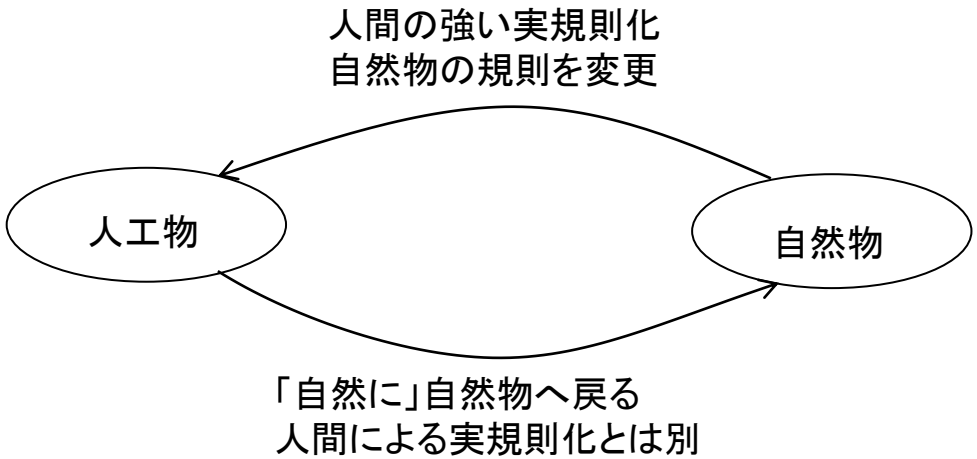
高正確により生満足を得る

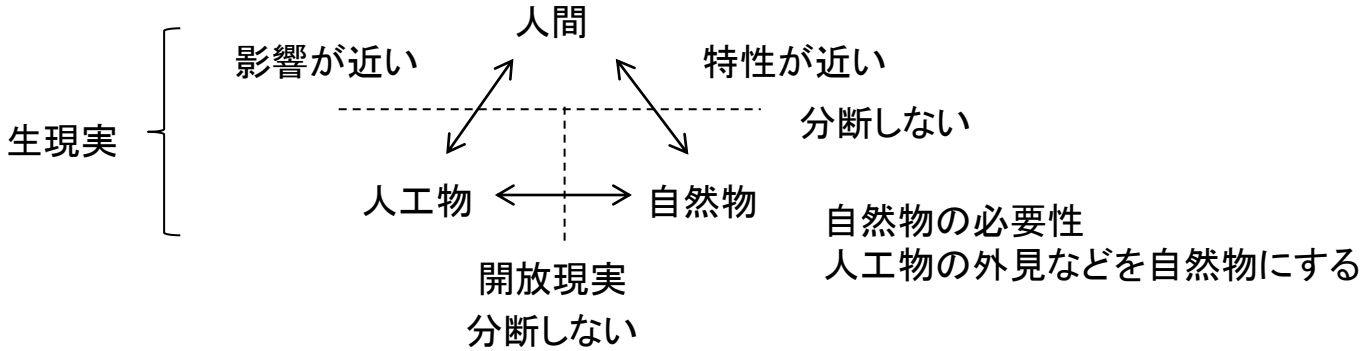


開放現実の理解が重要

実規則化も生現実上の規則、認識上の規則ではない
認識通りに実規則化できる訳ではない
規則発見と同じく、実規則化の発見も推論や実験選択

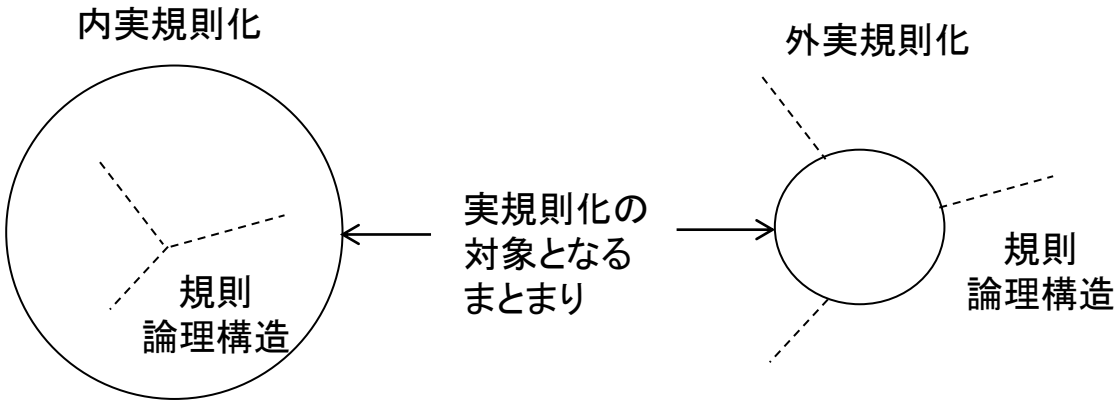
人間の各機能
実規則化と人工物・自然物





開放現実の人工物・自然物から生人間を開放的に理解
人工物や自然物が対象でも、人間の生命活動の目的は生満足

人間の各機能
内・外実規則化



人工物になる
自然物も人工物化

何でも可能、人間の行動を含む
自然物・人間は外実規則化のみ可能
自然物・人間は内部の規則に合わせる必要
内部の規則は、生物の遺伝的規則など

認識上でなく生現実上の規則

人間の各機能
正しいと評価した認識（認識遷移）

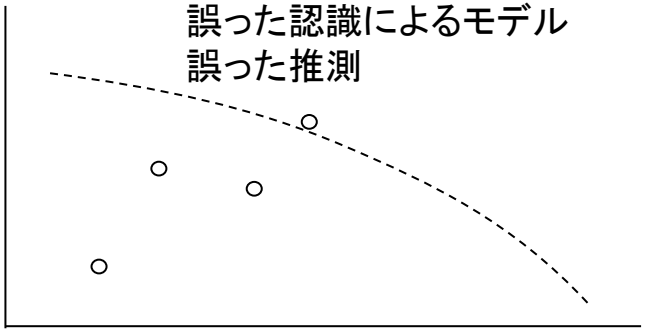
- 正しいと評価した認識が重要、これに従い推論
- 正しいと評価した認識が、真に正しいかどうかが問題
- 正しいと評価した認識が閉鎖していれば誤り
- 真に正しい認識を作る事が重要、誤った認識を壊すだけでは推論できず無意味
- 誤った認識は分裂・不整合、正しい認識は統合・整合

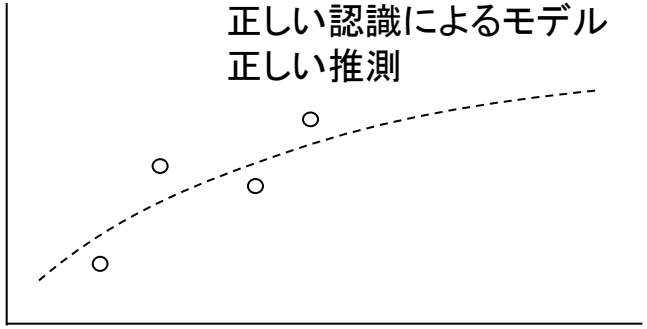
詳細は認識遷移で解析、説明が長くなるので本スライドでは使わない

＜認識遷移の概要＞
認識と知性の構造を明確化、認識の状態遷移図
認識状態は規則群による一つのシミュレーション・モデル空間
遷移は誤りと評価した状態から、正しいと評価した状態へ移行、情報の変形
最も正しいと評価した認識状態を最終状態と定義、それ以外は途中状態
最終状態は、最終的に正しいと評価された認識状態

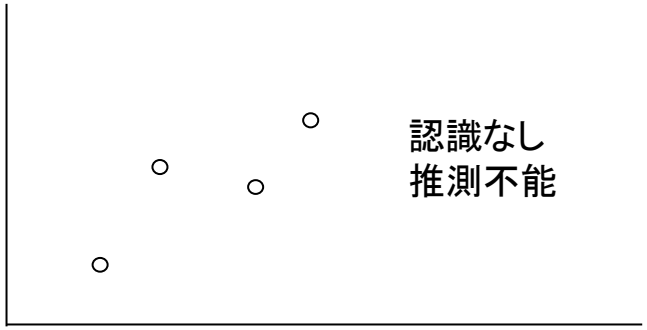
＜認識遷移を本スライドで使わない理由＞
内容が難しい、図が大きい、使わなくても主要部分は説明可能
精神疾患・問題行動は図を使わない説明文も多い

人間の各機能
認識と回帰モデル





丸が実測値
点線が回帰モデル
各グラフの左から右を推測



各認識は「正しいと評価した」認識を示す

人間の各機能
正・誤評性と人間・現実

- 正しい・誤りと評価した認識に付随する満足・不満を、正・誤評性と定義
- 正・誤評性は認識による満足の増減分、人間・満足の一部で曖昧
- 正しい認識と生満足は連動、知性と感情の連動の一種
- 生正・誤評性　　ー　生現実基準の正・誤評性、真の満足・不満
- 認識正・誤評性　ー　認識基準の正・誤評性、認識上だけで真の満足・不満でない
- 認識誤評性より認識正評性の方が問題大、推論の基準で生不満
- 生正評性を作って認識正評性を壊す、誤りを修正して生満足化
- 人間的認識による隠された生不満を見る必要
- スポットライト的な閉鎖満足は認識正評性による誤り、生不満に繋がる
  - 一点で高い満足でなく全体での満足が正しい

人間の各機能
人間・現実と認識・満足の因果関係

明確で正しい
因果関係

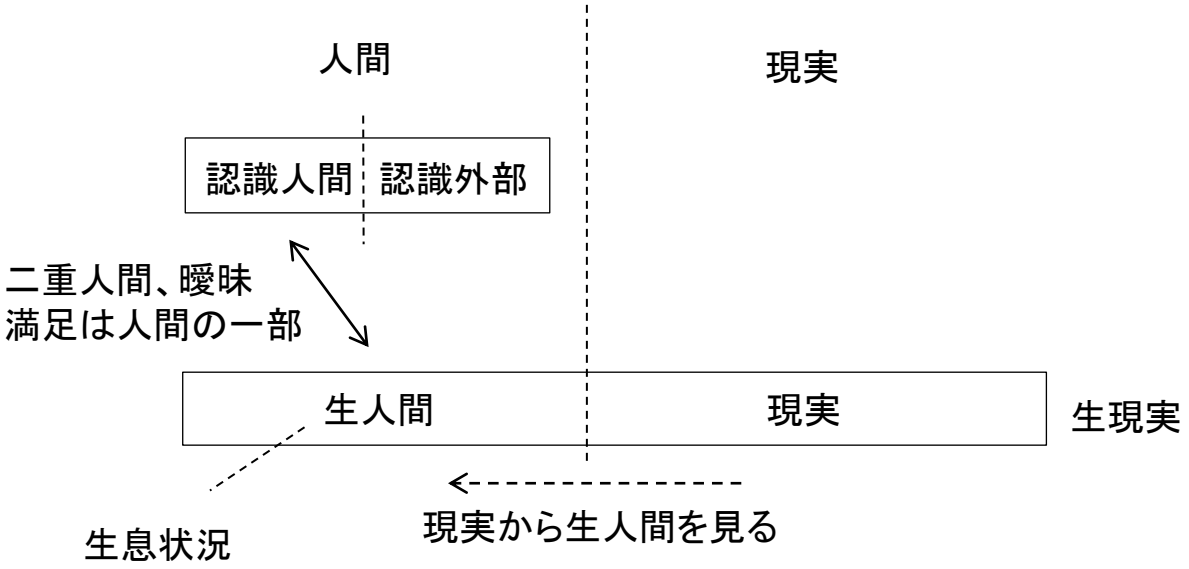
生現実的 → 正しい認識 → 生満足

曖昧で誤った
因果関係
生不満

正しい認識 ← 満足 ← 人間的

曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ、人間的認識による生不満
満足感でなく生息状況、現実的な真の満足
誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪、すべての満足から一歩引き生不満を見る
生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見る
誤りを修正して生満足化、生息状況から生満足を理解
人間的な推論の基準で生不満、原因は現実でなく人間

人間の各機能
満足全体の曖昧さ



認識満足が曖昧なのでなく、満足全体が曖昧
満足を見るだけでは生満足は分からない
生現実・生息状況・整合・開放・無認識感情などを見る必要

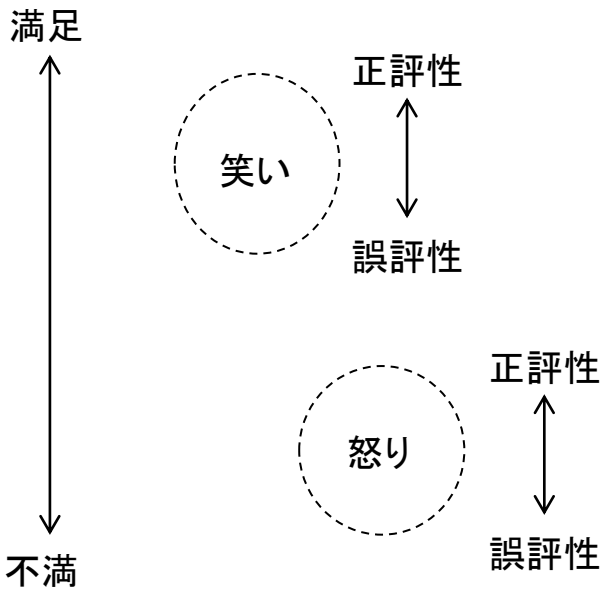
人間の各機能
現実の変形と正・誤評性

- 情報伝達、現実は明確なので伝わるが、人間は曖昧なので伝わらない
- 認識が誤りなら常に生誤評性、人間は曖昧なので伝わらない
- 現実に曖昧な生誤評性が付随、人間・現実が閉鎖分断
- 生誤評性を認識誤評性や基礎不満に誤解
- 開放現実から生人間を見て、人間や正・誤評性を生現実化する必要
- 無認識感情なら人間側から見えるので重要

正しいと評価した認識の閉鎖枠内・外で挙動が変わる

現実の変形
- 閉鎖枠内、すり替えなど ――認識正評性
- 閉鎖枠外、無視や現実逃避など ――認識誤評性

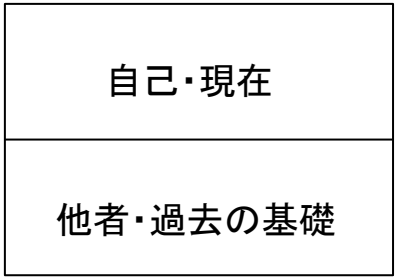
人間の各機能
感情種類と正・誤評性



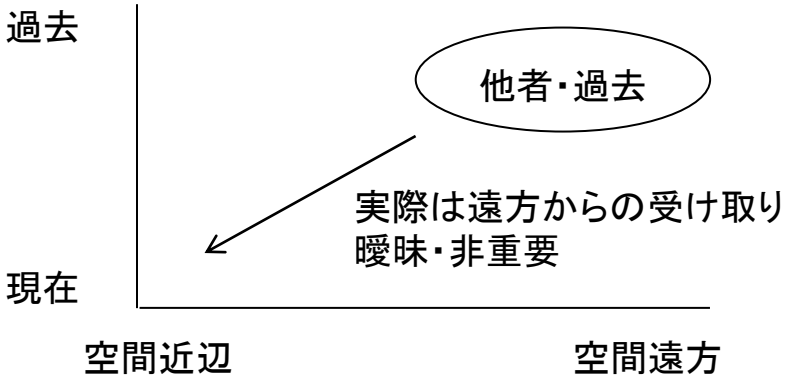
感情種類ごとに正・誤評性
不満側でも正評性が重要

一つの感情種類に捉われるのは閉鎖で誤り、満足側・不満側とも同様
不満側に囚われると問題が大きく見えるが、生現実上で満足側・不満側の違いはない
不満側の誤った認識では、不満側の認識正評性が問題
感情種類は多数、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤り

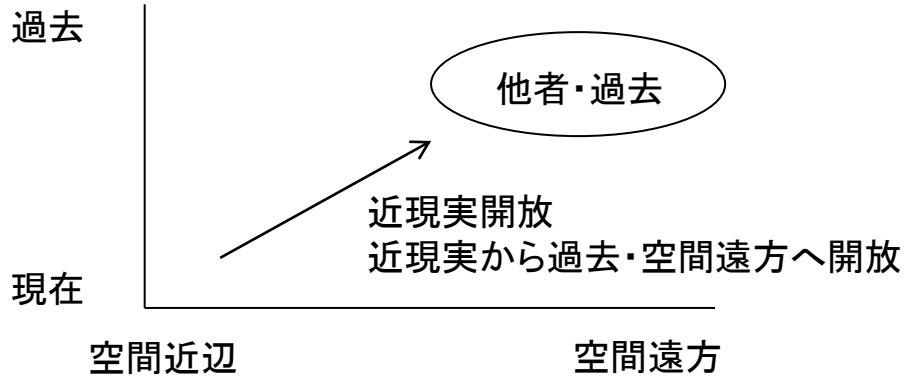
人間の各機能
過去への近現実開放



自分の中の認識の積み上げ
閉鎖・停止時間系で誤り

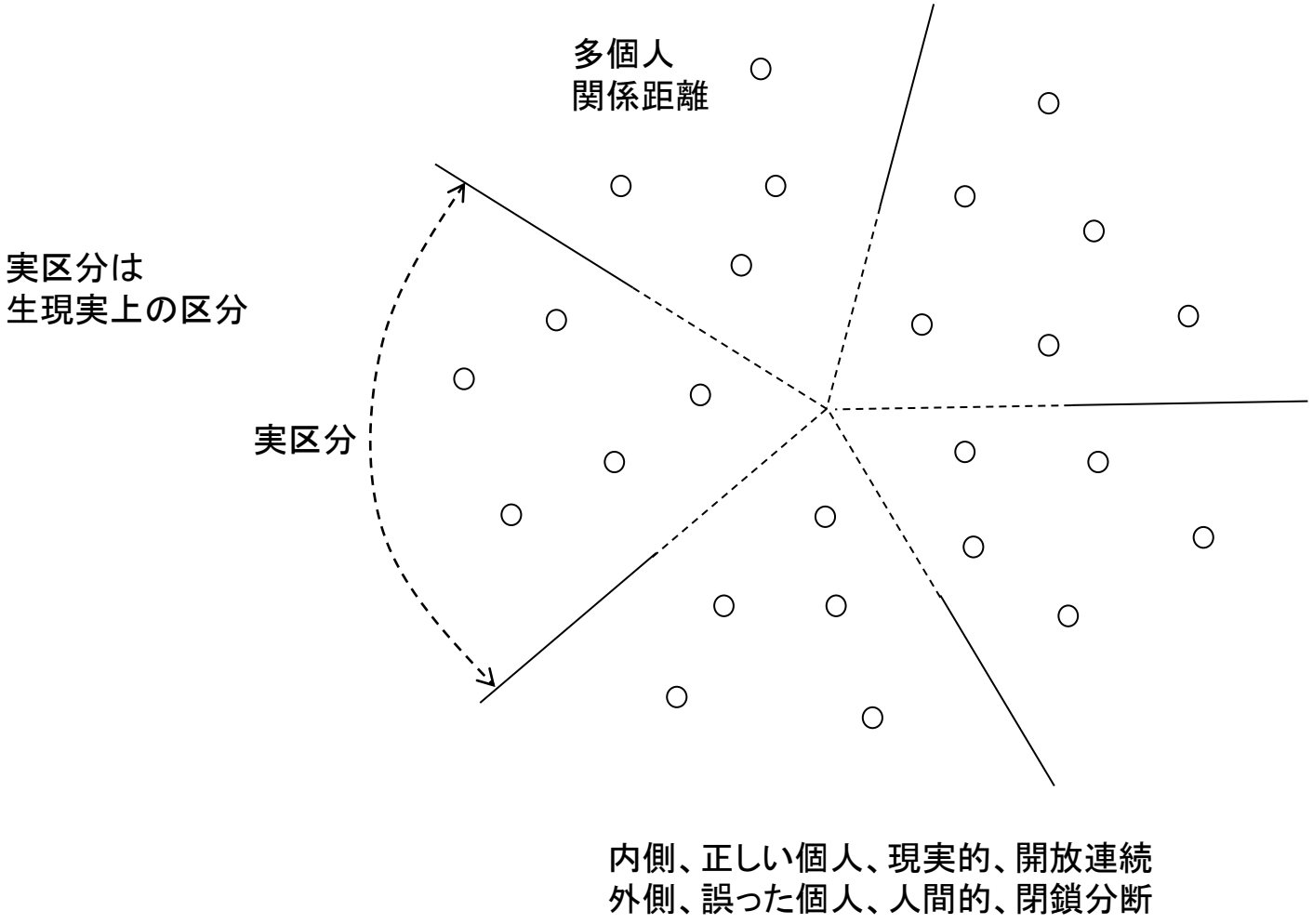


開放現実により修正



近辺は明確・重要、遠方は曖昧・非重要
「他者・過去の基礎」は認識を広げる方向が逆
自然科学は新しい認識で入れ替え
自然科学は「過去の基礎」ではない
人文・社会科学では「過去の基礎」もあり不適切
近現実開放は無認識感情とも繋がる

人間の各機能
正しい・誤った個人と実区分



目次

- 概要
- 基礎
- 人間の各機能
- **精神疾患・問題行動**
- 社会
- 応用
- 結論

【各章の要約再掲】

- 精神分析・心理学・正常・異常と認識の正誤について解析する。精神疾患と問題行動をまとめて扱っている。認識を正しくする事による精神疾患・問題行動の修正について解析する。認識の正誤を判定する手段として現実・開放・閉鎖を使用する。正常・異常・普通について分析し、その手段として正・誤評性などを使用する。恒常性・薬物療法・満足や、原因・症状の治療などを分析する。認識の修正方法の詳細を、認識遷移を使って解析する。
- 認識の誤りと問題の種類について、認識遷移を使って解析する。現実・開放・閉鎖と正・誤評性を使う。大うつは認識が破壊され、正しいと評価した認識がない状況と見なす。感情は人間的で正誤が不明確であるため、認識の誤りでなく問題として捉える。
- ここまでの解析をまとめて、精神疾患・問題行動と療法について解析する。

（当スライドの内容は主に茶色）

精神疾患・問題行動
精神分析・心理学と人間・現実

二重人間、曖昧

精神分析、人間的、曖昧
認識と実体が混在、古い概念のまま

開放現実から見る
人間の生現実化
生息状況

認知・行動心理学、中間
精神分析よりは厳密、認知や行動も人間的

開放現実、明確

当解析、現実的、明確
本来の医学は現実的で明確、精神分析だけ特殊

医学的問題は、現実的症状と、現実的症状に対する認識
身体的疾患でも精神疾患でも同じ
曖昧な精神分析でなく、明確な現実的症状を見る
生物と同様に現実的な行動分析、医学的、食事、運動など
当解析の知性と、認知療法の自動思考と、教育心理学のメタ認知は近い

精神疾患・問題行動
認識の誤りによる分析

帰納的・経験論的で曖昧、一般化できない

精神疾患、DSM、心因・器質
各種療法、薬、認知・行動療法等

認識の誤りによる問題行動
下落成果・暴力・犯罪・引き籠り・浪費等
犯罪心理学

別の原因

別の原因

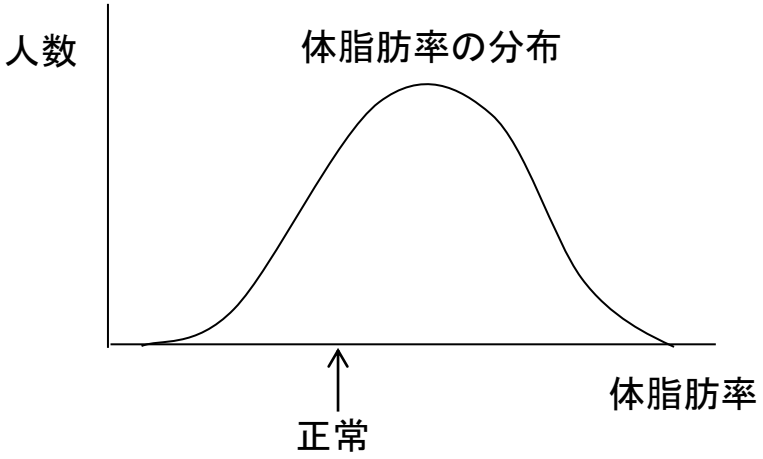
精神疾患と問題行動を
区別しない

認識の誤りの種類A

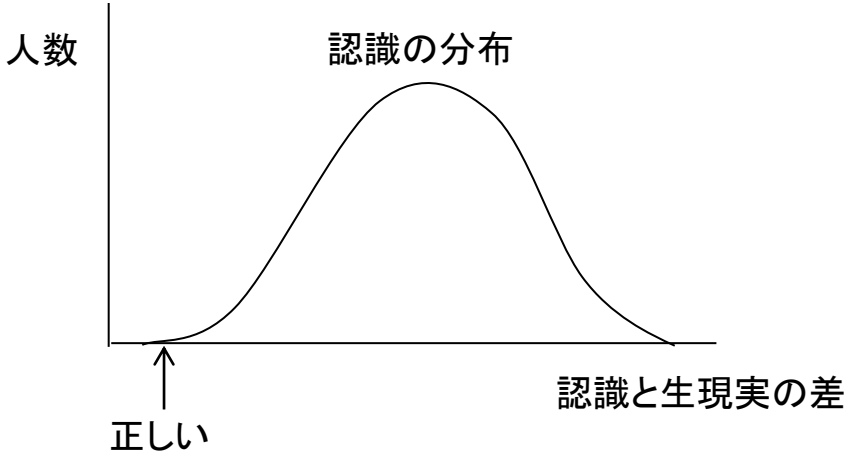
認識の誤りの種類B

当解析で分析可能、演繹的に明確化・一般化できる
ここから治療・矯正・教育などに繋がる
認識の誤りでない別の原因もあり得る

精神疾患・問題行動
正常・正しさの意味

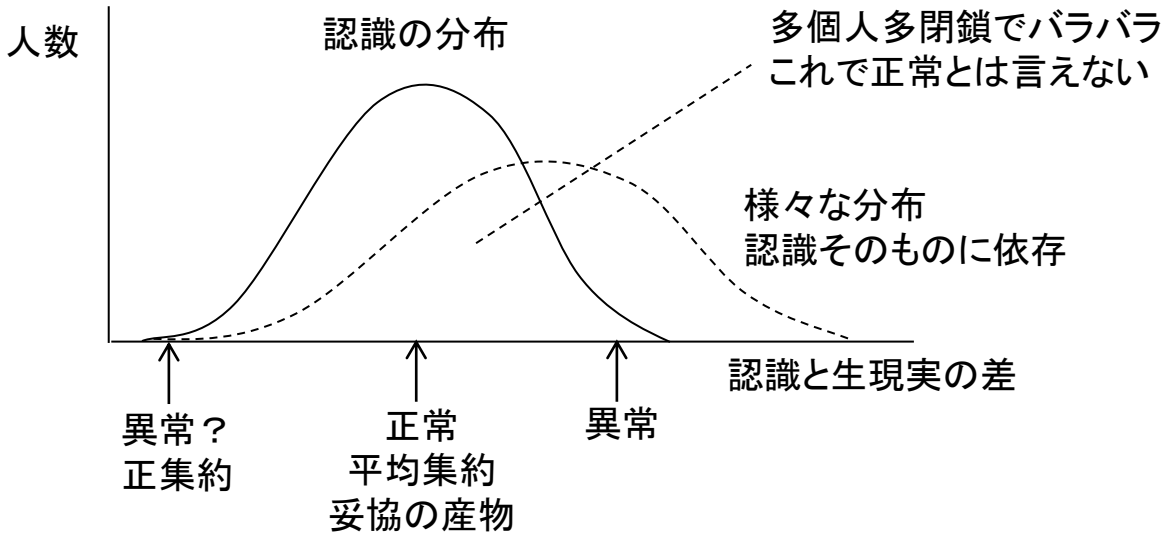


成人病の発生率などから正常を判断
最多の位置とは異なるが、遠くはない



差が小さいほど正しい
最多の位置から遠い
人数と認識の正誤は無関係

精神疾患・問題行動
正常・異常と認識の正誤



今までの正常・異常判定
人間的で曖昧

当解析、認識の正誤を判定
現実的で明確

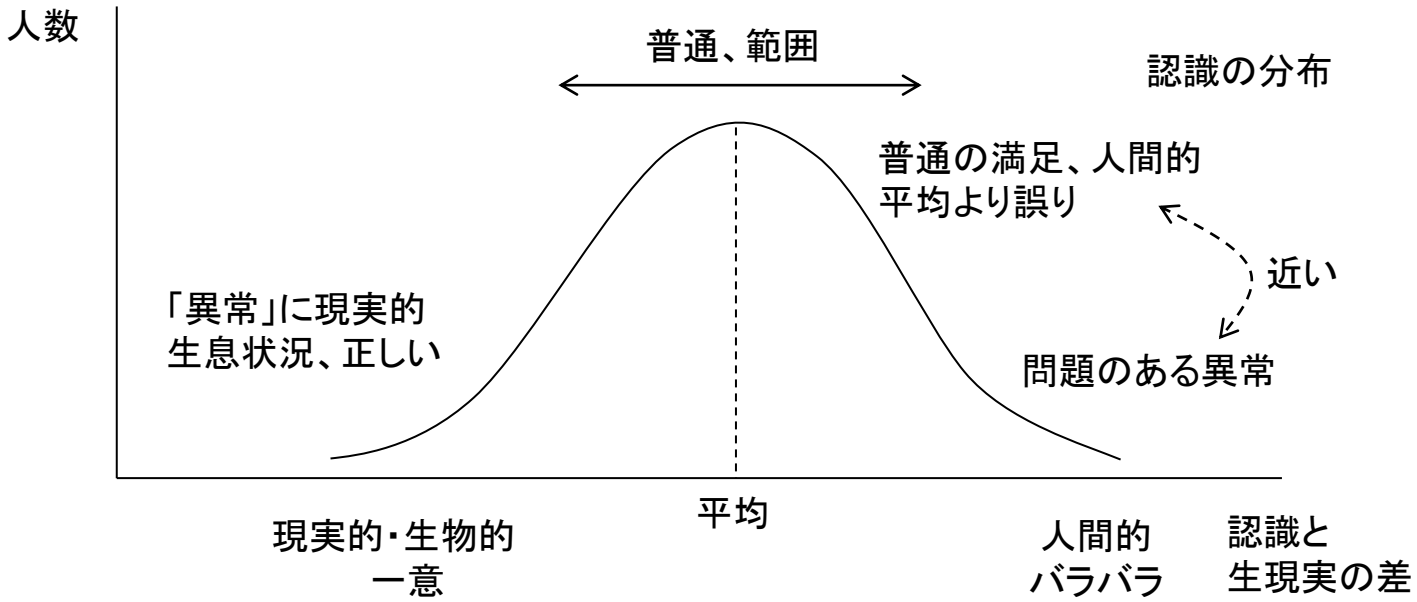
正しい、一意 ←----------→ 誤り・バラバラ

「異常」に現実的

人数や正常・異常でなく、認識の正誤で分析、問題は異常でなく非現実・不整合
認識の誤りの形式と修正方法を明示、「普通の人間」の正誤も分析可能
人間的こだわりやスポットライト的閉鎖満足は誤り、この点でも普通の半分程度は誤り
普通の人間でも人間・現実や局所広域閉鎖や多個人多閉鎖などの不整合
現実的な健康や精神疾患から「普通の誤り」を見る、普通への認識正評性が問題

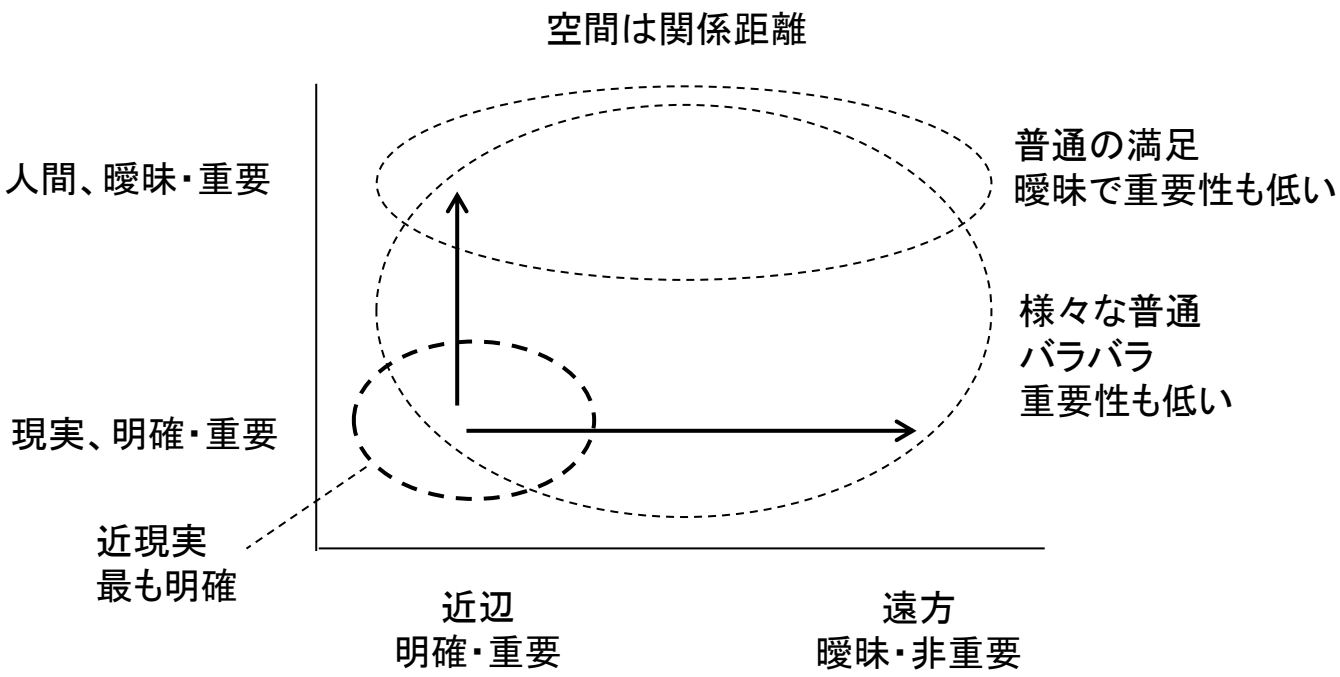
多個人多閉鎖：多くの個人全体での多閉鎖
局所広域閉鎖：自己・社会などの閉鎖

精神疾患・問題行動
様々な普通の満足



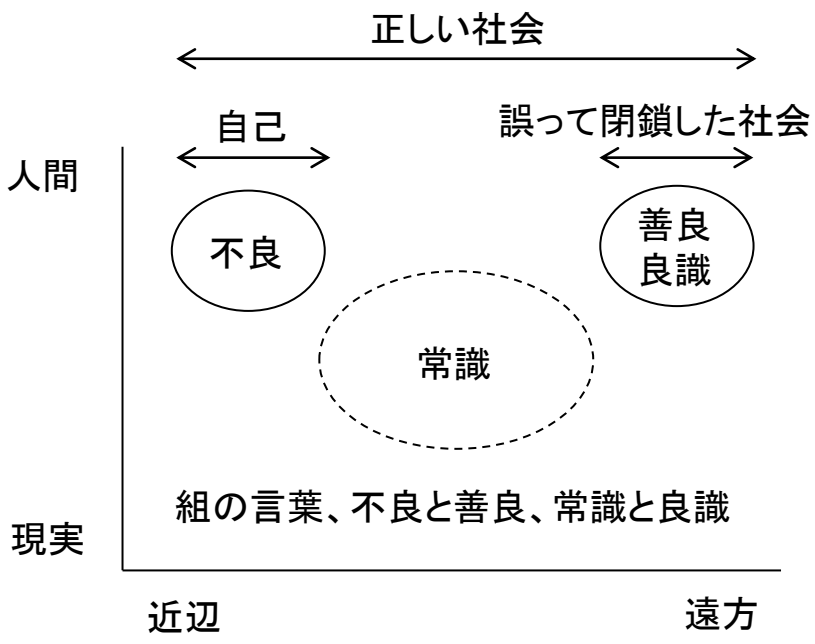
様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤り
人間的で曖昧な普通の満足でなく、現実的で明確な生満足が正しい、人間的認識による生不満
普通の満足でなく生息状況、すべての満足から一歩引き生不満を見る
スポットライト的閉鎖満足、一点で高い満足でなく全体での満足が正しい
認識誤評性より認識正評性の方が問題大、推論の基準で生不満
すべてのこだわりを無くして現実を見れば、バラバラの認識は収束する

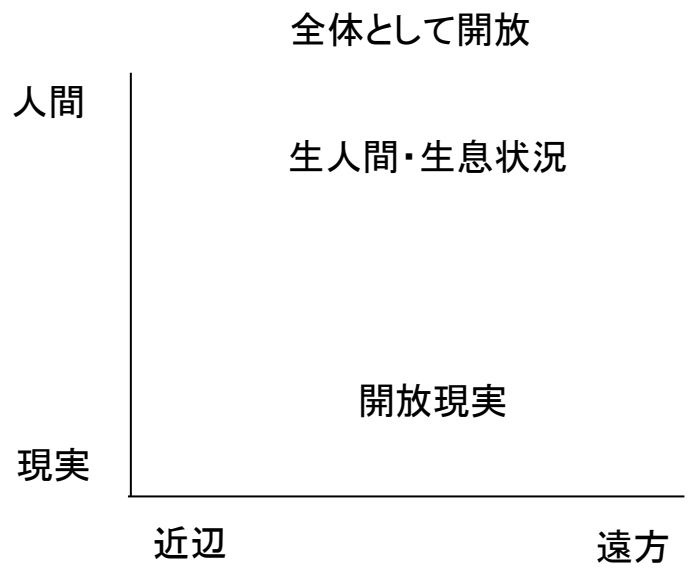
精神疾患・問題行動
普通と近現実開放



近現実を始点として開放理解すべき、近現実開放
バラバラで曖昧な普通は始点でない、特に普通の満足、遠い他者の満足感は無意味
自己は最も近辺で最重要、認識・知性の修正対象として自己の理解が重要
生自己・真の自己は分かりにくい、自己の生息状況として見るのが分かりやすい

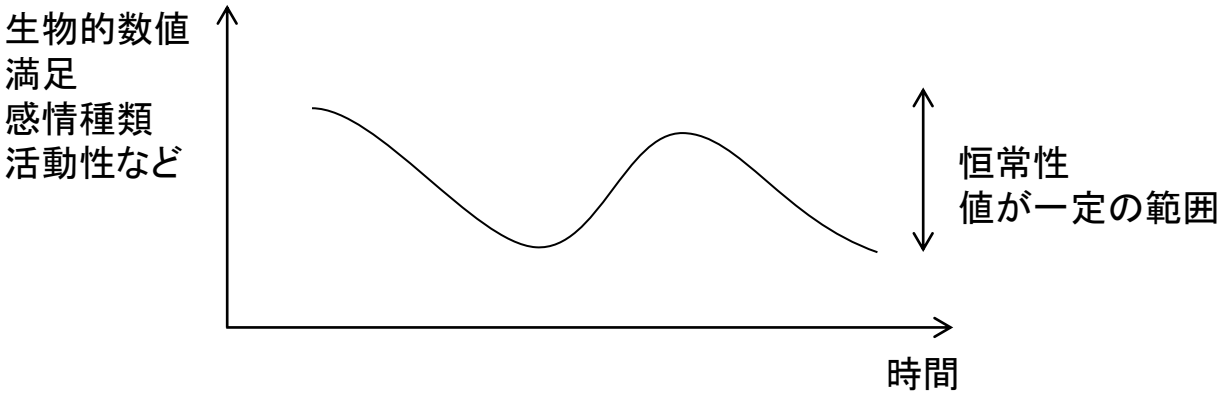
精神疾患・問題行動
不良・善良と常識・良識





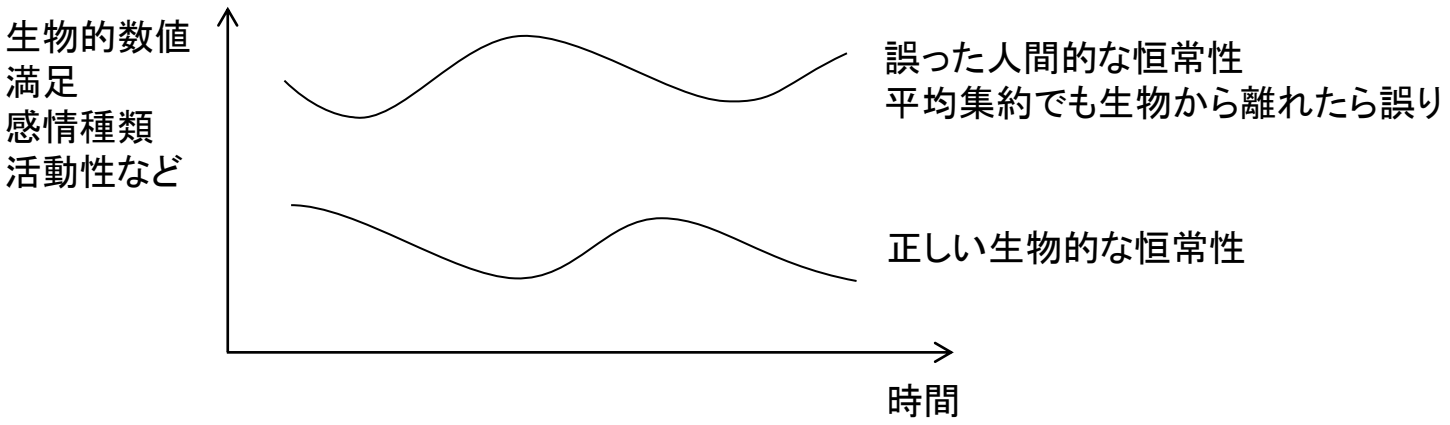
不良・善良は人間的で自己・社会に閉鎖、常識は平均的でやや人間的・閉鎖的
良い・悪いは単に評価、これらが人間的になると問題
人間的な良い・悪いでなく、現実的な正しさ、近辺にある自己の生息状況が重要
常識的幸せ・不良のカッコよさ・良識的素晴らしさ、すべて普通の満足で誤り

精神疾患・問題行動
恒常性と正常・異常



恒常性の範囲内なら正常、範囲外なら異常
恒常性の異常は疾患の原因でなく結果、風邪の高熱など
過剰な感情は恒常性に問題、一時的に大きな感情や、長期的な感情の偏り

精神疾患・問題行動
恒常性と認識の正誤



正しい認識は生現実に近い認識、平均が正しい訳ではない
現実的・生物的な認識が正しく、恒常性でも同様
平均や恒常性自体だけでは分からない、肥満が普通でも正常ではない
様々な認識・恒常性があり得る、現実・生物の基準がないと正誤不明

精神疾患・問題行動
満足・不満と薬物療法

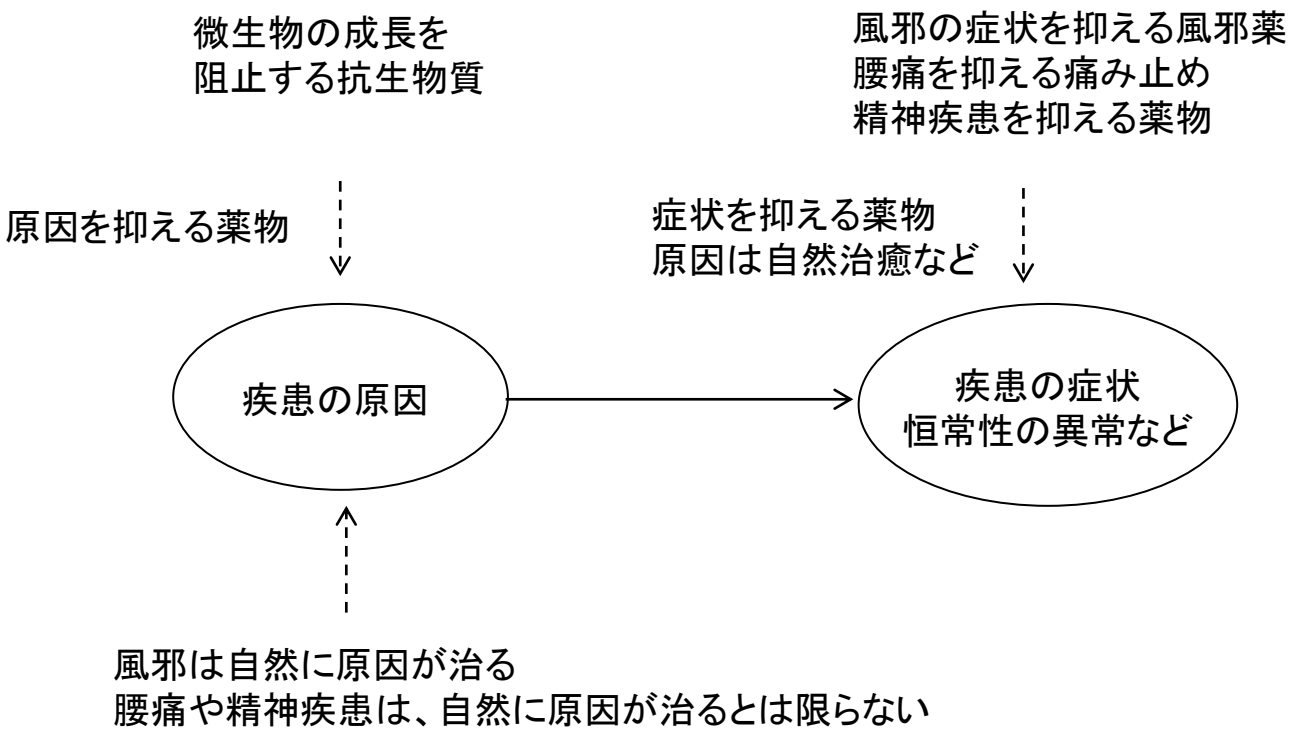
異常な満足 ← ドーパミンを抑える薬物療法
満足を減らす

恒常性から
見た異常 ↕

異常な不満 ← セロトニンを増強する薬物療法
不満への耐性を付ける

認識の誤りには生誤評性がある、不満を減らすのは不適切
ドーパミンを増やすと薬物中毒
セロトニン増強なら薬物中毒や問題行動でも使える可能性

精神疾患・問題行動
薬物療法

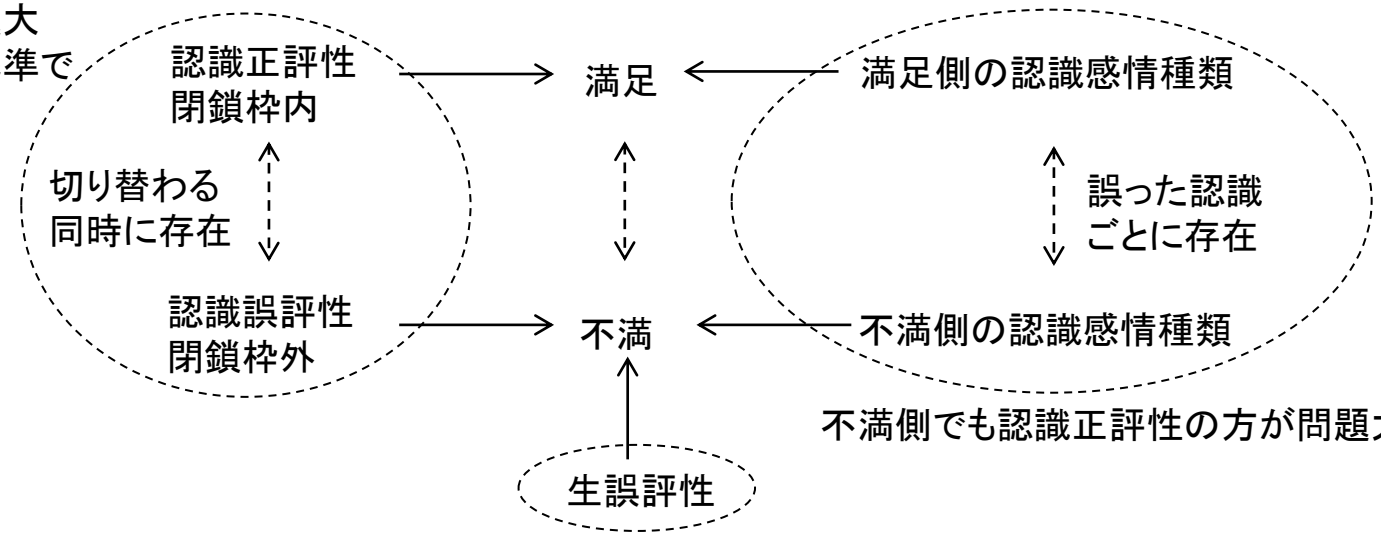


治療そのものに、原因の治療と症状の治療がある
痛みも原因不明で症状を治療する場合がある、精神疾患と同じ
薬物療法で抑える種類は少ない、異常な満足・不満・活動性位
薬物療法だけでなく原因の治療も必要、認識や知性の修正

精神疾患・問題行動
満足・不満の原因

満足側は疾患と言いにくいが不満側と同様に問題、浪費など
満足側でも妄想・幻覚なら疾患、閉鎖枠内、ドーパミン抑制が効く
セロトニン増強が効かない場合は満足側の可能性

認識正評性の
方が問題大
推論の基準で
生不満



不満側でも認識正評性の方が問題大

誤った認識には常に生誤評性がある、認識外
明確な現実に曖昧な生誤評性が付随
セロトニン増強が汎用である原因
人間的認識による隠された生不満を見る必要

生誤評性・認識正誤評性・感情種類が複合的に絡む
3種類とも生現実化と開放で修正可能
満足・不満よりも認識の正誤が問題
満足・不満は正・誤評性と関係する、複雑・特殊かつ重要

精神疾患・問題行動
満足・不満と認識・生現実

	満足	不満
認識	認識満足、満足感 認識正評性 満足側の認識感情種類 問題中	認識不満、不満感 認識誤評性 不満側の認識感情種類 問題小
生現実	生満足 良い生息状況 目標	生不満 悪い生息状況 問題大

誤った認識正評性
は生不満に繋がる

重要なのは認識満足・不満よりも生現実・生息状況、認識満足は認識不満よりも問題大
曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ、人間的認識による生不満
満足感でなく自己の生息状況、誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪
満足は人間の一部で曖昧、満足を見るだけでは生満足は分からない
生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見る、すべての満足から一歩引き生不満
スポットライト的な閉鎖満足は誤り、一点で高い満足でなく全体での満足が正しい

精神疾患・問題行動
活動性

高活動性の認識感情種類 → 問題行動・攻撃

↕ 誤った認識ごとに存在 ↕

低活動性の認識感情種類 → 精神疾患・自損

感情種類の問題は開放現実で修正可能
高活動性の方が社会的問題は大きい
精神疾患でも活動性が上がると暴行・自殺など
問題行動に対するセロトニン増強も、高活動性に注意する必要

精神疾患・問題行動
修正全般と継続的修正

- 修正の対象は「正しいと評価した認識」のみ、他は重要でない
  - 真に正しい認識に対する誤評価・誤評性が修正への抵抗、正評性が問題で修正
- 認識と知性は長い時間を掛けて作り上げてきたもの、修正するのにも長い時間がかかる
  - 継続的修正が必要
- 人間的な認識は誤りであり、現実的・生物的認識が正しい
- 人間の生現実化により正しい認識に修正すれば、人間・現実全体で整合
  - 外部から生息状況を見る事で、生人間・生感情・生満足を理解
  - 人間的で曖昧な満足感は根拠にならず、生息状況を見る必要
  - 曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ、人間的認識による生不満
- 認識・知性の修正対象として自己の理解が重要、生自己・真の自己は分かりにくい
  - 自己の生息状況として見るのが分かりやすい
  - 満足感でなく自己の生息状況、現実的な真の満足
- 現実と整合する生感情の理解が重要、感情種類の開放・無認識感情・地味感情など
- 誤った認識正評性は生不満に繋がる、認識満足は認識不満よりも問題大
  - 誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪
  - 「誤った認識満足の形」は当解析により理解できる、誤りを修正して生満足化

精神疾患・問題行動
修正全般と継続的修正

- 満足は人間の一部で曖昧、満足を見るだけでは生満足は分からない。
- スポットライト的な閉鎖満足は誤り、一点で高い満足でなく全体での満足が正しい
- 無認識感情から見て、すべての満足から一歩引き生不満を見る
- 修正により満足がなくなる不満感も、正しい認識への誤評性、元の正評性から誤り
- 開放現実を使い継続的に修正、現実も人間も重要なので同時に直す
- ある程度正しい部分を作成、既にあればそれを利用
  - 正しい部分を作る事が重要、誤りの破棄だけでは駄目
- 最初から正しい知性を作成、明確な現実を理解し人間へ開放
  - 正しい知性に従って誤った部分を継続的に修正
  - 普通から離れた正しい知性と認識を作る
- 人間・現実の中間を生現実化、感覚・行動、生物・物理・身体など、
  - 感覚・行動においても、曖昧な人間的満足でなく明確な生現実的正しさ
- 対人関係も生現実化、人間的より生物的・動物的
- 無認識感情も重要、一歩引いて感情を見て開放、現実への抵抗が強い場合に有効
- 修正した認識による生満足を理解、抵抗を回避
  - 現実的な部屋の整理・掃除、植物・動物から生感情
  - これらも人間的でなく現実的・生物的

精神疾患・問題行動
修正全般と継続的修正

- 満足・不満は人間の一部で曖昧、生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見る
  - 人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる
- 感覚的でなく現実的検証に感覚を合わせる
- 修正の基準点を曖昧な満足でなく明確な現実にする、ただし修正の目的は生満足
- 行動・環境における人間的無駄を無くす
- 生不満は生息状況の問題、現実的問題は生不満、原因は現実でなく人間
- 満足はあるのに現実的にうまく行かない場合、実際には満足から誤り
- 誤った認識の区分を変えるのでなく、現実・生物方向に直す、閉鎖区分でなく開放現実
  - 閉鎖的な区分でなく生現実に対する程度で評価
  - 開放的理解によりすべての実区分で生満足
- 表面的な問題は閉鎖分断のためバラバラで複雑、当解析で根本原因が分かり単純化
  - 常に根本原因から修正すべき、すべてのこだわりを無くして現実を見れば収束

精神疾患・問題行動
近辺・遠方と修正

- 近辺・現在は明確・重要、遠方・過去は曖昧・非重要
- 近辺を先に修正し遠方へ開放、近現実開放、広域は近辺を含むので重要
- 最初から正しい知性を作成、近辺だけでなく、遠方への開放理解も必要
- 近現実から生満足・無認識感情を見れば、修正は容易で高速
  - 「自然の中で現実を見てこだわりを無くす」
  - 「部屋を整理して外との現実的繋がりを見る」
- 現在を先に修正し近現実開放、近現実から過去・空間遠方へ開放

精神疾患・問題行動
現実の誤り

- 現実は人間より正しく理解できる
- 現実の誤りが疾患に現れる場合は問題が大きい
- 「正しいと評価した認識」の閉鎖枠内・外は同時に存在、挙動が変わる
- 妄想・幻覚は閉鎖枠内、ドーパミン増大と関係、認識正評性
- 薬物中毒も妄想・幻覚やドーパミン増大、薬物で強化した認識正評性
- 妄想・幻覚・強い現実逃避は問題が大きい、現実逃避は閉鎖枠外
- 人間・現実が閉鎖分断、現実だけ見るのも不十分
- 開放現実から生人間を見て、人間を生現実化する必要
- 現実への抵抗が強い場合は無認識感情が有効

現実の変形
- 閉鎖枠内、すり替え・妄想・幻覚など
  人間的な変形、認識正評性
- 閉鎖枠外、無視や現実逃避など
  認識誤評性

精神疾患・問題行動
認識破壊

- 大うつや双極性障害のうつ、推測や行動ができない、「正しいと評価した認識」がない
- 「抑うつ者の現実主義」やネガティブ思考
  - 人間的な「正しいと評価した認識」が破壊
  - 現実的だが「正しいと評価した認識」のない状況
  - 人間曖昧・現実明確、明確な現実的誤りが見える
- 認識誤評性と生誤評性だけで、認識正評性がない
- 破壊前と認識破壊は時間的に変化し、特定時間において一方だけが存在
- 認識破壊は「正しいと評価しなくなる」だけで急に発生
- 双極性障害の破壊前は疾患、大うつの破壊前は疾患とみなされない
- 破壊前が疾患でなくても現実的でない、普通でも不十分
- 「抑うつ者の現実主義」の問題も、破壊前が現実的でない
- 「正しいと評価した認識」を作る必要
- 活動性にも注意、治療不十分で活動性が上がると自殺の可能性
- 認識破壊以外の修正でも、正しい認識が不十分なまま現実化すると認識破壊・うつ
  - 壊れない範囲で治療・修正する必要
  - 回避するには現実的・生物的認識を作り上げる必要、簡単ではない
  - 正しい認識ができれば、現実を見ても認識破壊が起こらない

精神疾患・問題行動
開放・閉鎖の誤り

- 閉鎖枠が強い、多閉鎖、誤りが大きい、統合失調症、双極性障害、解離症
- 現実から開放、現実から生満足へ繋げる
- 閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖枠が残っていたら閉鎖のまま
  - 突き抜けでなく開放し、閉鎖枠を含めた全体を修正
  - 突き抜け元でなく突き抜け先が問題、閉鎖枠を含めた突き抜け先を修正
  - 継続的修正は時間が掛かる。突き抜けで急に分かった気になるのは誤り
- 特定の感情種類への一時的閉鎖、強迫症、食行動障害
- スポットライト的な閉鎖満足は誤り、一点で高い満足でなく全体での満足が正しい

【局所広域閉鎖】

- 自己（局所）・社会（広域）の閉鎖、局所・広域が誤って別々に見える
- 本来の局所・広域は重なる、局所も広域も近辺を含むので重要
- 本音・建前や不良・善良などの閉鎖は普通に存在
- 一方を正しいと評価し、反対側で問題、正しいと評価した方が問題
- 局所が閉鎖範囲内、犯罪、引き籠り、浪費、新型うつの認識破壊前
- 広域が閉鎖範囲内、仕事による過労、従来うつの認識破壊前
- 近現実から見て正しい広域を理解し修正、近辺・遠方で開放連続
- 自己・他者の連携における開放した相互生満足を理解、近辺なので重要

精神疾患・問題行動
感情の問題

- 感情は二重人間のため曖昧で正誤不明
- 感情に囚われる事自体が人間的・閉鎖的で誤り、感情を生現実化、生息状況を見る
- 人間的で曖昧な感情・満足でなく、現実的・生物的で明確な感情・満足
  - 曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ、人間的認識による生不満
  - 満足感でなく自己の生息状況、現実的な真の満足
- 満足・不満は感情の一部であり、感情と同じく囚われる事自体が誤り
- 認識を修正して生満足を求める必要、生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見る
- 認識誤評性より認識正評性の方が問題、誤った満足は害悪、誤りを修正して生満足化
  - 無認識感情から見て、すべての満足から一歩引き生不満を見る
- 無認識感情も重要、感情に囚われた場合は囚われない・こだわらない事で修正
- 無認識感情は、感情種類の開放や生物的感情とも繋がる

精神疾患・問題行動
感情の問題

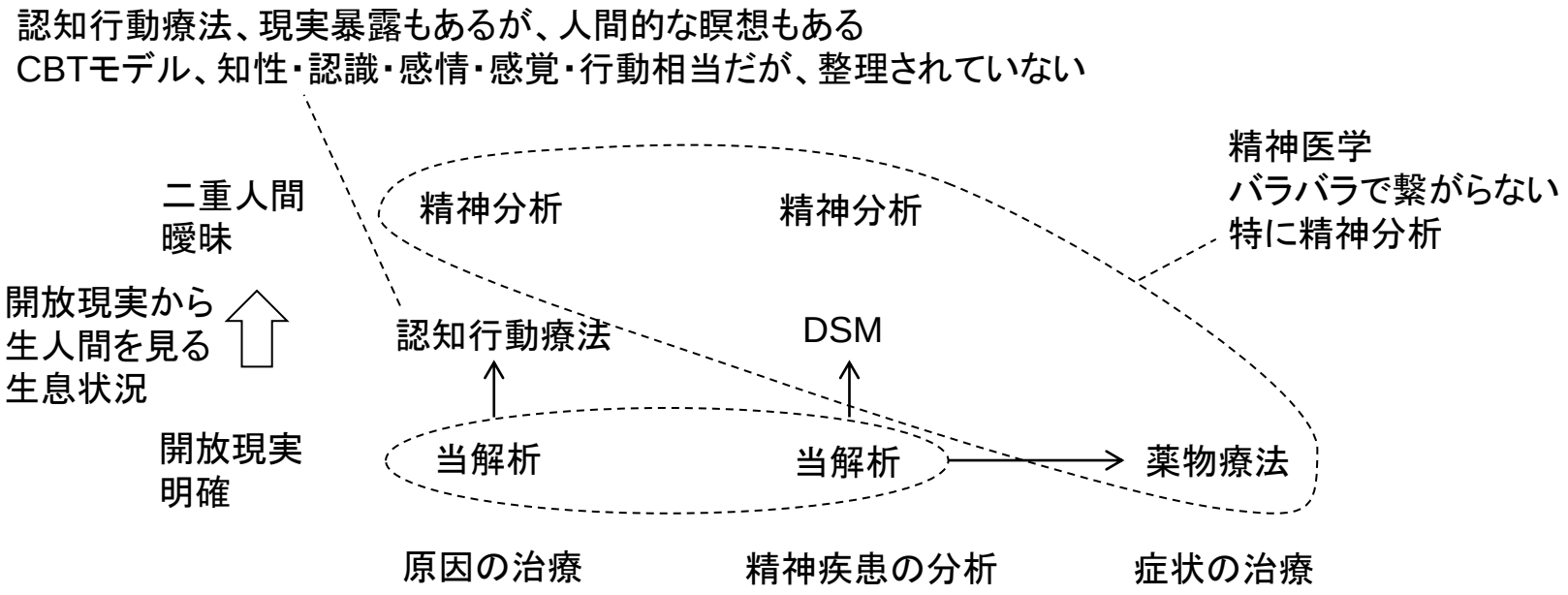
- 一か所だけの満足は閉鎖と人間的こだわり、開放と無認識感情で修正
- 感情自体が人間的で曖昧、感情の問題に対する原因が認識誤りなのかも良く分からない
- 現実から見た感情の正誤判定をすべき、現実の問題であれば現実を直すべき
  - 現実や開放・閉鎖の誤りが明確、強迫症、食行動障害
  - 現実や開放・閉鎖の誤りが不明確、不安症、ストレス、認識感情の正誤から検証
- 現実とすべての感情種類を開放理解
- 感情種類は多数、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤り
- 地味感情まで開放、諦観・まったり・開き直り・皮肉など、無認識感情から見える

精神疾患・問題行動
精神疾患・問題行動の種類

種類	現実の誤り*1	認識破壊	開放・閉鎖の誤り	感情の問題*2	死の危険	主な薬物療法*3	大区分
統合失調症	大きい		強い閉鎖		あり	ドーパミン減	大きな認識の誤り
解離症	大きい		強い閉鎖、多閉鎖		あり		
物質中毒	大きい		強い閉鎖		あり		
双極性障害	大きい	あり	強い閉鎖		あり	ドーパミン減 セロトニン増	
従来型うつ		あり	局所広域（広域*4）		あり	セロトニン増	中程度の閉鎖
新型うつ		あり	局所広域（局所*4）		あり		
犯罪、引き籠り、浪費			局所広域（局所*4）	多少あり	場合による*5		
強迫症、食行動障害			特定の感情	あり		セロトニン増	
不安症				あり、不満側		セロトニン増	感情の問題*2
トラウマ				あり、過去、不満側		セロトニン増	

*1 大きな現実の誤りや認識破壊は問題が大きい
*2 感情の問題は現実の検証が必要、認識の誤りが原因かどうかも不明確、満足・不満も同様
*3 セロトニン増強は現状よりも汎用的に使える可能性、ただし高活動性に注意
*4 正しいと評価した方が問題、認識破壊は破壊前
*5 犯罪は他者の殺害や、他者からの殺害などがあり得る

精神疾患・問題行動
精神疾患の療法



精神分析は精神医学の出発点だが古い、本来の医学は現実的
当解析は精神分析の総合性を代替、全体が繋がり解析能力も高い
現実的という意味では、精神分析より当解析の方が本来の医学に合う
別分野まで開放的に繋がる、神経・犯罪・教育心理学まで

目次

- 概要
- 基礎
- 人間の各機能
- 精神疾患・問題行動
- **社会**
- 応用
- 結論

【各章の要約再掲】

- 社会の構造について、行動自体の実規則化である行動実規則化を中心として解析する。人工物の実規則化を含め、実規則化はこの章全体で使用している。行動における遺伝的規則と実規則化の比較が重要である。
- 行動資源・需要・供給・共同行動・参加・不参加について解析する。
- 行動実規則化と人間・現実を合わせて解析し、因習の問題を提示する。
- 多環境適応と多様性について解析する。多環境適応は種の多様性に相当する生態学的な概念である。規則性の低い規則である多様性と、人間が求める規則との関係を分析する。その延長として多個人の集約・分散について解析する。
- 権利・競争・需要・供給について解析する。権利を「行動資源の優先度」と定義する。権利は生態学とも関係する重要な概念である。実規則化権利の構造を共同行動・暴力と組み合わせて解析する。権利と貨幣・価値・現実・自然物・人工物・人工物・多様性などを組み合わせて解析する。
- ここまでの解析を用いて集団・社会を解析する。主権国家・勤務集団・家族・固定集団などについて解析する。集団・社会と人間・現実・開放・閉鎖・認識などを組み合わせて解析する。

（当スライドの内容は主に茶色）

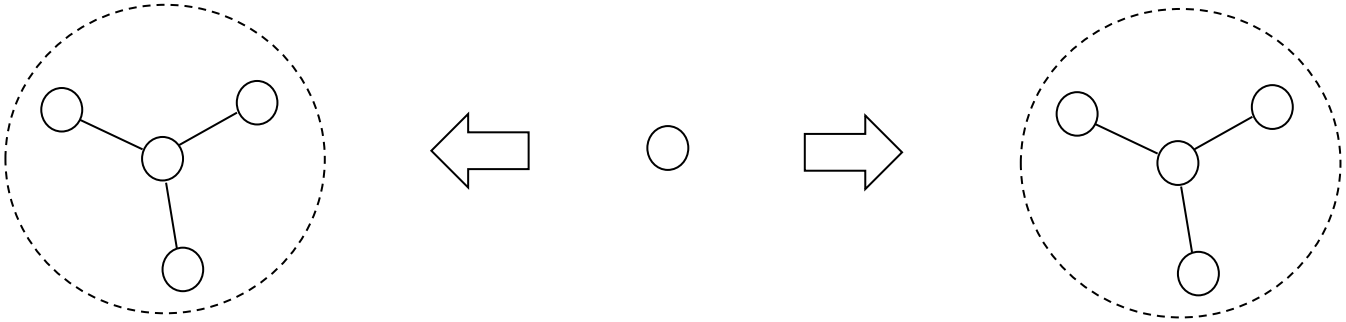
社会
共同行動と参加・不参加

多個人は多数の個人

遺伝的共同行動

多個人

実規則化共同行動



参加は自発的に決まる
参加＝生満足

参加は遺伝より生満足増加が必要
参加≠生満足

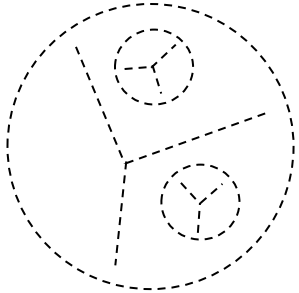
共同行動、空間で一体的な行動、多個人連携の一種
多個人連携の信頼・不信により参加・不参加
遺伝的外規則でも実規則化でも、参加には生満足が必要、参加生満足
全員が参加生満足を持てば相互生満足
人間は優れた実規則化により遺伝的共同行動を超える事が可能

社会
多環境適応

放射状の三本線で
規則を示す

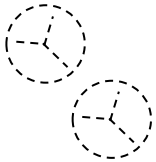
適応、追加的な規則が
特定環境で成立

時空間、環境の差



共通の規則
近縁の種など

特定環境で1規則に収斂
収斂進化



多環境適応、多数の規則が多数の環境下で適応
生物、人間、機械など、生物なら種の多様性
多用で規則性は低いが、完全な不規則ではない
人間は知性により様々な環境に適応可能、実規則化

社会
多様性と規則

人間は規則を求める　　遺伝子は本質的に多様性

⇩　　⇩

実験選択
遺伝的多様性

単純
高正確
規則的

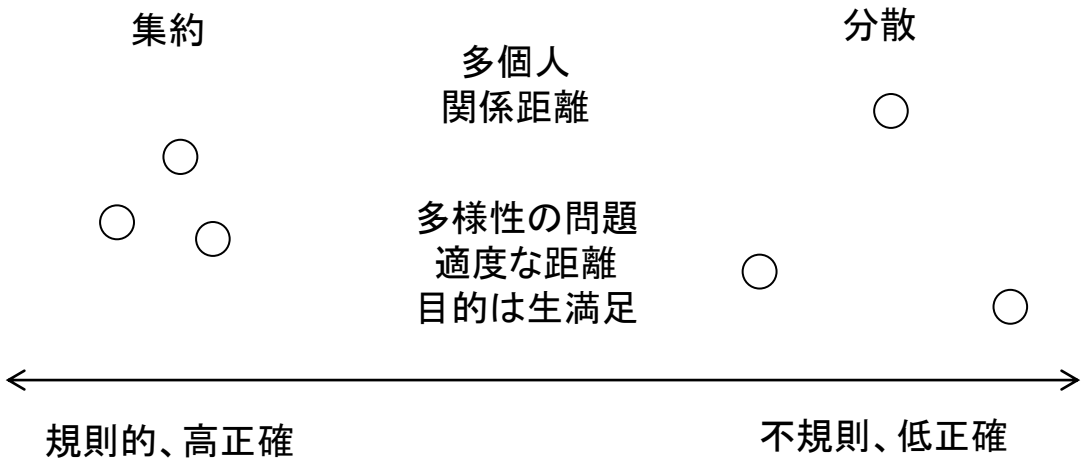
←→

複雑
低正確
不規則

多環境適応
種の多様性

生現実上の多様性は受け入れる必要、無視して単純化するのは誤り
できるだけ高正確にすべき、別の規則や共通の規則の発見など
多様性でも完全な不規則ではない、低正確な規則としては使える
生物の多様性なら各種モデルで分析される
実規則化なら実験選択は推測で回避可能、多環境適応は回避不能

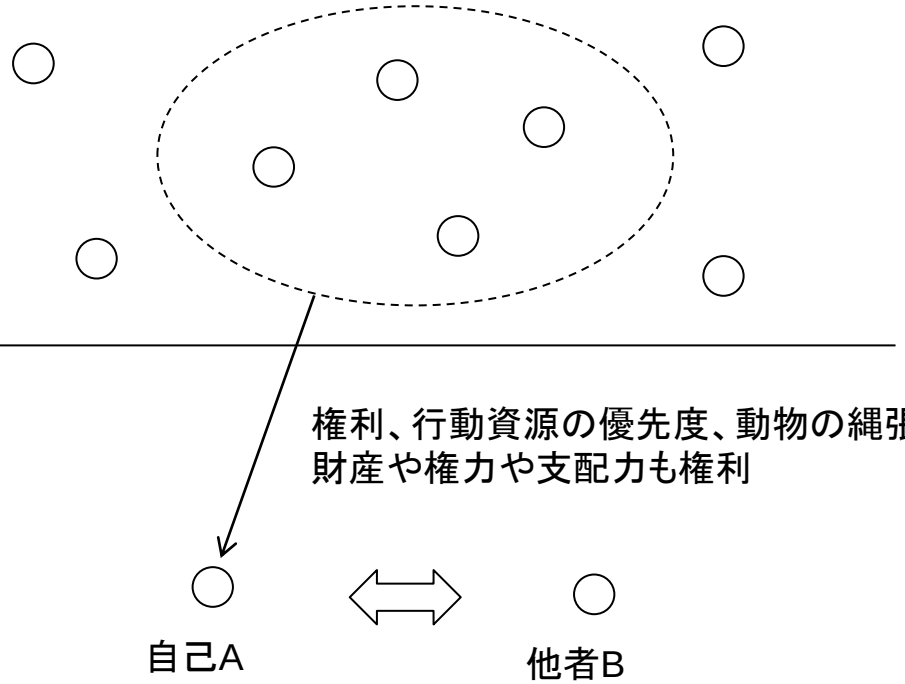
社会
集約・分散



多個人の集約は一つの外規則、遺伝的規則または実規則化
他の規則と合わせる必要、遺伝的内規則、実験選択、多環境適応など
人工物でも同様の問題、建物は同じでも部屋を分けるアパートなど
生現実上の規則でないと無意味、現実を見る

社会
権利と競争と需要・供給

生現実、人間と現実
環境と自己
自己も権利の対象



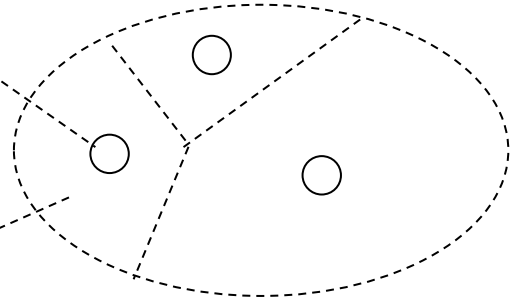
権利、行動資源の優先度、動物の縄張りや順位など
財産や権力や支配力も権利

相互作用で確定、競争・無競争とも生物の基本規則、人間においても必要
需要大で供給小なら競争により生満足減少
需要・供給は行動資源から存在、生物でも需要・供給は存在
目的は長期生満足、権利は目的でなく手段
権利と生満足は別、誤って権利を使えば生不満

社会
多個人と権利

個々に行動、一体化ではない
権利と共同行動は別の規則
競争・無競争も権利の規則の一部

多個人



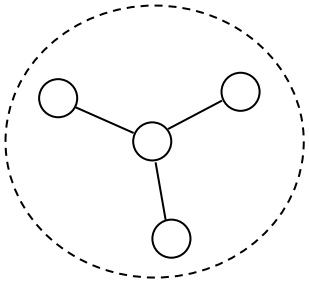
権利の模式図
広さ＝同一種類に対する
　　権利の強さ
生現実に対する権利
多個人の行動も対象

小権利
従属

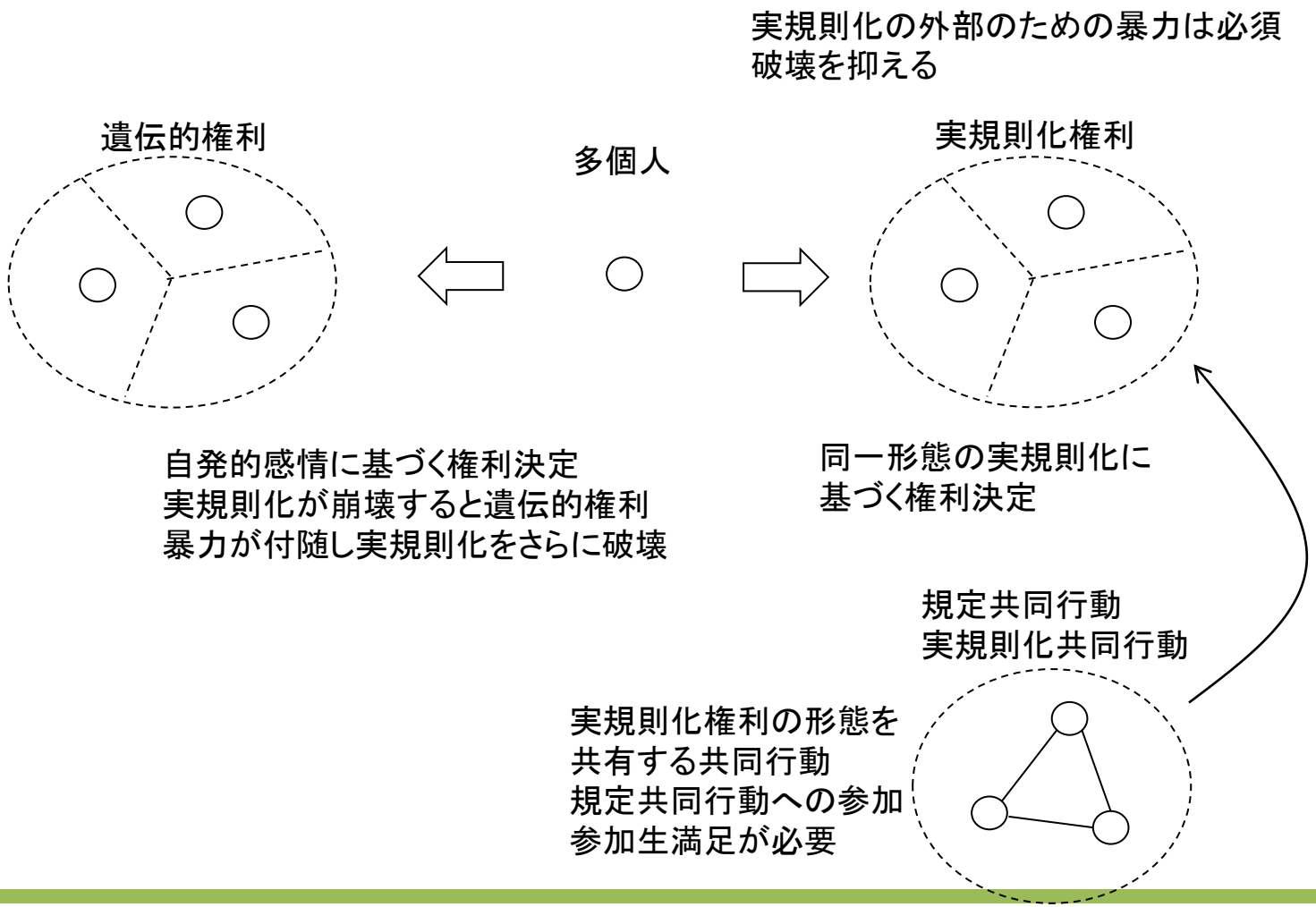
大権利
主導

主導・従属も遺伝的規則
生満足・生不満とは別

共同行動、一体化



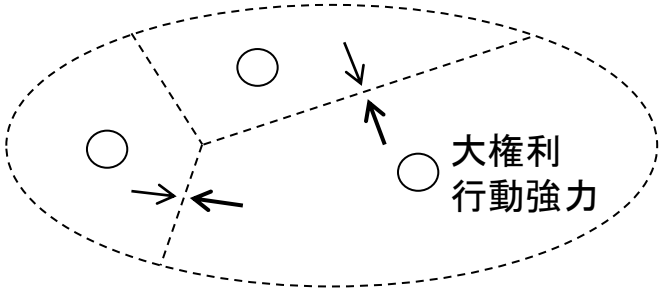
社会
実規則化権利と規定共同行動



社会
多個人の制限付き・無制限権利

多個人の権利、大権利なら増加できる

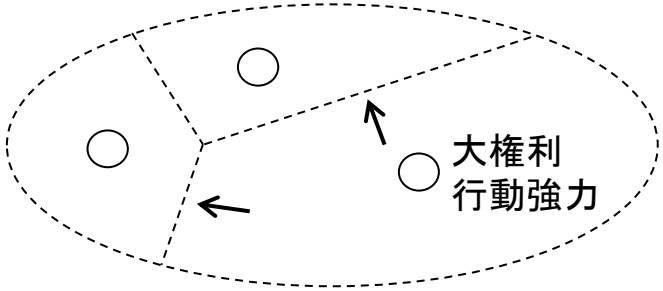
遺伝的権利



制限付き権利による増加抑止

強者が優先される
弱者も状況により生存可能
環境の良し悪しに対する個体数調整
弱者や従属が生不満ではない

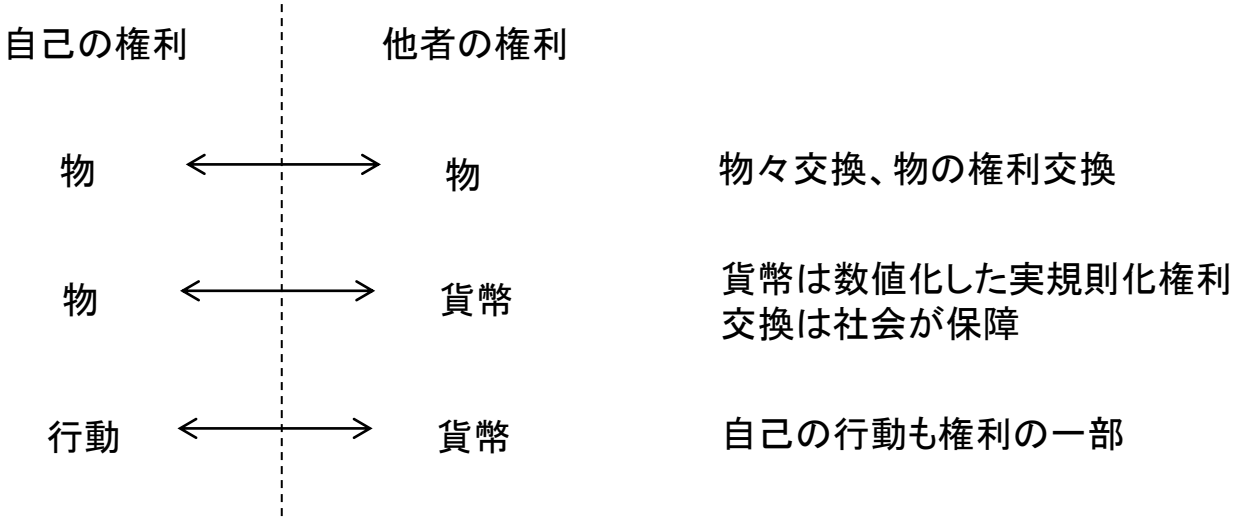
実規則化権利



増加抑止なしの可能性

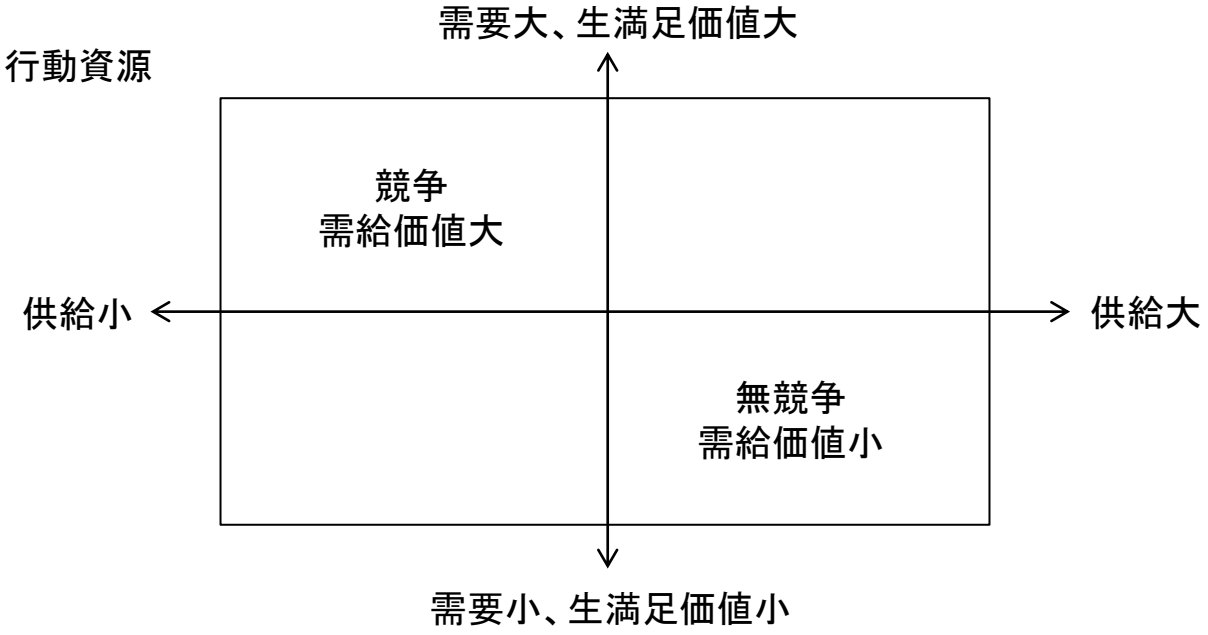
無制限権利、増加抑止なし
無制限権利は参加生満足がなく弱者離反
規定共同行動に制限付き権利が必要
遺伝の制限付き権利を実規則化でも維持
小権利が良い訳ではない、因習など

社会
権利交換と貨幣



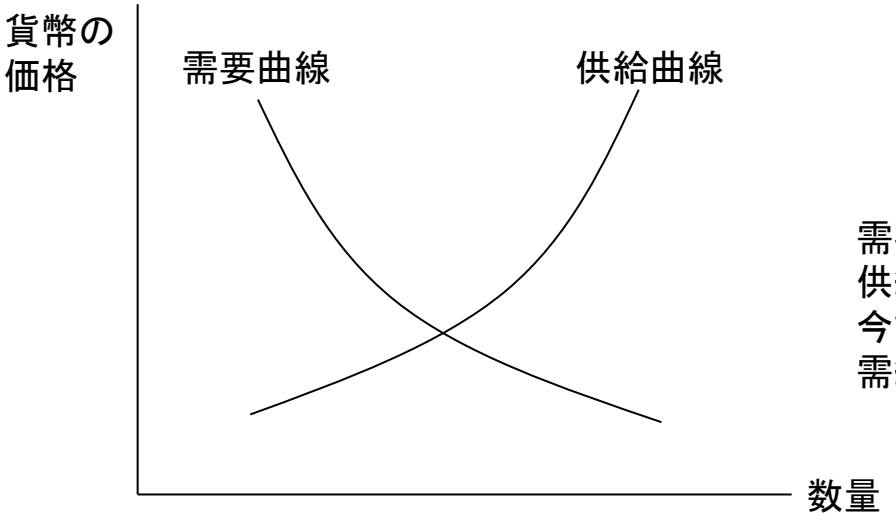
権利交換、実規則化共同行動の一種、参加生満足が必要
確保困難な行動権利の容易化、生満足減少の抑止
目的は個々の長期生満足、権利や貨幣は手段
様々な権利を交換可能、土地など
交換や貨幣化できない権利もある、地位など

社会
価値と需給



権利は行動者、価値は行動資源
需給価値は交換できない権利にもある
競争により生満足減少、需給価値より生満足価値が重要
過度な競争を抑えれば全体の生満足増加、競争禁止ではない

社会
貨幣と需給



需要側、高価格では競争、低価格では無競争
供給側、低価格では競争、高価格では無競争
今までの見方は需要側
需給曲線は供給側から見る事が多い

競争や需給は、権利交換や貨幣より基本的、貨幣が前提ではない
競争になれば生満足は減少、貨幣と生満足は直結しない
商品で見ると需給つり合いが最善、貨幣で見ると釣り合わない場合もある
需給とも過度の競争を抑えるべき、独占禁止や企業乱立抑制など

社会
権利と人間・現実

二重人間、曖昧

人間的権利、曖昧、解析不能、高級感
素敵なディナー、誤って正評性

開放現実から見る
人間の生現実化
生息状況

⇧

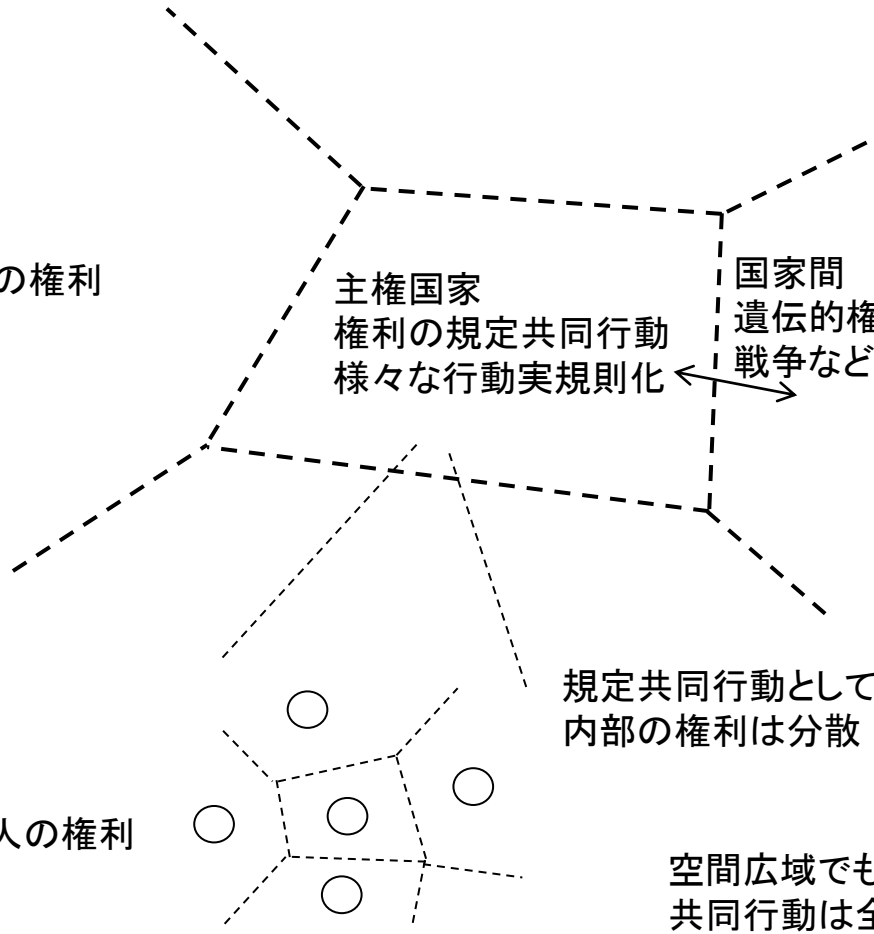
中間的権利、貨幣、人間的権利も現実的権利も対象
高い・安い食事、誤って価格に正評性

開放現実、明確

現実的権利、明確、安定して解析可能
物・時空間の所有量、生物的権利、養育人数など
適切なカロリーは毎日一定

現実的権利は生息状況の一部、貨幣より現実的権利、目的は権利でなく生満足
人間の存在意義は生物や遺伝であり、認識ではない、権利でも同様
様々な現実的権利の数値により、明確な解析や予測が可能
人間的・現実的価値でも同様、権利は行動者、価値は行動資源
地位など交換できない権利も現実的権利で見るべき、雇用時の養育人数など

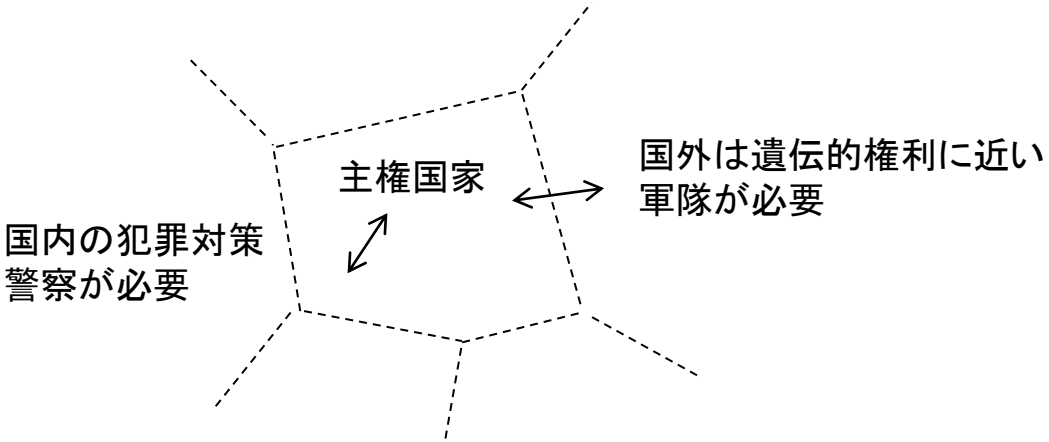
社会
主権国家



国際的な規定共同行動
国内より弱い
グローバリズムの進展は
国際的規定の進歩による

空間広域でも重要なのは個人の遺伝的内規則
共同行動は全員の参加生満足が必要、暴力も含む
誤った認識の国家や国際で生満足減少、修正する必要

社会
主権国家と暴力



実規則化権利が成立しなければ遺伝的権利
国家による暴力の必要性、国内外とも
暴力がなくなる事はない、破壊を抑える必要、威嚇・スマート兵器
国家破綻時も破壊を防ぎ実規則化権利に向かうべき

目次

- 概要
- 基礎
- 人間の各機能
- 精神疾患・問題行動
- 社会
- **応用**
- 結論

【各章の要約再掲】

- ここまでの解析を人間に関する事象の様々な分野に応用する。宗教・民族・家族・経済・政治・法・国際などを解析する。人文・社会科学以外の分野にも応用する。自然科学・数学・情報処理・産業・都市・農村などを解析する。最後に総合的な応用として、文化・学問・教育・歴史・未来などを解析する。

（当スライドの内容は主に茶色）

応用
宗教・民族

開放現実から見る
人間の生現実化
生息状況

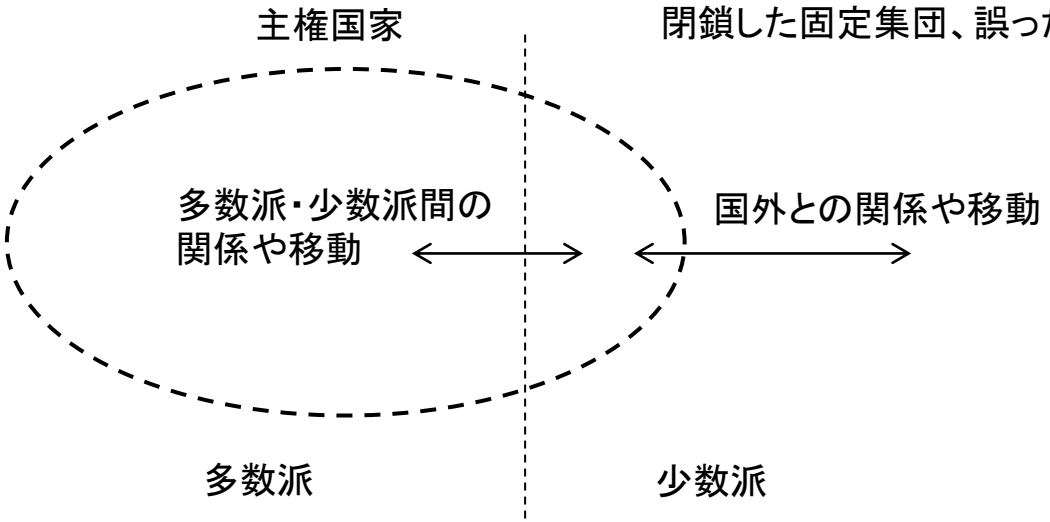
⇧

二重人間、曖昧	因習、教義、因習集団
中間的	宗教法人、民族に関する法、民族的職業 文化財、冠婚葬祭、行事
開放現実、明確	

宗教や民族は全体的に人間的、現実的な部分もある
最大の問題は宗教や民族による戦争や紛争、宗教より因習が問題
新宗教が離反を許さないと誤りに見えるが、因習集団でも同じ
日本の宗教は現実的、様々な宗教の行事等を開放的に受け入れ
禁欲主義は人間的で誤り、無認識感情が正しい、感情・満足から一歩引く

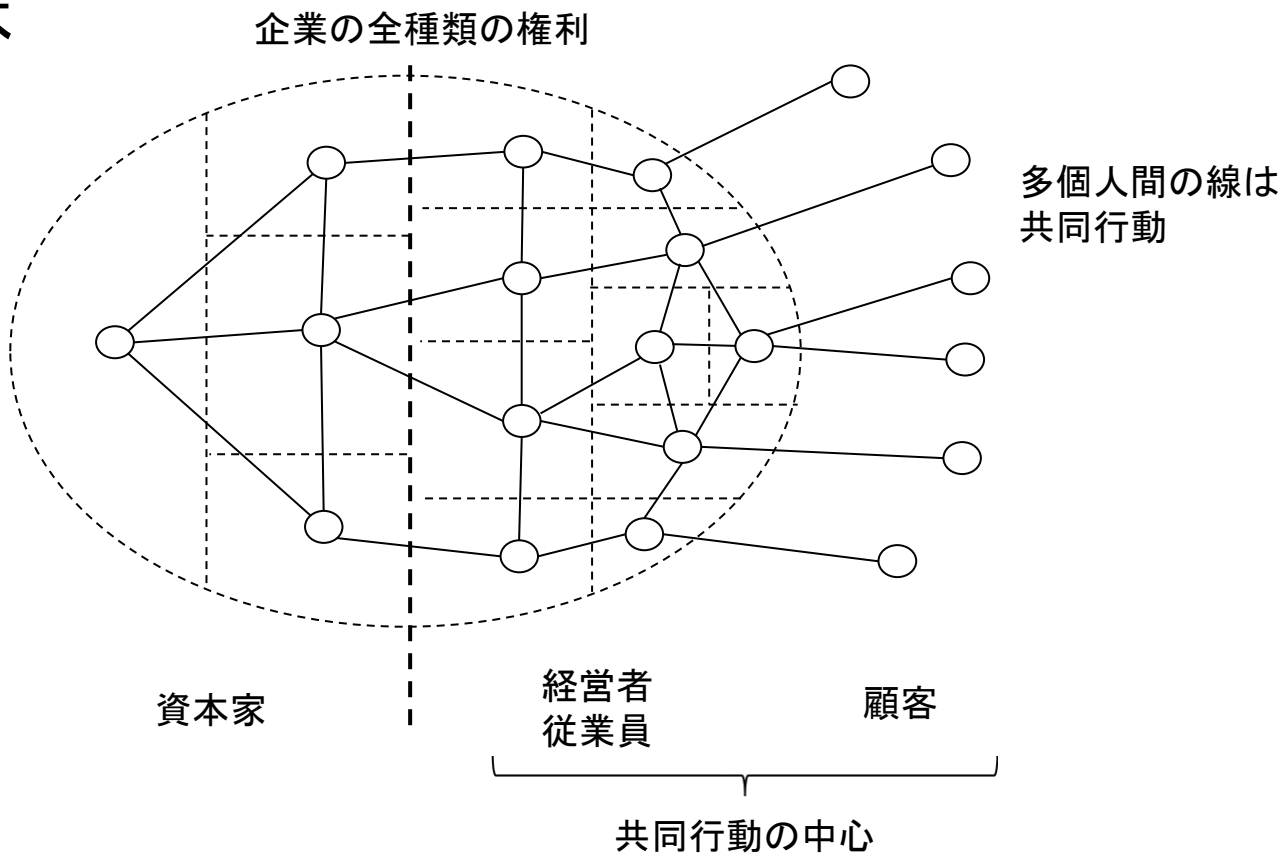
応用
多数派・少数派と開放・閉鎖

関係や移動を正しく開放的に理解する必要
閉鎖的に見るのは誤り、特に因習
閉鎖した固定集団、誤った全体的な争い



多数派・少数派とも正しい認識、正者に権利、暴力の回避
因習などの誤った認識を修正、科学技術や教育や職業訓練

応用
権利と資本



貨幣で見ればすべての権利を資本家が所有、企業の売却が可能
貨幣以外の権利は従業員もある、地位など、貨幣だけで見ても分からない
資本家が勝手な行動を取れば従業員や顧客が不参加の可能性、簡単に売れない
貨幣だけでなく社員数や雇用形態なども企業規模の一種

応用
政治と法と行政

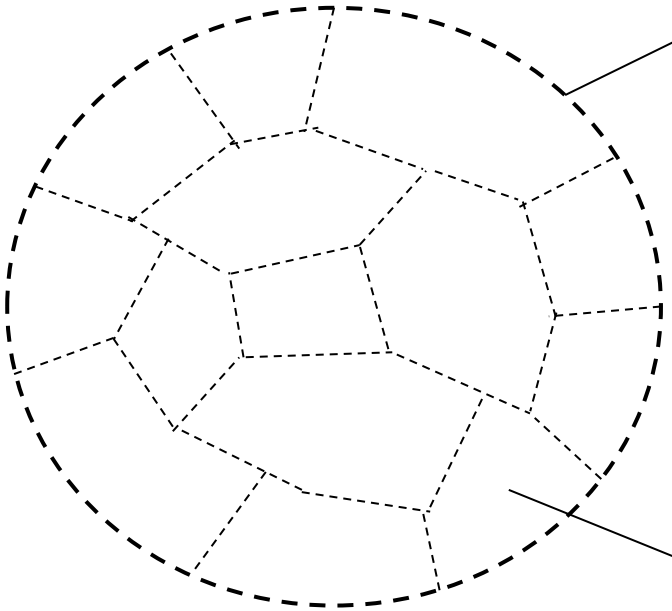
開放現実から見る
人間の生現実化
生息状況

二重人間、曖昧	因習、自由、民主、平等、政治学 主義、共産主義・イスラム主義など、閉鎖分断
中間	多数決、法、契約、行政 法も実規則化、慣例法や判例など
開放現実、明確	科学技術 現実的権利、複合共同行動、複合集団、動物に近い

共同行動において参加生満足が必要、なければ離反、国際政治でも同様
自由・民主・平等が「幸福」なのは誤り、認識正評性が問題、曖昧で解析不能
多数決は平均集約、特に誤者の多い途上国で問題、正集約が必要
現実的で正しい国家・国際政治なら参加生満足が可能、人間的では駄目
人間的な国家の暴力は特に問題、世界大戦や民族・宗教紛争など

応用
実規則化の階層構造と世界

欧米は良く似た実規則化の階層構造
主権の位置は欧米で別



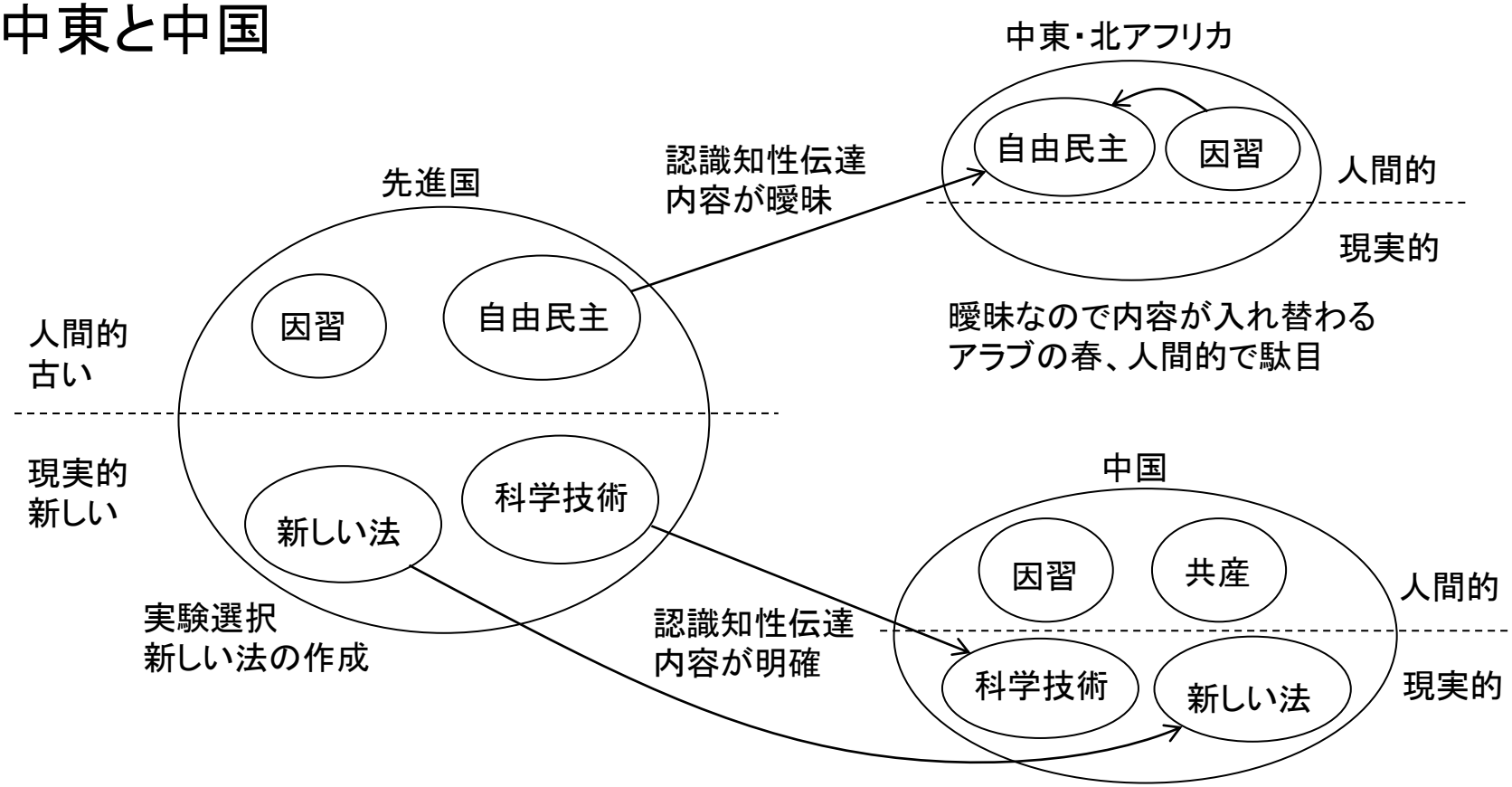
上位階層の実規則化
欧州共同体、アメリカ合衆国

様々な国家や地域、多様性
国家や地域ごとの役割の違い
実験選択や多環境適応、生現実の規則
立法の能力を持つ多数の個人が必要

下位階層の実規則化
欧州の国家、アメリカ合衆国の州

生現実上の規則の階層構造、集約と分散でも同様
多様性が必要、例え世界を統一しても「一つの実規則化」にはできない
アメリカ合衆国程度までが限界、貨幣の統一も難しい
主権国家を連邦的に統一する事は可能だが、全国家が参加する必要
正しい国際条約を積み上げて強化、グローバリズムの進展

応用
中東と中国

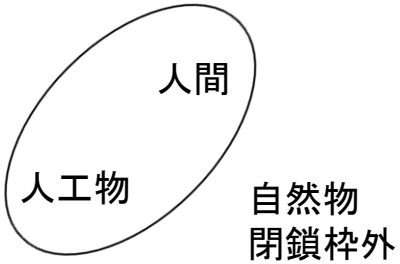


曖昧なので内容が入れ替わる
アラブの春、人間的で駄目

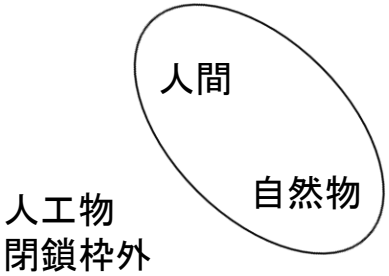
先進国に近い発展、自由民主でない
改革開放は開放現実に近い
問題はある、帝国主義的、階層なし

法は人間・現実の中間だが、因習・主義よりは現実的
中東・北アフリカでは因習の問題大、中国はそうでもない
伝達の経路より内容が重要、現実的な内容の伝達が必要

応用
人間を含む自然科学の閉鎖



自然破壊、公害、大量破壊兵器
初期モダニズム建築



環境思想
過度な自然保護や動物愛護

人工物と自然物は、本来なら自然科学で開放理解
人間が入るために閉鎖分断

応用
可換・原料自然物と希少化

同じ自然物でも、捉え方により
可換や原料の意味は変わる

	自然物	対応する人工物
可換自然物 需要小なので保護不要	需要小	需要大
原料自然物 人工物のため保護必要	原料として 需要大	需要大
非可換かつ非原料自然物 ある程度は保護必要	需要中	

原料としての需要は
人工物の需要の一部

人工物増加のため自然物が希少化、供給小
人工物の生満足価値が増加、自然物の生満足価値は相対的に減少
希少化により上がる価値は、生満足価値でなく需給価値
大権利が自然保護を行うべき、国家・先進国など

応用
数学と人間・現実

開放現実から見る
人間の生現実化
生息状況

⇧

二重人間、曖昧

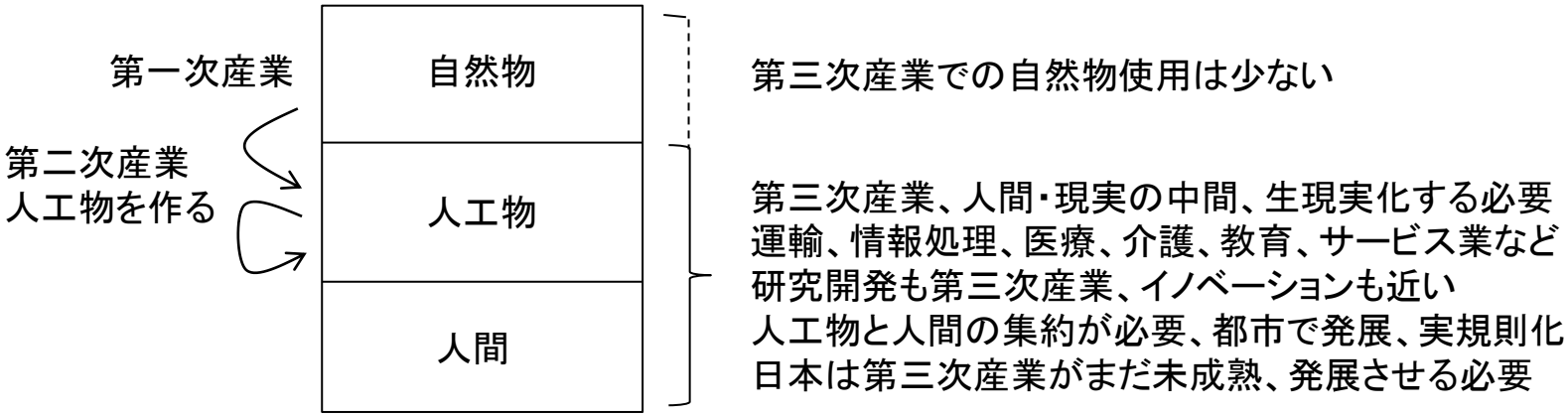
中間

開放現実、明確

「数学化」が曖昧なら結果も曖昧
数学の適用対象により様々
数学が「自然科学」で正しいという訳ではない
内容が問題、数字だけでも同様
適用対象ごとに人間の生現実化

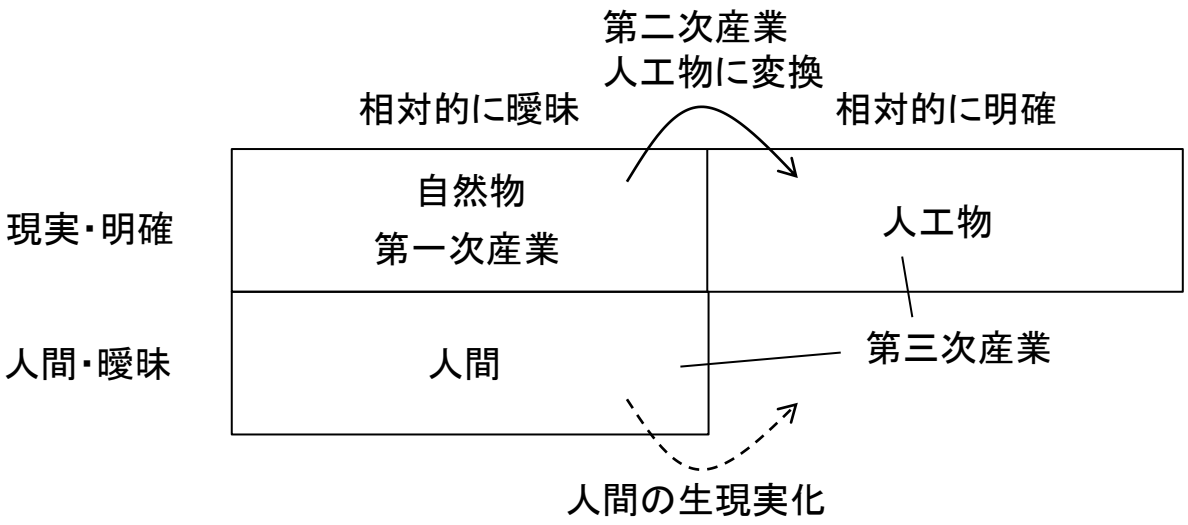
応用
産業の進化

第一次・第二次・第三次産業の順で発展



人工物の生満足価値大、自然物の生満足価値小
第一次・第二次産業は現実的、先進国レベルまで発展可能
量の制約においては自然物が重要、土地やエネルギーなど
量の制約により先進国は発展困難、途上国は発展の余地あり

応用
産業と明確・曖昧



今までの産業は自然物を人工物にする事で明確化・発展
人間は人工物化できない、生現実化する事で明確化・発展
人間の生現実化により科学技術のように発展できる

応用
産業と都市・農村

農村 第一次産業	工場 第二次産業	都市 第三次産業

先進国は工場でなく
都市の発展が重要

自然物主体 ←----------→ 人工物主体

分散 ←--------- 人間 ----------→ 集約

小 ←-------- 土地の生満足価値 --------→ 大

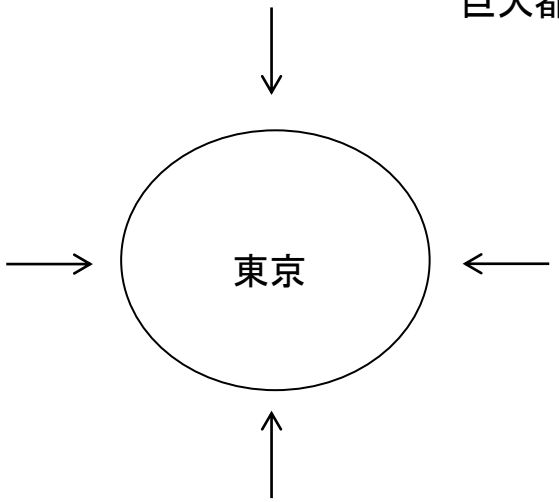
自然環境の供給大
需給価値小

自然環境の供給小
需給価値大

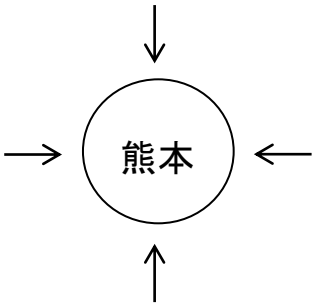
農村での自然観光の重要性、農村での数少ない成長分野
観光は第三次産業、交通などの人工物が必要、都市の延長

応用
大都市の集約・分散

巨大都市と大都市を分けて考える



巨大都市、極端な人口集約

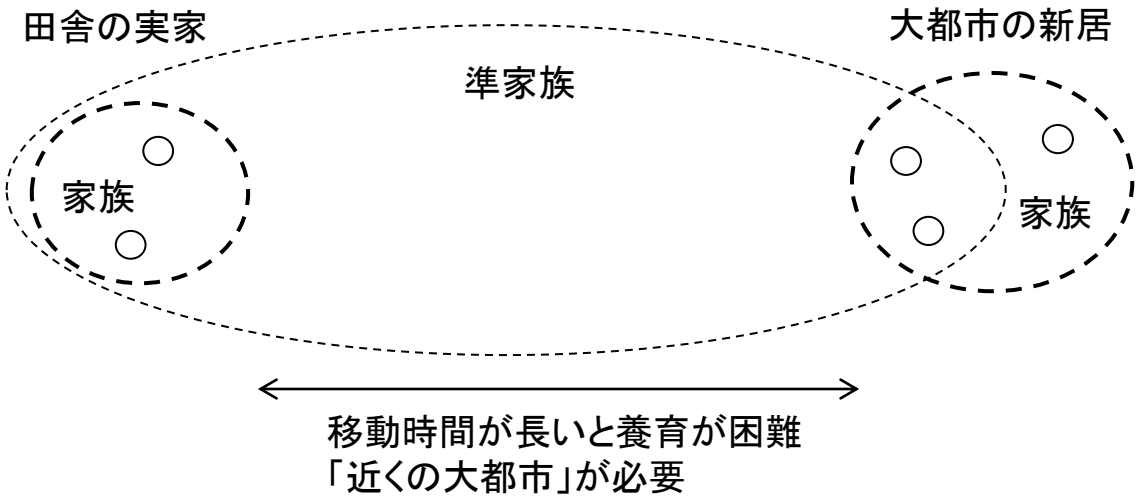


大都市、まだ人口集約可能

量の制約や多様性の問題
量の制約、土地不足
実験選択の問題、自然災害
多環境適応の問題、地方の発展阻害

他の大都市の人口と数を増やす事で改善可能
大都市を拡大、一部の都市を大都市に拡大
開発の集中、人工物と人間と第三次産業の集約
巨大都市への人口移動を防ぐ
関東・東北・北海道は大都市の数が少ない

応用
大都市への移動時間と養育



大都市の数が少ない関東・東北・北海道で合計特殊出生率が低い
大都市への移動時間は、養育以外にも教育・仕事・買い物など様々な面で重要

応用
人口と大都市数

（当解析は定性的だが、ここだけ一例として簡単な定量的解析）

国名	人口 1000人	大都市数*1 70万以上	大都市数指標 （大都市数／人口）×10億	一人当たりGDP ドル
アメリカ合衆国	329065	59	179	64767
日本	126860	16	126	41021
（関東・東北・北海道）	57445	3	52	
（日本その他）	70609	13	184	
ドイツ	83517	9	108	47786
イギリス	67530	10	148	42310
フランス	65130	8	123	42473
中国*2	1441860	194	135	10153
ロシア	145872	17	117	11191
ブラジル	211050	29	137	9344
トルコ	83430	12	144	8507
インド	1366418	75	55	2199
インドネシア	270626	18	67	4123
ナイジェリア	200964	19	95	2233

*1　複数の都市を統合、Demographia
*2　香港・マカオを含み台湾を除く

大都市数指標が大きいほど大都市数が多い、2018～2019年のデータ
先進国の大都市数指標、アメリカが最大、一人当たりGDPが先進国の中で突出
途上国の大都市数指標、先進国相当のグループと他のグループ、一人当たりGDPの差と対応
日本国内の大都市数指標、関東・東北・北海道は下位の途上国相当、その他はアメリカ相当

応用
文化・本・マスメディア

実用系と文芸系には幅がある、製品や作者などを個々に見る必要
人間の生現実化、作品の対象や作者・読者などの現実と生息状況
ゲームは実用系相当

開放現実から見る
人間の生現実化
生息状況

二重人間
曖昧

中間

開放現実
明確

ニュース
スポーツ

科学ニュース

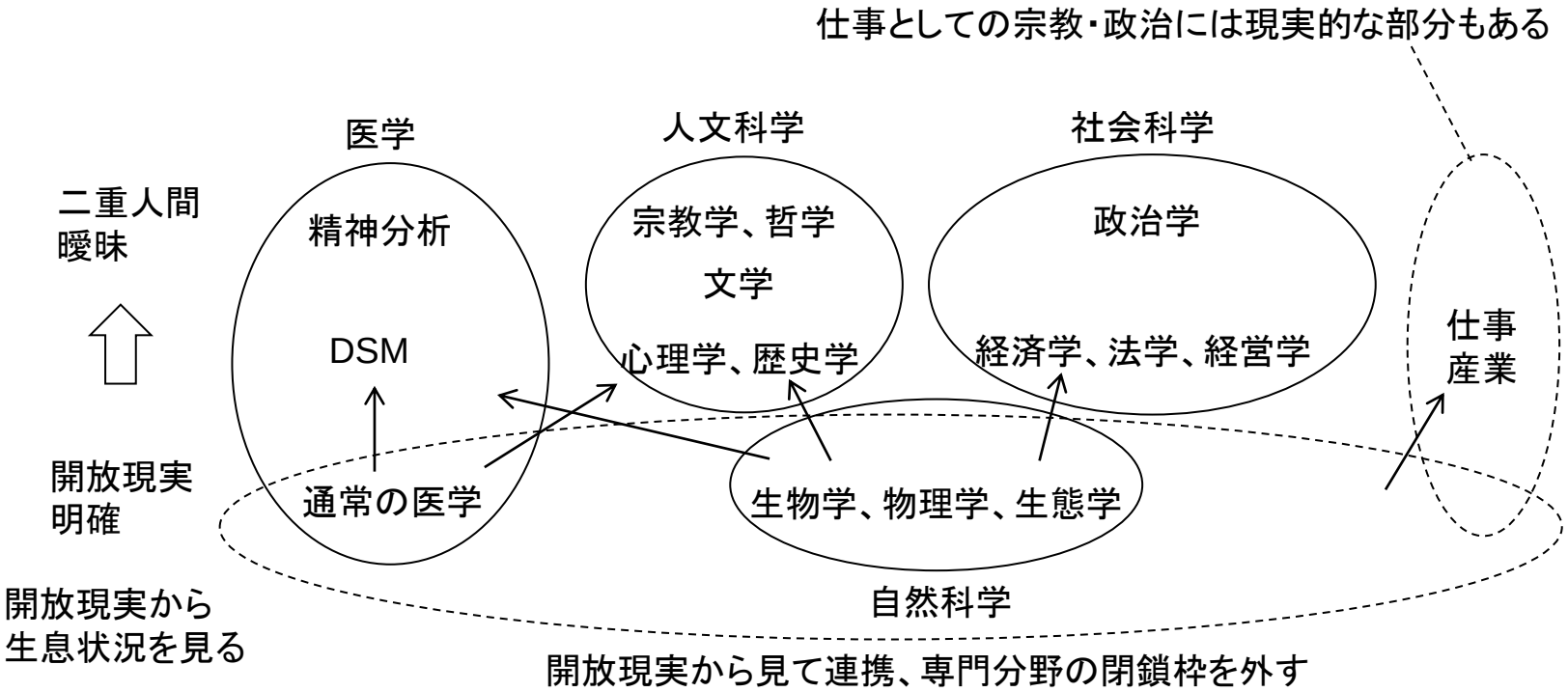
実用系
実用
実用的趣味

文芸系
文芸、芸術
音楽、芸能
漫画など

文芸系は全体的に人間的・閉鎖的
人間的こだわりや閉鎖満足も多い
文芸系でも生現実化が必要

暴力の問題改善策としてスポーツは有効、文芸系はあまり良くない
マスメディアは情報を集約、「表現の自由」は曖昧、正集約が必要
インターネットや大型書店・図書館は正誤が分散、全体の正誤は他と同じ

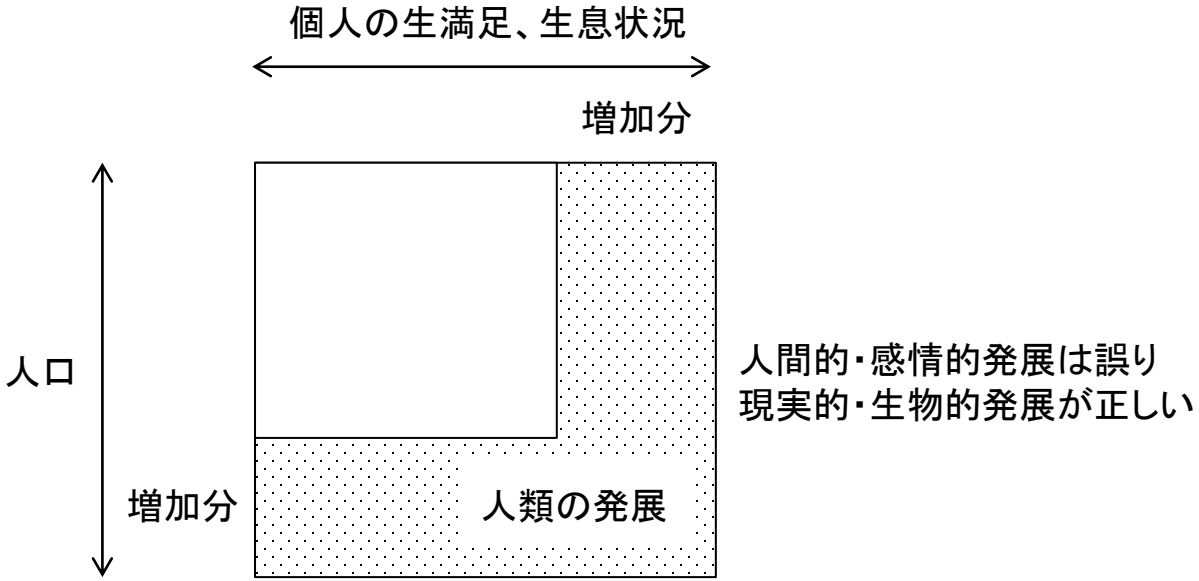
応用
学問



認識の重視が問題、思想・主義・学説・学派など、現実を重視すべき
当解析と医学と自然科学で、人間を生現実化、曖昧な人間的概念は不用
自然科学・医学の近くで人間を解析、学問全体の枠組みから変える
生物と同様に現実的な行動分析、医学・生態学的、食事、運動、養育、住居など
開放現実に基づいて学問を統合・整合、仕事・産業まで繋げる

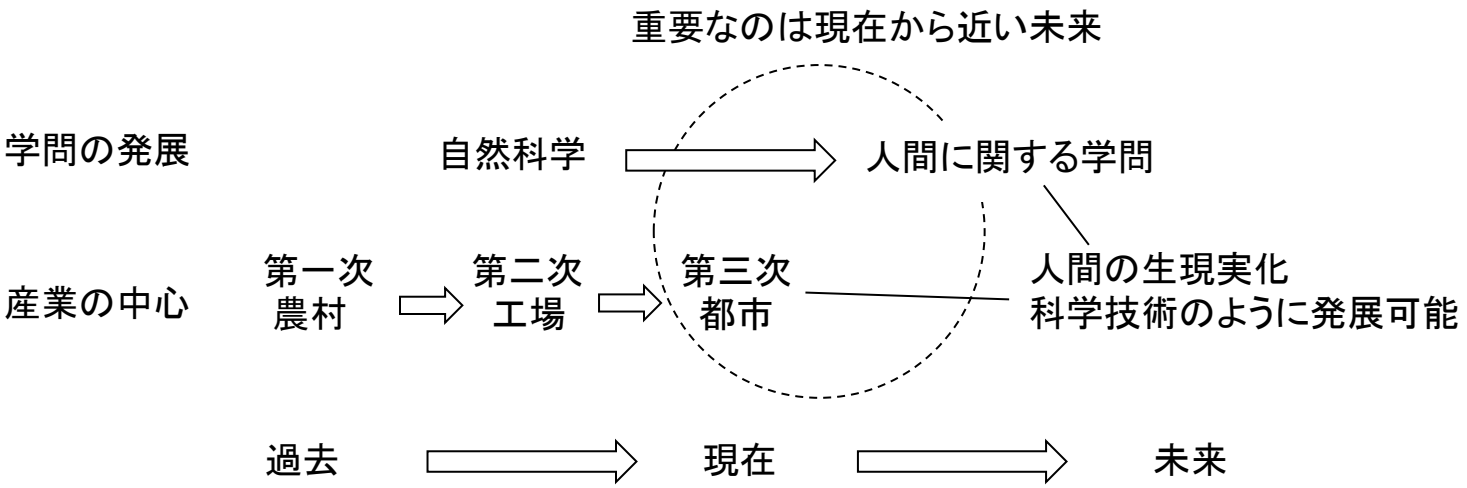
応用
人類の発展

必要な物・時間・空間、仕事が安定、大都市・自然、子育て



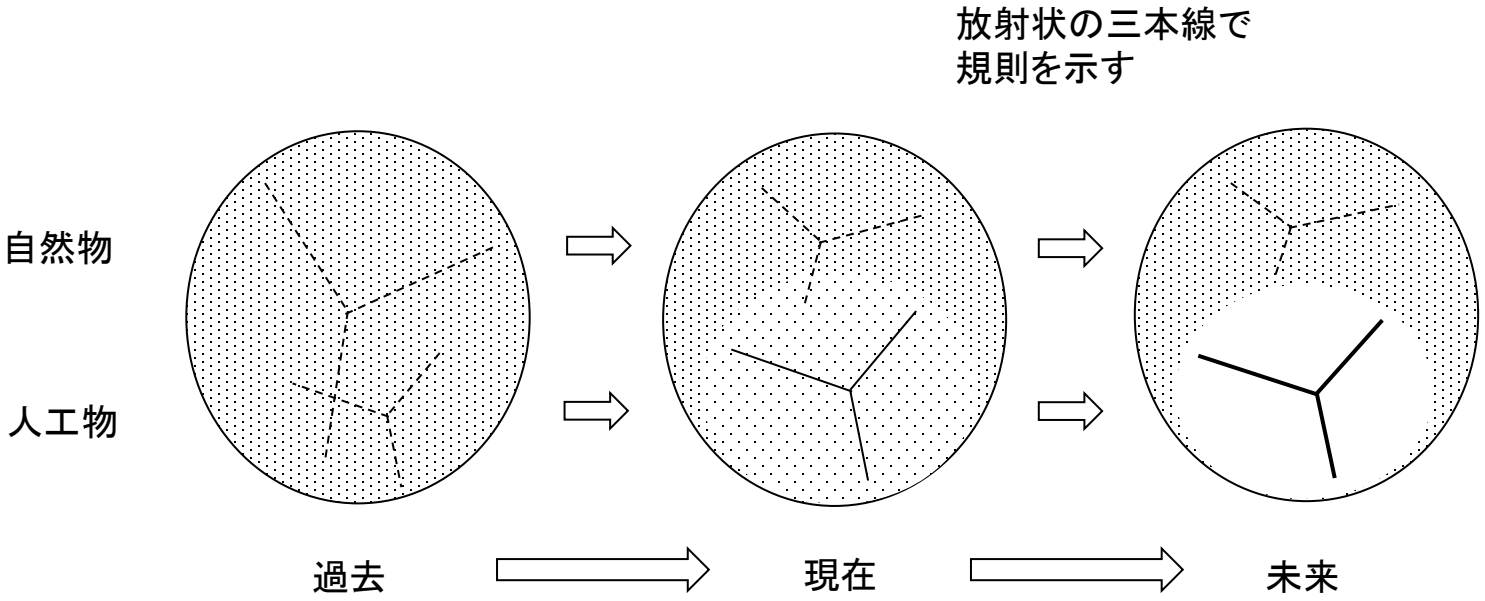
満足は人間的で曖昧、貨幣も少し曖昧、貨幣で見ると不安定化
明確な現実的権利を見るべき、物・時空間の所有量など、生物と同じ、特に政府
政府・地域は貨幣でなく、人・物・時空間などの増減と出入りを分析すべき、生物と同じ
人口と個人の生満足は基本的に対立、数が増えすぎて生息状況が悪化し減少
生息状況改善が必要、増える前に戻すのは衰退で誤り、人口減でも改善とは限らない

応用
学問・産業の歴史と未来の発展



今までは現実的な自然科学と第一次・第二次産業で発展
途上国は先進国まで発展可能、先進国は今のままでは発展困難
自然科学・医学・当解析で、人間に関する学問を生現実化・生物化・明確化すべき
第三次産業と都市も、現実的解析と明確化・規則性向上により発展が可能
人間的無駄を排除、資源を現実的に必要な箇所へ移す、人間的作業を現実化、再教育が必要

応用
自然物・人工物の歴史と未来の発展



今までは人工物の進化と規模拡大で発展
人工物の規模拡大はこれ以上困難、今後は明確化・規則性向上で発展
科学技術の高度化、多量人工物の単純化、自然物との区分、大都市化、農業高度化など
生物として変化は必須、持続でなく規則と推測が必要、時間変化に追従
人間的な環境思想で発展を妨げるのは誤り、人口増と生満足増加を求める

目次

- 概要
- 基礎
- 人間の各機能
- 精神疾患・問題行動
- 社会
- 応用
- **結論**

結論
解析の結論

- 人間の包括的・網羅的な理論解析を行う事ができた。情報処理の手法を応用した厳密な演繹的論理構造を積み上げ、人間に関する様々な事象まで解析を当てはめる事ができた。内容は現実的であり、自然科学・医学に近づく事で学問全体を繋げる事ができた。これにより学問全体としての整合性を与える事ができた。
- 人文・社会科学において今まで見えなかった基本構造が見えた。これには精神疾患、経済、主権国家、産業などがある。今まで明確に説明できなかった事が説明できた。当解析により明確な構造が示せるので、人文・社会科学における曖昧な人間的概念は不要になる。
- 解析の中核構造には認識・現実・規則・開放・実規則化などがある。中核構造だけでも人間に関する事象への当てはめまで理解できる。しかし細部を追うには中核構造以外をたどる必要があり、容易ではない。
- 重要なのは全体を貫く明確な論理構造の存在である。もし万一細部に誤りがあっても、誤り自体が明確になるので論理構造を追えば補正できる。論理や言葉の定義を厳密に扱う必要がある。応用の理解よりも論理構造を追うことが重要であり、応用を表面的に見るだけでは意味がない。曖昧な人間的概念で当解析の正誤を判定しても、曖昧な議論にしかならない。

結論
解析の結論

- 当解析の大半は情報処理に基づく定性的な分析である。数学の利用は少なく、定量的な分析はほとんど行っていない。情報処理自体が数学に近いため、当解析は定量的に利用できる。解析の内容を実際に利用するには、定量的な分析が必要になる。
- 理論解析として必要となる、全体としての整合性と具体性は確保できた。細部の事象の検討は十分とは言いにくいが、具体的な検証が可能な状態にはある。当解析に対しては論争でなく具体的検証を行うべきである。自然科学はそうやって進歩してきた。人間的な論争になると元の曖昧な人文・社会科学に戻ってしまう。
- 人間が今後も発展するためには、人間を生現実化しなければならない。人間的・感情的発展は誤りであり、現実的・生物的発展が正しい。現実的な自然科学・医学・科学技術が今まで発展してきたように、人間も生現実化すれば発展ができる。人間的な無駄を排除すべきである。しかし生現実化には認識の修正が必要で容易ではない。自然科学・医学の近くで人間を解析し、学問全体の枠組みから変えるべきである。専門分野の閉鎖枠を外した開放的な理解が必要である。
- 論争により非現実的な認識を否定するだけでは意味がなく、正しい認識を作成しなければならない。人間を生現実化した正しい認識を作成する必要がある。そのためには当解析の具体的検証が必要である。現在の平均的認識でも正しさは不十分であり、その誤りを指摘するだけでは意味はない。

結論
認識・知性の修正

- 発展のためには徹底した「異常」な現実性を受け入れる必要があり、認識の修正は容易でない。「異常」に現実的でも、普通より精神疾患・問題行動からは遠くなる。認識と知性は長い時間を掛けて作り上げてきたものであるため、それを修正するのにも長い時間がかかる。
- 人間は強力な知性により認識を制御できる。強力な知性は人間の長所だが、常に正しく働くようにはできていない。科学技術も後天的に得られたものであり、正しい知性が必要である。
- 認識の修正において、正しい認識が不十分なまま現実化すると認識破壊・うつが起こる可能性がある。現実から人間まで開放した正しい認識を作りながら、壊れない範囲で修正する必要がある。認識破壊・うつを回避するには現実的・生物的認識を作り上げる必要があり、簡単ではない。
- 人間的な認識は誤りであり、現実的・生物的な認識が正しい。曖昧な人間を生現実化・明確化する必要がある。人間は通常の動物とは異なるが知的生物であり、生物的理解が必要である。人間・現実の全体を修正すべきである。人間の生現実化により正しい認識に修正すれば、人間・現実全体で整合する。生息状況を見る必要がある。認識に関しては、異常でなく正誤や現実的問題を見るべきである。問題は異常でなく非現実・不整合である。認識・知性の修正対象として、生自己・「自己の生息状況」の理解が重要である。

結論
認識・知性の修正

- 人間的で曖昧な感情・満足は誤りであり、現実的・生物的で明確な感情・満足が正しい。現実と整合する生感情を理解する事が重要である。感情種類の開放・無認識感情・地味感情などにより、生感情が理解できる。
- 曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。満足感でなく自己の生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。誤った認識正評性は生不満に繋がるため、認識満足は認識不満よりも問題が大きい。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。誤りを修正して生満足化する必要がある。満足は人間の一部で曖昧であり、満足を見るだけでは生満足は分からない。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。すべての満足から一歩引き生不満を見る必要がある。人間の生現実化により生満足を得られる事を理解できれば、認識の修正が可能になる。

結論
認識・知性の修正

- 近現実から生人間と遠方へ開放的に理解すべきである。開放的理解によりすべての実区分で生満足を得るのが正しい。感情種類は多数存在し、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤りである。諦観などの地味感情まで含めて開放的に理解する必要がある。無認識感情も重要であり、感情・満足にこだわらず一歩引けば開放的に理解できる。「自然の中で現実を見てこだわりを無くす」という方法なら、比較的容易に修正できる。
- 普通から離れた正しい知性と認識を作る必要がある。人間的こだわりや、スポットライト的な閉鎖満足は誤りである。この点から見ても、文芸系の多くは誤りであり、普通の認識も半分程度は誤りである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。
  様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤りである。人間的で曖昧な普通の満足でなく、現実的で明確な生満足が正しい。普通の満足でなく自己の生息状況を見るべきである。バラバラな普通の満足は、開放現実から見る事で整合できる。すべてのこだわりを無くして現実を見れば、バラバラの認識は収束する。

結論
まとめ

- 現在でも現実的に人間を見れば様々な問題が存在する。精神疾患・犯罪・引き籠り・浪費などの問題は多数ある。普通の人間でもそれに近い話は無数にある。現実的に社会を見ても様々な問題が存在する。過度の貧富・戦争・環境問題・人口問題などの問題も多数ある。
- 今までは人間について良く分からないので仕方のない部分もあった。しかしそのままでは良くない。現実を直視して改善すべきである。当解析を元に現実的・具体的分析をすれば、これらの問題を改善できる。ただし当解析は難解で普通から遠いため、問題の改善は容易でない。当解析は現代人にとって厳しい内容である。
- 人間的でなく現実的・生物的に見る必要がある。人間的満足は誤りで、生息状況が正しい。現実を見るだけでなく、論理的に解析して「理解」できないと改善できない。根本的な現実的解析が必要である。当解析を元に具体的事象を詳細に分析して、はじめて問題の改善が可能になる。
- 当解析は「人間的で素晴らしいもの」でなく、「現実的・論理的で役立つもの」である。必要なのは「素晴らしい曖昧な人間」でなく「現実的・明確で整合した真の人間」である。当解析が示す行先は現実的・生物的で整合した世界であり、普通から遠い世界である普通から遠いため現実的・論理的に見ないと意味が分からない。実際には普通レベルから問題の多い現代を、当解析により現実的に改善できる。